



## Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（芸術工学）
報告番号	甲第 1494 号
学位記番号	第 11 号
氏名	永瀬 智基
授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位論文の題名	建築メディアにみる空間の情報伝達に内在する作法 A STUDY ON THE NATURE OF EXPRESSION ABOUT SPACIAL INFORMATION IN ARCHITECTURAL MEDIA
論文審査担当者	主査： 久野 紀光 副査： 溝口 正人、伊藤 恭行

平成26年度博士学位論文

## 建築メディアにみる空間の情報伝達に内在する作法

A Study on the Nature of Expressions about Spatial Information in  
Architectural Media

主 査 久野 紀光 准教授

副 査 伊藤 恭行 教授

副 査 溝口 正人 教授

提出年月日 平成27年3月3日

学位取得年月日 平成27年3月25日

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 芸術工学専攻 博士後期課程

学籍番号 125803

氏 名 永瀬 智基

## 目次

### 第1章 序論

---

#### 1節：背景と目的

- 1-1-1. 建築と情報…6
- 1-1-2. 身体を経験と情報を介した経験…12
- 1-1-3. 研究の目的…15
- 1-1-4. 研究の題材…17

#### 2節：研究の位置づけ

- 1-2-1. 情報を介した空間の理解に関する既往研究…18
- 1-2-2. 身体を経験による空間の理解に関する既往研究…19
- 1-2-3. 本研究の立ち位置…24

#### 3節：研究の構成

- 1-3-1. 研究の構成…26

### 第2章 写真による建築空間の表現方法

---

#### 1節：序

- 2-1-1. 写真について…30
- 2-1-2. 本章の目的…31

#### 2節：写真の組合せによる情報伝達

- 2-2-1. 分析の目的…32
- 2-2-2. 共有写真および組写真の抽出…33
- 2-2-3. 共有組写真の抽出…34
- 2-2-4. 写真の属性に関する分析…35
- 2-2-5. 写真の展開形式に関する分析…37
- 2-2-6. 共有組写真の構成…38
- 2-2-7. まとめ…41

#### 3節：写真の掲載順による情報伝達

- 2-3-1. 分析の目的…43
- 2-3-2. 写真の順列／属性の定義…44
- 2-3-3. 分析対象…45
- 2-3-4. 分析の方法…45
- 2-3-5. 写真群内の属性の順列…46
- 2-3-6. 写真群の順列…48

2-3-7. まとめ…54

4節：結

2-4-1. 写真による情報伝達のまとめ…55

### 第3章 配置図による建築空間の情報伝達

---

1節：序

3-1-1. 配置図について…61

3-1-2. 本章の目的…61

2節：研究の方法

3-2-1. 分析対象…62

3-2-1. 分析方法…63

3節：対象事例の分析

3-3-1. 図上方位…65

3-3-2. 描画位置…68

3-3-3. 配置図の描画表現…72

4節：結

3-4-1. 本章で得られた知見のまとめ…77

### 第4章 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

---

1節：序

4-1-1. 分析の目的…80

2節：建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

4-2-1. 写真および配置図による情報伝達の作法の照合…81

3節：結

4-3-1. 本章で得られた知見のまとめ…85

## 第5章 結論

---

### 1節：序

5-1-1. 本研究の結論…87

### 2節：今後の課題と展望

5-2-1. 今後の課題と展望…88

## 第6章 室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素

---

### 1節：序

6-1-1. 眺めの選考好について…90

6-1-2. 本章の目的…91

### 2節：研究の方法

6-2-1. モデルの初期設定…92

6-2-2. 実験装置について…92

6-2-3. 実験手順の要領…93

6-2-4. 実験の概要…93

6-2-5. 実験の被験者…94

### 3節：実験結果および分析

6-3-1. 実験①の分析…95

6-3-2. 実験②における全モデル共通の傾向…96

6-3-3. 視点群による属性分類…97

6-3-4. 視点群による分析…99

6-3-5. 視点群属性⑤の分析…105

6-3-6. 各モデルに関連する指向のまとめ…105

### 4節：結

6-4-1. 本章で得られた知見…107

6-4-2. 考察…107

## 参考文献

---

参考文献…110

## 第1章 序論

### 1節：研究の背景と目的

#### 1-1-1. 建築と情報

#### 1-1-2. 身体を経験と情報を介した経験、及び情報伝達

#### 1-1-3. 研究の題材

#### 1-1-4. 研究の目的

### 2節：研究の位置づけ

#### 1-2-1. 情報を介した空間の理解に関する既往研究

#### 1-2-2. 身体を経験による空間の理解に関する既往研究

#### 1-2-3. 本研究の位置づけ

### 3節：研究の構成

#### 1-3-1. 本研究の構成

## 第1章 序論

### 1-1. 研究の背景と目的

#### 1-1-1. 建築と情報

“おのおのの動物は、直接の観察によっては近づきえない、自分の主観的世界の中に住んでいる。この世界は、外界からきて感覚器官で拾いあげられるメッセージという形で生物に伝えられる情報から成り立っている。”

上記のH・W・リスマン<sup>注1.1)</sup>の言葉を引用しながら、エドワード・ホールは、“人間はあらゆる感覚器官から得られる情報を手掛かりに、自らが身を置いている空間について理解する”ことを説いている<sup>注1.2)</sup>。とりわけ建築の空間の場合は、“建築を理解することは、ある種の外部的な特徴によって、建物の様式を判断するといったような、建築を見るだけでは不十分であり、経験をすることが必要である”とラスムッセンが指摘する通り<sup>注1.3)</sup>、“非常に特殊な機能的芸術”<sup>注1.4)</sup>としての性質を有しているため、他の空間の理解とは異なるメカニズムによって理解されていると予想される。

ここで、ラスムッセンの言う“経験をすることが必要である”“非常に特殊な機能的芸術”としての建築とはどのようなものであるかについて検証してみる。

ラスムッセンは上記の“経験”について以下のような具体例を紹介している。

“室内に住み、どのように周囲が閉鎖されているかを感じ、部屋から部屋へどのように自然に通じているかを観察せねばなりません。テクスチャの効果を知り、色が使われる理由や部屋の選択が窓や太陽に関する部屋の方位に、どのように依存するかを発見せねばなりません。・・・(中略)・・・音響が空間の概念の中につくる大きな相違を経験せねばなりません。・・・(中略)・・・音響がどのように反応するかを経験せねばなりません。・・・(中略)・・・つまり、人間の環境の中へ秩序と関連性をもたらす”<sup>注1.5)</sup>

つまり、ラスムッセンは建築が各部屋や建物ごとに完結したものではなく、部屋どうし、あるいは建物と周辺環境、自然環境との関連を理解することこそが建築空間を経験することであると捉えていると言える。

注 1.1) H,W,Lissman : “Electric Location by Fishes”, Scientific American, pp.56~65, 1963.3

注 1.2) エドワード・ホール：かくれた次元，日高敏隆ほか 訳，みすず書房，pp.62~110, 1970

注 1.3) S・E・ラスムッセン：経験としての建築，佐々木宏 訳，美術選書，p.33, 1966.5 (傍点引用者)

注 1.4) S・E・ラスムッセン：経験としての建築，佐々木宏 訳，美術選書，p.10, 1966.5 (傍点引用者)

注 1.5) S・E・ラスムッセン：経験としての建築，佐々木宏 訳，美術選書，pp.33~34, 1966.5

一方で、富永は“（前略）いずれにしろ大事だと思われることは建築の空間が空間芸術でありながら、絵画や彫刻と異なつて一度に把握されるのではなく、音楽のように運動とともに習得されるほかない現象である・・・”と著書の中で述べていることから<sup>注1.6)</sup>、断片的な経験では建築を理解するには不十分であり、時間の変化に伴う継起的な経験こそが建築の本質であると述べている。つまり、富永は建築空間における体験とは時間を含む四次元的な現象であると捉えていると言える。

あるいは、先にも引用したように、エドワード・ホールによれば、“人間はあらゆる感覚器官から得られる情報を手掛かりに、自らが身を置いている空間について理解する”ものであると述べている。例えば、絵画の場合は視覚的な情報に、音楽の場合は聴覚的な情報（コンサートなどの場合は視覚的な情報も加わる）に、よつてその現象を知覚し、理解することになるのだが、建築の場合は、全ての感覚器官によつて得られる情報の総合によつて理解されることとなる。すなわち、エドワード・ホールはラスムッセンや富永のような、現象的あるいは概念的な経験ではなく、あらゆる感覚器官によつて刺激を受容することこそが経験であるとし、生物学、動物行動学的な立ち位置から経験について述べている。

以上のように建築における経験について述べられている例は枚挙に暇が無い。しかし、五十嵐が“展覧会で現物が巡回できる絵画や彫刻と違い、一般的に建築は不動である。ゆえに現地を訪れるのでなければ、建築の場合、何らかのメディアを通して情報を得るしかないという状況もメディアを強化させている”と指摘している通り<sup>注1.7)</sup>、我々が実際に経験することのできる建築はごくわずかであることは予想に難くない。それにも関わらず我々が遠く離れた場所の建築や、あるいは現存しない建築について知ることができるのは、メディアに掲載されている図面や写真などの情報を介して空間を類推していることに他ならない。このように、メディアを介した理解とは建築に限ったことではないが、建築の場合は上記の五十嵐の指摘から分かるように、他に比べてメディアを介した理解によるところが大きいと言える。つまり、建築は何らかの情報として発信され、それらを受信することで我々は建築を理解するメカニズムが成立していると言える。

注 1.6) 富永謙：建築巡礼 12 ル・コルビュジェー空間と人間の尺度一、丸善、1989

注 1.7) 五十嵐太郎：情報・同時性・建築—建築をめぐるジャーナリズム、建築雑誌 Vol.14, No.1443, pp34~37, 1999

ここで、このような情報の発信や情報による空間の理解がどのように発展を遂げてきたのかを黒田の著書<sup>注1.8)</sup>をもとに簡単に整理する。

まず、旧石器時代の洞窟に人間と獣の狩猟の情景などが描かれていたことから、四大文明が誕生する以前から人類はすでに自らの体験や当時の社会現象を壁画という情報として描き遺していたことが確認されている。四大文明発祥以前に描かれるものは生活の一部としての人間や動物が描かれることが多く（図1.1）、それらは抽象的なイメージ画であり、さらに建築が主題として描かれるものは数少なかった。ところが、イメージ画として描かれていた人間や動物は、ギリシャ時代からローマ時代になるにつれて、曖昧ではあるが透視図的な概念が用いられた描画表現によって、人間や動物だけでなく建築のような構築物が描かれるようになる（図1.2）。

そして、中世末期頃から遠近法の概念が絵画に本格的に導入されるようになり、建築を主題として描かれる絵画が増大した。西欧ではひとつの情報媒体として絵画が定着したが、以降は近世まで透視図法の発達に伴い、抽象的に描かれていたものが次第に写実的に描かれるようになる（図1.3）。これは、実際の視覚体験をより忠実に再現した情報として変換して発信しようという意図によるものと捉える事ができる。しかし、近代からは様々な芸術運動が起り、遠近法の概念よりも各芸術運動における主張が優先され、実際の視覚体験とは異なる絵画が多く描かれるようになる（図1.4）。一方、中国や日本においては西欧のように水平視による透視図ではなく、俯瞰視による斜投影図が普及した（図1.5）。また、絵巻物や洛中洛外図のような異時同図法という、ひとつの絵の中に、様々な視点から見る視覚像が存在する日本独特の画法もみられる。しかし、日本においても江戸時代になると西欧と同様の透視図による写実的な絵画も多く描かれるようになる。このように、実際の視覚体験をひとつの情報にまとめようとする意図のもとに透視図による写実的な絵画を描いた西欧人と、実際の視覚体験ではあり得ない視点から、生活や風景などの全体像をひとつの情報にまとめようとする意図のもとに俯瞰視による斜投影図を描いたり、あるいは時間的な経験の変化をひとつの情報にまとめようとする意図のもとに異時同図法を用いた日本人との間で、空間に対する理解や他者に対する情報の発信方法に違いがみられることが窺える。

注1.8) 黒田正巳：空間を描く遠近法，彰国社，1992



図1.1 シカ狩り(左) (出典:注1.8 p14)

図1.2 フェニックスとアキレス(右) (出典:注1.8 p31)

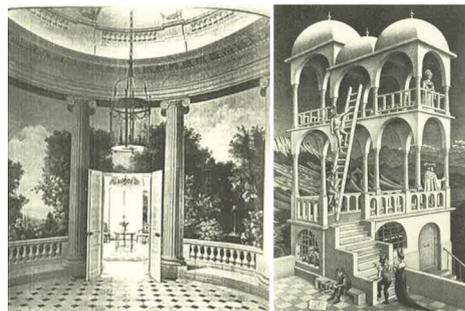


図1.3 シャルグラン：プロヴァンス伯夫人食堂(左)  
(出典:注1.8 p96)

図1.4 エッシャー：望楼(右) (出典:注1.8 p125)



図1.5 文妃帰漢図 (出典:注1.8 p147)

19世紀に入ると、新しい情報媒体が誕生する。写真の撮影装置の原理は千年以上前から絵画などに用いられてきたのだが、1840年頃にフィルムによる最初期の写真が撮影されるようになり、急速に写真技術は発展を遂げることとなる。最初期の写真は露光時間が長かったため、人間などの動いている物体を撮影することは困難であり、不動である建築が多く撮影されていた(図1.6)。また、写真の発明によって建築空間を多くの人々に伝達することが可能となり、建築雑誌などのジャーナリズムも大きく発展を遂げる。つまり、不動の空間しか被写体として選ぶことができなかつた写真と、より写実的な情報媒体を必要としていた建築の間には互いに利用し利用される「共犯関係」が成立していたのである<sup>注1.9)</sup>。写真には色味や形のひずみなど、実際の視知覚による体験とは異なる点もあるのだが、他のあらゆる情報よりも人間の視覚的な経験に近い情報であると考えられるため、絵画における透視図以来の新しい情報媒体として建築以外の分野でも有用性が認められた。

以上の情報媒体はいずれも複写形式であるが視覚体験を視覚象とは異なる形で情報化しているものもみられる。例えば、地図は人間には体験することできない無限遠からの空間の形状を描き表わしたものであり、空間を記号として描き表わしたものである。地図の中でも最も古いものの1つとして伝わるバビロニアの世界地図は、バビロンを中心として周辺の都市国家や河や海、山などの位置情報のみが描かれた抽象的な地図である。

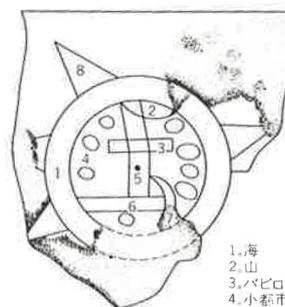
(図1.7)注1.10)。やがて測量技術の発展、天動説から地動説への転換などを経て様々な描かれ方に変化してきたが、いずれも己を中心として周囲に広がる世界の中で、己との位置関係などを伝達しようとする意図のもとに描かれている。現代では無限遠の視点からの視覚像で描かれたものが一般的であるが、公共交通機関の路線や停留場所の位置関係のみを抽象的に描いた路線図や、主要な目的地とそれらまでの動線のみを抽象的に描いた観光マップのように、情報を取捨選択したものも多くみられる。これは、バビロニアの世界地図などと同様に、伝達したい目的に応じて描かれるイメージ図である。

また、地図と類似した情報として伽藍絵図があげられる。日本における伽藍絵図は地図のように限定された範囲の全体像を上空からみたように描かれているのだが、建物は無限遠からの

注1.9) 福屋粧子：フリーズフレームスー写真と建築の横断線一、10+1 No.14, pp.230~241, INAX 出版, 1998.10



図1.6 アドルフ・ブラウン：パリ・オペラ座  
(出典：注1.9 p234)



- 1. 海
- 2. 山
- 3. バビロン
- 4. 小都市
- 5. ユーフラテス川
- 6. 湿地帯
- 7. ペルシア湾
- 8. 未知の大陸

図1.7 バグロウ：バビロニアの地図  
(出典：後述の注1.26 p40)

視覚像では描かれていない。建物は、図上で様々な方向に倒されて描かれていることから、複数の視点から人間が視覚的に経験した建物の姿が描かれていると久野によって報告されている<sup>1.10)</sup>。ここれも日本絵画独特の異時同図法のひとつと捉えられる。

さらに、建築分野における独特の情報として建築図面があげられる。建築図面は建築分野における専門性が高いため、他の情報媒体とは異なる立ち位置であると考えられるが、建築分野の中においては欠かすことができない重要な情報媒体である。日本における図面の起源は、施主の意向を反映した絵図であり、その多くは建築の完成後に破棄されており、日本に現存する最古の図面は奈良正倉院所蔵の「東大寺講堂院図」（760年頃）とされている<sup>注1.11)</sup>。元来、建築の施工のために必要な情報であったため、図面としての体裁は現在に至るまでに大きな変化は見られないと考えられるが、まだ完成していない建築の完成した姿を想像して情報化している点は、実存する空間を描いた絵画や地図などとは異なる特殊な情報媒体であると言える。

そして、建築空間を言語として情報化することも現代においては一般的な手段となっている。エイドリアン・フォーティエは著書の中で、建築作品による言説はその作品の「現実」の不十分な反映でしかないが、言語それ自体のひとつの「現実」を構成しているとし、さらに“言語は建築の一部であると同時に、疑いもなくそれ自体一つの体系だからである”と指摘している<sup>注1.12)</sup>。このような言語情報は他の視覚的な情報とは異なり、視覚的な情報としてのテキストや、聴覚的な情報としての音声言語、あるいは触覚的な情報としての点字など様々な感覚器官によって受容される特殊な情報媒体である。さらに、視覚的な情報であったとしても絵画や写真のように直接的に空間の視覚像が情報化されたものではなく、テキストを読解することで空間を類推するものであるため、この点においても特殊な情報媒体であると考えられる。

さて、以上のように建築に関する情報媒体は幾種かみられるが、それらの情報媒体が我々に刺激を伝達する際の形式も多種多様である。これの情報はどのような方法で我々に伝達されるのかについても整理する。

まず、現代において主要な建築メディアとしてあげられるのが書籍である。古くは前1世紀のウィトルウィウスによる建築

注 1.10) 久野紀光：建築群に対する眺望行為とその意味 第4章，東京工業大学学位論文，2003

注 1.11) 中村義平二：知って得する建物の知 138 建築図面の歴史 現物から次々「写す」標準化の技術も発達，住宅新報 2014年6月3日号，住宅新報社，2014.6

注 1.12) エイドリアン・フォーティエ：言語と建築—語彙体系としてのモダニズム—，坂牛卓ほか 訳，pp.16～17，鹿島出版会，2006.1

注 1.13) Marcus Vitruvius Pollio : De Architectura libri decem, BC30～

書<sup>注 1.13)</sup>が建築理論書という形式でメディアとしてまとめられた最古の例であるとされ、以降も多くの建築論がまとめられている。いわゆる建築理論書ではないが、複数の紙面情報をまとめるという形式のメディアとして、日本では図会集のようなものや、西欧ではレオナルド・ダ・ヴィンチのノートに建築に関する内容が多く描かれている例もみられる。このように、近代以前の建築書籍は、国や地域などで限定されたメディアであり、ウィトルウィウスによる建築書のように国際的に扱われる書籍は数少なかったと考えられるが、19世紀の印刷技術や輸送技術の発展により、短期間で大量印刷や長距離輸送が可能となり、書籍は国際的なメディアへと成長を遂げ、高速で広い範囲での情報の共有が可能となった。

やがて20世紀末には、インターネットの普及によってリアルタイムで遠く離れた場所の情報を取得することが可能となり、より高速での情報の共有が可能となる。またインターネットでは動画などの情報の発信が可能であり、書籍よりも幅広い利用方法が可能なジャーナリズムであり、書籍と同様に主要なジャーナリズムとして展開している。さらに、現代ではIT産業の急速な発展によりタブレットPC上で読書が可能な電子書籍が生み出され、書籍に変わる新たなジャーナリズムとして普及し始めたことで、メディアの形式は大きな転換期を迎えている。

また、美術館などで行われる美術作品の展示は、同様のテーマの絵画が一堂に会して鑑賞されるというものであるため、ある種のメディアであると捉えることができる。

このように多種多様な形式で建築に関する情報は伝達されているのだが、それらの建築に関する情報は建築家や建築学生のみならず、建築を専門としていない人々の目に触れる機会も多くなりつつある。例えば、建築の専門性に特化せずに絵画などの芸術作品やインテリア、ファッションなどと建築を等価に扱い、生活の一部として建築を紹介する情報誌は近年多く発刊されており、世間で話題となっている建築の写真やイメージパースを取り上げながらどのような議論が行われているのかを一般社会に紹介する新聞や、不動産の広告上においても完成予想パースや完成予想間取り図を紹介することが通俗となりつつある。さらに、これらの静止画像だけでなくTVドラマや映画の舞台として建築が使われることも多い。

注 1.13) Marcus Vitruvius Pollio : De Architectura libri decem, BC30～

ここで、浜口が“外から、建築というものをみる一般の社会人の見方にも、大きくひびいてゆく、総合的性格をもった建築ジャーナリズムが、近い将来にできるかどうか、ということは文明における建築の、真・善・美の有機的総合の正否をにぎるひとつの鍵だともう”と指摘する<sup>注1.14)</sup>一方で、原は“一般論、つまり『外から』とらえる試みが批評家のいまもつぱらとするところになっている”“本来あるべき創作論つまり『内からの』批評の代役を果たしている”とに対して違和感を示しており、さらに“『内から』迫るはかなさの体験を継続すること以外に、少なくとも創作の道はひらかれない”と指摘している<sup>注1.15)</sup>。このように、メディアを通じて社会性を求める試みについての対立する議論はみられ<sup>注1.16)</sup>、未だにある結論には至ってはいないものの、メディアが建築の専門分野で閉じられた活動ではなく、一般の人々にとっても重要な活動であることがうかがえる。

注 1.14) 浜口隆一：展望—現代文明の中の建築，新建築 1964年6月号 p.234, 1964.6

注 1.15) 原広司：建築ジャーナリズムの動向，『建築年間 1965』建築ジャーナリズム研究所，pp.99～101, 1965

注 1.16) 下線部は、竹内正明：戦後日本における建築ジャーナリズムへの批評的言説について，日本建築学会計画系論文集 第 590 号，pp.137～143, 2005.4 を参照

注 1.17) ヴァルター・ベンヤミン：図説写真小史，久保哲司 訳，筑摩書房，p.45, 1998

## 1-1-2. 身体を経験と情報を介した経験、及び情報伝達

ベンヤミンが“絵とか、とりわけ彫刻とか、いわんや建築は、実際に見るよりも写真で見たほうが理解しやすい。”と指摘している通り<sup>注1.17)</sup>、建築はそれらの変換された情報（ここでは写真に限ってであるが、）のほうが、実際に建築空間を体験するよりも分かり易い場合もあり得る。ただし、何を以て分かり易いと言われているのかは言及されておらず、果たして、その分かり易さが実際の空間体験と共通しているのか、あるいは異なるものなのかの検討もなされていない。

情報を介して建築を理解することが日常化している状況下で、身体を経験による空間の理解と情報を介した空間の理解との間に乖離が生じていることは、多くの建築家や建築批評家によって指摘されている。例えば福屋は“1839年の写真の不明瞭なく発明>以来、近代における写真と建築は、ともに時代の表現の場として、手に手を取り合って発展を遂げてきたと言えるだろう。（中略）しかし、両者が異なるメディアである限り、その

2つの思惑は必然的にすれ違わざるを得ない。その後、写真と建築という2つの表現は、それぞれが固有の文法を持っているながら、その2つがぶつかりあうはずの場、つまり「<建築>が撮られ」「<写真>が撮る」場であるはずの<建築写真>というフィールドにおいて、まるでその両者が宙吊りになったような、あいまいで巨大な飽和点に達してしまった。”と述べており<sup>注1.18)</sup>、互いに利益を供した建築と写真の間では両者による表現は異なっており、両者にはそれぞれに固有の表現の方法が存在していると報告している。

また、エイドリアン・フォーティは、“建築作品について言われたり書かれたりする事は単にその作品のトレースにすぎず、常にその作品の「現実」の不十分な反映でしかないと言われる。しかし、言語それ自体もまたひとつの「現実」を構成しており、それは他の感覚を通して形成される「現実」と同一ではないにせよ同等なのである。”と述べており<sup>注1.19)</sup>、建築における言説は、その建築についての全てを説明することは不可能ではあるものの、言説には言説でしか伝えることのできない部分もあることを指摘している。

あるいは、原は“建築ジャーナリズムは、<ことば>と<もの>を表現の媒体として成立している不思議な分野である。両者の交流、接近あるいは乖離がそこであからさまに表現される領域である。本来ここでは、両者の関係が検討され、その結果が表現される。”と述べており<sup>注1.20)</sup>、一つの建築における言語情報や図面などの視覚情報の間にも表現には共通性あるいは差異がみられ、そのような両者の関係も含めて表現されることの重要性を指摘している。

また、浜口も“それは、建築ジャーナリズムが多くの項をさき、大きくレイアウトした写真によって、私のなかに、「菊竹清訓作品」として存在していたイメージと現地にやってきて、私がみた実物とが、啞然とするほど違っていたという、ごく単純な、しかし考えてみると驚くべき事実である。”“(前略)私にたいするコルビュジェの衝撃力は、彼の作品の「実物」によってではなく、もっぱら写真と図面などによる作品集という出版活動をとおして伝えられたイメージなり、ヴィジョンによってだということを意味する。”と、菊竹清訓やル・コルビュジェらの作品を具体例にあげながら実際の体験と情報による体験の違いを例示しながら<sup>注1.21)</sup>、さらに、“ちかごろ私の痛感し

注 1.18) 福屋粧子：建築はどのようにして伝達されるか—制度としての建築写真—（第 31 回建築文化懸賞論文入選発表 課題：建築/制度），建築文化 Vol.53 No.616, pp218～224, 彰国社, 1998.2

注 1.19) エイドリアン・フォーティ：言語と建築—語彙体系としてのモダニズム—, 坂牛卓ほか 訳, pp.16～17, 鹿島出版会, 2006.1

注 1.20) 原広司：<もの>と<ことば>, 建築雑誌 Vol.92 No.1129, pp31～32, 日本建築学会, 1977.11

注 1.21) 浜口隆一：建築ジャーナリズム論, 建築文化 Vol.16 No.5, pp33～40, 彰国社, 1961.5

ていることがある。それは建築の実物と、それについて建築ジャーナリズム（建築に関する出版活動、主として雑誌類）の写真や文章によって伝えられるものが、かなり喰いちがったものだということである。・・・（中略）・・・この喰いちがいは本質的なところがあり、喰いちがうのが必然ともいえる。しかし、ここで凝視しなければならぬのは、この喰いちがいが必ずしもはっきりとは意識されず、曖昧のままに見すごされていることである。”と述べている通り<sup>注1.22)</sup>、両者の食い違いについては見すごされていることを指摘している。原や福屋らによる指摘も、写真や図面、テキストといった情報媒体はそれぞれ異なるものの、本質的には浜口と同様の指摘内容であると考えられる。ここで注目したいのは、浜口の論考に対する向井による以下の指摘である。“むろん、浜口のいう建築的なく虚偽の報道もまた建築ジャーナリズムにとっての大きな課題の一つである。だがこれには、＜虚偽＞の内容が上記の一般ジャーナリズムの＜真＞と同様に深くつっこんで究明せられる必要があり、浜口のいうような、ただ単なる作品の実物とイメージとの喰いちがいで、その虚構を告発することはこれに関する幾多の問題をおきざりにするおそれがあるように思われる。”<sup>注1.23)</sup>という指摘の通り、確かに向井の言うところの「虚構の告発」は多く確認されるものの、「虚構」の本質、実際の空間体験と情報を介して理解したイメージとの差異についての検討が置き去りにされてきた。

実際の（建築）空間において、我々人間が空間をどのように認知するのかという問題は、ギブソン<sup>注1.24)</sup> <sup>注1.25)</sup>をはじめとして高橋<sup>注1.26)</sup> や黒田<sup>注1.27)</sup> など多くの研究者による報告がみられる。一方で、情報を介した空間理解についての論考は黒田による絵画や絵図の分析がみられるものの、それらは遠近法に着眼点が絞られたものであり、議論が不十分であると考えられる。

このような、身体の実験による理解と情報を介した理解との不一致を認めたくえて、向井は以下のように指摘している。

“一般に建築雑誌の報道するものは、一部の学術雑誌や研究報告集の類は別として、大なり小なり、すべて疑似イベントであると考えてよからう。建築作品は、もとより写真の詐術により、現実とは全く異なった、視覚的効果の追求の所産として、＜<sup>イメージ</sup>幻想＞であり、論説の類は、主としてこうした作品の＜効能

注 1.22) 浜口隆一：建築ジャーナリズム論，建築文化 Vol.16 No.5, pp33～40, 彰国社, 1961.5

注 1.23) 向井正也：建築ジャーナリズムの聖と俗 - ジャーナリズムとアカデミズム - 建築雑誌 Vol.92 No.1129, pp3～10, 日本建築学会, 1977.11

注 1.24) J・J・ギブソン：生態学的視覚論，古崎敬ほか 訳，サイエンス社，1985

注 1.25) J・J・ギブソン：視覚ワールドの知覚，東山 篤規ほか 訳，新曜社，2011

注 1.26) 高橋鷹志：かたちのデータファイル - デザインにおける発想の道具箱 -，彰国社，1984

注 1.27) 黒田正巳：空間を描く遠近法，彰国社，1992

書>やチョーチン記事など何らかの疑似情報とみなしうるものであることが多い。”注1.23)

以上をまとめると、「A：実際の身体の経験による空間の理解」と「B：情報を介した空間の理解」に間に乖離が生じるのは、情報発信者が「C：他者に伝達するために解釈を施して出力した情報」の内容が、「実際の身体の経験による空間の理解」の内容と異なることが起因しているという関係が成立していると言える（図1.8）。

本研究では、上記のA、B、Cの関係を解明するためにも、基礎的な知見を得るために「C：他者に伝達するために解釈を施して出力した情報」に着目し、他者に向けてどのような情報伝達がなされているのかに興味を据えて論考を進める。

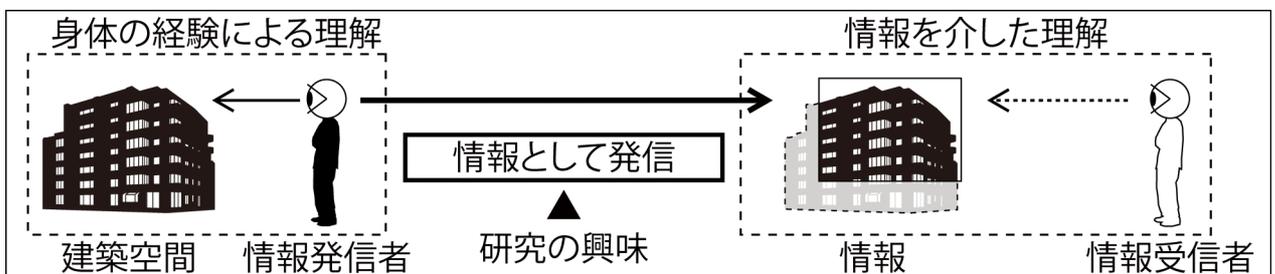


図1.8空間の情報伝達における仕組み

### 1-1-3. 研究の題材

本研究では主要なメディアである建築情報誌（雑誌、写真集、作品集など書籍の体裁によるもの）を対象を絞って論考を進める。建築情報誌には写真、GC、スケッチ、図面、言説など多種多様な情報媒体が掲載されているが、それらは「視覚像による情報」と「記号による情報」の2種に大別することができる。「視覚像による情報」とは、写真やCGパース、スケッチパースなどを指し、これらは視覚的な空間体験の断片が1葉の情報として出力されたものである。対して、「記号による情報」とは、図面や言説などのように特定の記号によって表された、視覚像とは異なる記号として出力されたものである。これら両者においてそれぞれ研究の題材を選定し、分析を施すことで、建築メディアにおける伝達手段に内在する作法を把握する。

ここで、「視覚像による情報」では、写真、CGによるパー

ス図、スケッチによるパース図の3種が主な情報媒体としてあげられるが、これらは情報発信者の視覚体験の断片的な情報と捉えることができるため、情報受信者は情報発信者の視覚体験を追体験することを可能としている。福屋によって建築メディア上で最も多く使用される情報媒体は「写真」であることが報告されており<sup>注1.28)</sup>、さらに五十嵐は、“読者の使用言語に関係なく、瞬時に情報を伝える写真の影響力は無視できない”ことを指摘しており<sup>注1.29)</sup>、情報量の多さのみならず、その情報の性質の観点からみても重要な役割を果たしていることが分かる。また、建築メディアにおけるCGによるパース図やスケッチによるパース図はあくまでも写真の代用として使用されるものと言える。と言うのも、CGによるパース図は、未完成の建築の完成予想イメージを伝達する場面で多く使用されるものであり、スケッチによるパース図は現存しない建築のイメージや、CGと同様に未完成の建築のイメージを伝達する場面で多く使用されるものであると言えるためである。また、写真とは、建築のメディアに限らず様々な分野のメディアにおいて使用されていることから日常的に目にする情報媒体であり、建築の専門的な知識を備えていなくとも理解することができる。さらに、写真は写真家による表現の自由度が高いことから、情報伝達に関する分析を行うにあたって有効な情報媒体であると考えられる。以上より、「視覚像による空間の情報」としては「写真」を題材に選定する。

一方で、「記号による情報」では、図面、言説、概念図が主要な情報媒体としてあげられるが、図面や概念図は基本的に建築の専門的な知識を取得している者のための情報であり、専門的な知識を習得していない者にとっては理解が困難な情報媒体である。また、言説についても簡易な言葉で書かれるものもみられるが、情報を受信する者の想像力次第で理解度は大きく異なる情報媒体である。

ここで、図面のなかでも配置図に注目すると、配置図は当該の敷地と建物の他に周辺の道路や建物、あるいは河川や鉄道など様々な要素が描画されているものであり、我々が日常的に目にしてしている地図や周辺案内図、目的地案内図に似た情報媒体であると言える(図1.9)。これらの地図や案内図は、建物や道路などの空間の形状が簡略化して描かれており、多くの文字情報

注1.28) 福屋粧子：建築はどのようにして伝達されるか—制度としての建築写真—(第31回建築文化懸賞論文入選発表 課題:建築/制度), 建築文化 Vol.53 No.616, pp218~224, 彰国社, 1998.2

注1.29) 五十嵐太郎：情報・同時性・建築—建築をめぐるジャーナリズム, 建築雑誌 Vol.14, No.1443, pp34~37, 1999



図1.9 地図(上)と周辺案内図(下)  
 出典:上 淵上正幸:ヨーロッパ建築案内3, pp20~21, TOTO出版, 2001.01  
 下 名古屋城公式サイト 交通案内図  
[http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/01\\_goriyo/01\\_02\\_access/](http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/01_goriyo/01_02_access/)

を添付することで、伝達したい内容が直接的に表現された情報媒体であるため、（いくらかの抽象化はされるものの）空間のありのままの形状を描画している配置図とは異なる情報媒体であることは間違いない。しかし、日常的に地図や案内図によって空間を想起する経験を経ていることから、配置図によっても空間経験を想起することができると考えられる。これより、配置図は建築の専門的な知識を備えていなくとも理解することが可能な情報媒体であるといえる。さらに、配置図は表現方法が定式化している平面図や断面図とは異なり、描画者による表現の自由度が高いことから、情報伝達に関する分析を行うにあたって有効な情報媒体であると考えられる。以上より、「記号による情報」としては「配置図」を題材に選定する。

#### 1-1-4. 研究の目的

以上より本論文では、“**建築メディアにおける主要な情報媒体である写真と配置図を題材にして分析を施し、空間の情報伝達に内在する作法を抽出し、それらが如何なる建築空間の内容を、如何なる手段によって伝達しているのかを整理すること**”を目的とする。

## 1-2. 研究の位置づけ

建築空間における情報伝達に関する既往研究を整理すると、まず、【A】情報伝達の方法に関する研究と【B】身体の実験による空間の理解に関する研究の2種に大別することができる。Aは様々な情報媒体を読解することによって、情報発信者がどのような方法で情報伝達を試みているのか、あるいは、我々情報受信者がどのように情報を読解し、空間を理解しているのかを解明する立場で論考を行うものであり、一方で、Bは様々な情報を読解することによって、情報発信者が情報を発信するにあたって空間をどのように理解しているのかを解明する立場で論考を行うものである。本節ではそれらについてそれぞれ既往研究を分類し、本研究での各分析の位置づけを試みる。

### 1-2-1. 情報を介した空間の理解に関する既往研究

本項では、【A】情報を介した空間の理解に関する既往研究を整理する。まず、【A】の既往研究で多くみられるのが西洋絵画を分析対象とした研究である。これらは例えば、萩島らによるメッシュ分析（画面をメッシュに区切り、各メッシュに描かれている空間要素を判別する分析）による研究や<sup>注1.30)</sup>、人物などを含めた空間構成要素の位置関係と絵画のジャンルや年代との関連性を解明した三輪らによる研究が主流となっている<sup>注1.31) 注1.32)</sup>。また、西洋絵画だけでなく浮世絵などの日本絵画を分析対象として構図の読解を行った研究もみられる<sup>注1.33) 注1.34) 注1.35)</sup>。これらは、分析方法は各々で異なるものの、出力された絵画の画面内に描かれている空間を構成する要素の種類や、画面内におけるそれらの要素の位置関係の解読が研究の目的に据えられており、絵画自体の描かれ方が研究の興味対象に据えられている（ここまでの既往研究を【A-1】とする）。

次に、【A-1】と同様に絵画の構図分析を行いながらも、絵画の構図と実際の空間を関連付けて論考を行うものもみられる。例えば、歌川広重による浮世絵を分析対象として、描かれている空間構成要素から実際の空間における視点を導出することで、実際の空間に対する構図選定の判断要素を探る意図が窺える<sup>注</sup>

注 1.30) 萩島哲ほか：19 世紀ヨーロッパ風景絵画にみる都市景観に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No.413，pp.83～93，1990.7

注 1.31) 三輪祐二ほか：17 世紀オランダ絵画の中の建築空間，日本建築学会計画系論文集，No.593，pp.73～78，2005.7

注 1.32) 三輪祐二ほか：西洋絵画の中の都市・建築空間—ルネサンスから新古典主義—，日本建築学会計画系論文集，No.613，pp.59～64，2007.3

注 1.33) 坂井猛ほか：広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.461，pp.165～174，1994.7

注 1.34) 鳩心治ほか：広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察，日本建築学会計画系論文集，No.482，pp.155～163，1996.4

注 1.35) 鳩心治ほか：広重の浮世絵風景画にみる樹木の構図の機能に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.507，pp.165～171，1998.5

注 1.36) 清水李太郎ほか：広重の浮世絵における月の景観の構成と視点場探索手法に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No.635，pp.161～168，2009.1

1.36)。同様に近世琉球の絵画としての屏風を分析対象として、描かれている内容から、実際の空間における描画範囲を特定する高屋らの研究もみられる<sup>注1.37)</sup>。これらに共通しているのは、風景画である点であり、実存する空間が描かれている絵画の場合、実際の空間からどのような眺めが絵画として括り取られるのかに研究の興味が据えられることが多い（ここまでの既往研究を「A-2」とする）。逆に言うと、「A-1」に多く類する西洋絵画の研究で対象とされている絵画は宗教画や歴史画が多くを占める、実在する空間との関連を論考することは不可能であるため、必然的に構図の読解に終始することになると考えられる。

また、「A-2」と同様に出力された情報の内容と実際の空間とを関連付けて、どのような眺めが写真として括り取られるのかを論じた研究もみられる。例えば、観光ガイドブックに掲載されている写真を分析対象とした神谷らによる研究と姫野らによる研究がみられる。前者は主題要素（写真のテーマとなっている要素）がどのように配置され構図が構成されているのかを、特に、主題要素の形態と構図の関わりの視点を通して、構図の構成原理を把握するものであり<sup>注1.38) 注1.39)</sup>、後者は新たな写真の構図解析手法（リデュース法）の検証および、その解析により得られる景観の構成特性を明らかにするものである<sup>注1.40)</sup>。これらは、どちらも観光ガイドブックという、建築を専門としていない人々の目にも多く触れる写真、つまり、多くの人々にとって「分かり易い」という共通理解が得られている情報を分析対象とするものである。ここで、建築雑誌に掲載されている写真の構図を分析することで、その建築における眺めの選好傾向とその要因を明らかにした大東らの研究は、個別の建築の配置計画にまで言及する点で、独自性を見出した研究であると言える<sup>注1.41)</sup>。この研究も建築雑誌複数誌に同じ構図で撮影されている同一建築作品を題材とした写真、つまり、複数の写真家や編集者の間で共有されている「分かり易い」構図の写真が分析対象である。（ここまでの既往研究を「A-3」とする）

続いて、建築図面による空間の理解に関する既往研究を整理する。建築図面に関する研究では、コンピューターを用いた平面図上の視深度の解析によって建築内部空間の新しい評価手法の展開を試みる早瀬らの研究や<sup>注1.42)</sup>、被験者に建築平面図から実物の建築を想起させる実験を行い、被験者が解釈した図面の構造と、場所の捉え方との対応を明らかにした横山らによる研

注1.37) 高屋麻里子：近世琉球の絵画資料の表現と建築，日本建築学会計画系論文集，No.609，pp.129～134，2006.11

注1.38) 神谷文子ほか：主題要素の写され方からみた都市景観写真の構図に関する研究—欧米10都市の観光ガイドブックを事例として—，日本建築学会計画系論文集，No.528，pp.179～186，2000.2

注1.39) 日高圭一郎ほか：感情画像情報からみた観光資源に関する一考察，日本建築学会計画系論文集，No.512，pp.213～220，1998.10

注1.40) 姫野由香ほか：観光資源が写された景観画像の構図解析手法，日本建築学会計画系論文集，No.569，pp.139～145，2003.7

注1.41) 大東俊介ほか：2棟建築の写真にみる構図の特性—多棟建築群の配置計画に関する研究 その1—，日本建築学会計画系論文集，No.546，pp.289～296，2001.8

注1.42) 早瀬幸彦ほか、「視深度」による建築平記述・評価の研究，日本建築学会計画系論文集，No.484，pp.123～128，1996.6

究がみられる<sup>注1.43)</sup>。これらは図面からどのように実際の空間を想起するのかに研究の主眼がおかれており、高橋が、図面や絵画などの様々な情報媒体に対して、ゲシュタルト心理学や黄金比、モデュロールなど様々な観点から多角的に論考を行い、空間の「かたち」がどのような意味を内在しているのか、など多くの研究業績とも興味が一致している<sup>注1.44)</sup>（ここまでの既往研究を[A-4]とする）。

また、言語情報による空間の理解に関する研究は多くの研究者によって展開されている。奥山らによる一連の研究は、設計者の言説から、建築家による創作論を整理するものであり、我々に言語情報の意味解釈の契機を示した<sup>注1.45)注1.46)注1.47)注1.48)注1.49)</sup>。これらの研究は、雑誌に掲載されている多数の建築家による設計趣旨分の中から、特定の題目について記述されている部分を抽出し、それらをKJ法（川喜田二郎が考案したデータ処理手法）によって処理することで、特定の題目に関する建築家の設計意図をまとめるものであり、建築家がどのような意図で建築空間を言語情報化したのかを検討するものである。奥山らによる研究が基盤となって、成瀬<sup>注1.50)</sup>や北川<sup>注1.51)</sup>、夏目<sup>注1.52)</sup>など多くの研究者によって発展を遂げている（ここまでの既往研究を[A-5]とする）。

ここまで、[A]に類する既往研究は専ら写真や図面、絵画、テキストなど、は単体の情報を分析対象としたものであるが、幾種かの情報が組み合わせられた場合における空間の理解に関する研究もみられる。例えば、岡河らによるル・コルビュジェの作品集に関する研究のように、特定の建築家の作品集に掲載されている写真や図面、スケッチなどの情報の組み合わせやレイアウトを分析することで、建築家が自ら設計した建築をどのように書籍として表現しようとしているのかを検討するものもあげられる<sup>注1.53)注1.54)注1.55)</sup>。なお、これらの研究は、ル・コルビュジェ自身も作品集の編集に携わっていたことから、特定の建築家の設計および編集に対する思想を理解することに終始しているが、情報による空間の理解に関する研究の発展に寄与するものであると考えられる（ここまでの既往研究を[A-6]とする）。

また、林らによる美術館における展示方式に関する研究は、展示による空間の理解についての論考に主眼がおかれてはいないものの、収集した複数の情報（ここでは主に絵画である）を

注1.43) 横山勝樹ほか、建築図面の解釈にみられる理論構造の分析—空間図式の研究 その2—, 日本建築学会計画系論文報告集, No.420, pp.7~15, 1991.2

注1.44) 高橋鷹志:かたちのデータファイル-デザインにおける発想の道具箱-, 彰国社, 1984

注1.45) 奥山信一ほか、戦後「新建築」誌にみられる建築家の住宅観—建築家の住宅観に関する研究—, 日本建築学会計画系論文報告集, No.428, pp.125~135, 1991.10

注1.46) 奥山信一ほか、戦後「新建築」誌にみられた建築家の都市観—建築家の住宅観・都市観に関する研究—, 日本建築学会計画系論文報告集, No.444, pp.49~59, 1993.2

注1.47) 奥山信一ほか、戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作の主題—建築家の創作論に関する研究—, 日本建築学会計画系論文報告集, No.445, pp.77~86, 1993.12

注1.48) 奥山信一ほか、建築家の言説にみられる現代日本住宅作品の空間モデル—建築家の創作論に関する研究—日本建築学会計画系論文集, No.456, pp.123~134, 1994.2

注1.49) 奥山信一ほか、戦後「新建築」誌における建築家の創作論—建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル—, 日本建築学会計画系論文集, No.477, pp.101~108, 1995.11

注1.50) 成瀬徳行、建築家の言説における自動詞の研究—SD REVIEWに見られる建築家のレトリック(その1)—, 日本建築学会計画系論文集, No.538, pp.277~284, 2000.12

注1.51) 北川啓介ほか、建築評論からみる近代建築の形象要素と計画要素の関係, 日本建築学会計画系論文集, No.627, pp.979~986, 2008.5

注1.52) 夏目欣昇ほか、評論における名詞と修飾語の出現傾向の考察—西洋近代建築評論にみられる単語関係の可視化(その1)—, 日本建築学会計画系論文集, No.632, pp.2249~2256, 2008.10

注1.53) 岡河貢ほか:情報化された建築空間の構成に関する研究—ル・コルビュジェ全作品集の建築写真の連続性について—, 日本建築学会計画系論文集, No.564, pp.363~369, 2003.2

注1.54) 岡河貢ほか:ル・コルビュジェ全作品集における建築写真と図面・スケッチの構成—情報化された建築空間の構成に関する研究—, 日本建築学会計画系論文集, No.607, pp.225~232, 2006.9

注1.55) 足立真ほか:ル・コルビュジェ全作品集における建築写真の対象と構成—情報化された建築空間の構成に関する研究—, 日本建築学会計画系論文集, No.609, pp.193~200, 2006.11

来館者にどのような意図を持って観覧させるのかを論じた研究も、**A-6**と近い立場にあると捉えられる<sup>注1.56) 注1.57)</sup>（ここまでの既往研究を**A-7**とする）。

## 1-2-2. 身体を経験による空間の理解に関する既往研究

本項では、**B**の身体を経験による空間の理解に関する既往研究を整理する。**B**の既往研究の多くは実験倫理的な手法による論考である。例えば、徐らや足立らによる経路選択と空間認知に関する研究のように、被験者に空間を経験させたうえで地図や間取りのスケッチを作成させ、空間の理解のされ方を類型化するものや<sup>注1.58) 注1.59) 注1.60) 注1.61)</sup>、被験者が撮影した写真やアンケートの回答内容から眺望の選好傾向およびその要因を把握するもの<sup>注1.62) 注1.63) 注1.64) 注1.65)</sup>が該当する。これらはいずれも被験者に対象となる空間を経験させた後に写真情報やスケッチ、あるいは言語情報としてその空間についての内容を出力させるという手続きで実験が行われるものである。なお、これらの既往研究は全てケビン・リンチがアメリカの都市において行ったアンケート調査によって「都市のわかり易さ」の要素としてパス（道・道のり）、エッジ（縁、境界）、ディストリクト（地域・特徴ある領域）、ノード（結節点・パスの集合）、ランドマーク（象徴・目印）の5種を導出したことをまとめた著書「都市のイメージ」<sup>注1.66)</sup>から派生したものであると考えられる（ここまでの既往研究を**B-1**とする）。

また、被験者を子供に限定して実験を行うことで、年齢別に得られた実験結果から成長段階でどのような空間の理解の変化がみられるのかを把握するものもみられる<sup>注1.67) 注1.68) 注1.69) 注1.70) 注1.71)</sup>。これらは被験者の属性の違いによる、空間の理解の共通性や相違性について言及するものであり、A-1とは研究の興味を異にしていると捉えられる（ここまでの既往研究を**B-2**とする）。

**B-1**や**B-2**に類する既往研究は実際の空間を実験の対象としているため、本来ならば捨象したいはずの空間要素を捨象

注1.56) 林采震ほか：美術館における展示方式の構成とその特性—美術館の建築計画に関する研究 その1—, 日本建築学会計画系論文集, No.421, pp.63~73, 1991.3

注1.57) 林采震ほか：展示方式による美術館の類型化とその展示手法—美術館の建築計画に関する研究 その2—, 日本建築学会計画系論文集, No.430, pp.77~85, 1991.121

注1.58) 徐華ほか：経路選択の類型—展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究（その1）, 日本建築学会計画系論文集, No.568, pp.53~60, 2003.6

注1.59) 徐華ほか：「認知空間」の構造—展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究（その2）, 日本建築学会計画系論文集, No.596, pp.35~41, 2005.10

注1.60) 徐華ほか：場所の定位—展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究（その3）, 日本建築学会計画系論文集, No.613, pp.95~102, 2007.3

注1.61) 徐華ほか：床面形状の認知—展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究（その4）, 日本建築学会計画系論文集, No.620, pp.73~79, 2007.10

注1.62) 大石洋之ほか：被験者の自由記述回答に基づく地域景観の選好特性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.599, pp.135~142, 2006.1

注1.63) 大石洋之ほか：被験者の撮影写真における選好景観特性の分析, 日本建築学会計画系論文集, No.611, pp.75~82, 2007.1

注1.64) 横田幹朗ほか：住民の撮影写真に基づく水際建築物からの眺望景観の選好特性, 日本建築学会計画系論文集, No.547, pp.87~94, 2001.9

注1.65) 日色真帆ほか：迷いと発見を含んだ問題解決としての都市空間の経路探索, 日本建築学会計画系論文集, No.466, pp.65~74, 1994.12

注1.66) ケビン・リンチ：都市のイメージ, 丹下健三ほか 訳, 岩波書店, 2007

注1.67) 足立孝ほか：小学校児童の空間構造に関する研究（1）—年齢差による空間把握の相違について—, 日本建築学会論文報告集, No.106, pp.44~49, 1964.12

注1.68) 足立孝ほか：小学校児童の空間構造に関する研究（2）—空間把握の型について—, 日本建築学会論文報告集, No.107, pp.54~59, 1965.1

注1.69) 萩原美智子ほか：子供の空間表象にみる住空間概念の発達, 日本建築学会計画系論文集, No.521, pp.153~158, 1999.7

できない、あるいは特定の空間における固有の実験結果しか得られない、などのように実際の空間であるがゆえに様々な条件によって一般性を有した知見を得るにいたらない場合が多い。

一方で、**B-1**と同様に実験心理学的な手法を採りながらも複数棟の躯体模型を用いることで、多様な建物の配置パターンによる状況下での被験者による眺めの選好傾向及び、その要因を把握する研究がみられる<sup>注1.72)</sup> (これを**B-3**とする)。同様に、建築の模型やCGなどによるモデル空間を実験の対象空間としてバリエーションに富んだ空間状況下での実験を行い、被験者による空間の印象評価結果を分析するもの<sup>注1.73) 注1.74) 注1.75)</sup>、(ここまでの既往研究を**B-4**とする)。さらに、模型空間における経験をより現実空間における経験に近づけるためのシュミレーターを開発して、そのそう装置の有用性を実証する一連の研究も興味深い<sup>注1.76) 注1.77) 注1.78) 注1.79) 注1.80) 注1.81) 注1.82) 注1.83)</sup>。(ここまでの既往研究を**B-5**とする)。これらの**B-3**から**B-5**に類する既往研究が**B-1**、**B-2**に類する既往研究と異なる点は、得られた知見の汎用性についてである。先述したとおり、**B-1**、**B-2**に類する既往研究は実際の空間を実験対象としているがゆえに、無数に存在する不必要な条件を混同させながらの実験となり、また、特定の住宅地などが実験場所となり、固有性を排除できない実験となる。一方で**B-3**から**B-5**に類する既往研究は、必要な情報に特化したモデルを作成することができる点や、多様なモデルパターンを作成することができる点で、**B-1**、**B-2**の既往研究ではえることが困難であった一般性を有した知見を得ることが可能である。これらの既往研究では模型やCGによる空間モデルが用いられるため、実際の空間における経験とは必ずしも一致するとは限らないが、**B**の実験心理学的な手法を採る空間認知に関する研究の発展につながる有効な手段であると考えられる。

また、身体の実験による空間の理解二つについては、建築の分野のみならず、様々な分野においても論考が行われている。

例えば、心理学者であるジェームズ・ジェーロン・ギブソンは、知覚心理学的な観点から、人間を含めた動物が空間を理解する際のメカニズムについて精緻な論考を行っている。それらの論考は**B-3**から**B-5**までと同様に実験心理学的な手法によるものであるが、ギブソンの場合は物理学、光学、解剖学、

注1.70) 萩原美智子ほか：描画表現にみる十空間概念の発達—幼児と小学低学年の模型による空間表象との比較—、日本建築学会計画系論文集、No.534、pp.117~122、2000.8

注1.71) 宮本文人ほか：児童の空間認知と小学校校舎の平面構成に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集、No.436、pp.19~29、1992.6

注1.72) 山本陽ほか：躯体群による正面性の発現とその要因—多棟建築群の配置計画に関する研究—その2—、日本建築学会計画系論文集、No.572、pp.75~82、2003.10

注1.73) 松本直司ほか：縮尺模型実験による二棟配置の建物間空間の形態と大きさ感の関係—建築間空間の大きさ感に関する研究—その1—、日本建築学会計画系論文集、No.485、pp.143~150、1996.7

注1.74) 松本直司ほか：縮尺模型実験に基づく二棟配置の建物間空間の大きさ感の予測—建築間空間の大きさ感に関する研究—その2—、日本建築学会計画系論文集、No.602、pp.51~57、2006.4

注1.75) 北川啓介ほか：室空間の奥行き認識の絵画的手がかりの考察、日本建築学会計画系論文集、No.627、pp.987~994、2008.5

注1.76) 谷口汎邦：住宅地における建築群の空間構成と視空間評価予測に関する研究—建築群の空間構成計画に関する研究—その2—、日本建築学会論文報告集、No.281、pp.129~137、1979.\*

注1.77) 松本直司ほか：住宅地における建築群の空間構成の類型化とその視覚的効果—建築群の空間構成計画に関する研究—その3—、日本建築学会論文報告集、No.316、pp.99~106、1982.6

注1.78) 松本直司：住宅地における建築群の空間構成の変化と視覚的効果について—建築群の空間構成計画に関する研究—その4—、日本建築学会論文報告集、No.346、pp.143~152、1984.\*

注1.79) 松本直司：空間知覚評価メディア(シミュレータ)の開発—建築群の空間構成計画に関する研究—その5—、日本建築学会計画系論文報告集、No.403、pp.43~51、1989.\*

注1.80) 松本直司ほか：模型空間知覚評価メディア(シミュレータ)の有効性—建築群の空間構成計画に関する研究—その6—、日本建築学会計画系論文集、No.432、pp.89~97、1992.2

注1.81) 松本直司ほか：二棟平行配置空間の視覚的まとまりについて—建築群の空間構成計画に関する研究—その7—、日本建築学会計画系論文集、No.446、pp.111~118、1993.4

注1.82) 松本直司ほか：二棟・三棟配置の空間構成における建物まわりの視覚評価予測—建築群の空間構成計画に関する研究—その8—、日本建築学会計画系論文集、No.456、pp.153~162、1994.2

生理学といった自然科学などの分野からアプローチした論考であり、それらを知覚研究に用いた点で立ち位置を大きく異にする<sup>注 1.84) 注 1.85)</sup>。また、「環境」自体に動物の行為を誘う様々な情報が内在しており、その情報を刺激として受容して行動しているという、生態光学および整体心理学の既定的概念として提唱した「アフォーダンス理論」は、後に多くの研究者に影響を与えている。また、哲学者であるメルロ・ポンティはデカルトやフッサールなどの多くの哲学者の空間知覚についての言説を取り上げながら、空間知覚についての哲学の読み替えを行い<sup>注 1.86) 注 1.87)</sup>、文化人類学者のエドワード・ホールは科学的小および社会学的な観点から人間と人間、あるいは人間と環境の文化的、社会的関係について論述している<sup>注 1.88)</sup>（ここまでの既往研究を[B-6]とする）。このように、建築分野だけでなく、心理学や哲学、文化人類学など様々な分野によって空間の理解に関する論考がなされている。

以上のように[B]に類する既往研究は、実験心理学的な手法を採ることになるのだが、そのような手法のため実験対象は無数の条件が混同したままとなり、一般性を有した知見が得難い状況である。よって、本研究における身体の経験による空間の理解についての分析も、[B-1]から[B-5]に類する既往研究と同様に空間モデルを作成して一般性を有した知見を得ることを試みる。その中でも、[B-1]や[B-3]に類する既往研究は、アンケートなどを用いて被験者による印象評価が行われることが多く、あらかじめ用意された選択肢の中から最良であると被験者が判断した結果から空間の理解について論考するものである。一方で[B-3]から[B-4]に類する既往研究では無数の選択肢の中から被験者の自由な判断によって選択された結果から空間の理解について論考するものである。このことから、本研究でも[B-3]から[B-4]と同様に自由に選択することが可能な実験の手法を検討することとする。

注 1.83) 松本直司ほか：建物高さ・長さおよび視点高さが異なる場合の二棟平行配置空間の視覚的まとめりー建築群の空間構成計画に関する研究 その9ー，日本建築学会計画系論文集，No.470，pp.131～138，1995.4

注 1.84) J・J・ギブソン：生態学的視覚論，古崎敬ほか 訳，サイエンス社，1985

注 1.85) J・J・ギブソン：視覚ワールドの知覚，東山 篤規ほか 訳，新曜社，2011

注 1.86) モーリス・メルロー・ポンティ：知覚の現象学 1，竹内芳郎ほか 訳，みすず書房，1967

注 1.87) モーリス・メルロー・ポンティ：知覚の現象学 2，竹内芳郎ほか 訳，みすず書房，1974

注 1.88) エドワード・ホール：かくれた次元，日高敏隆ほか 訳，みすず書房，1970

### 1-2-3. 本研究の位置づけ

前2項による既往研究の整理を踏まえて、本研究での立ち位置を提示する。

まず、本研究は情報を介した空間の理解に関する論考を行うものであるため、**A**の既往研究と同じ立場を採るものである。**A**の中でも**A-1**から**A-5**に属するそれぞれ扱う情報媒体は異なるものの、例えば絵画や写真、言語など同一の1種類の情報媒体を分析対象とした論考である。このように、単独の徐放媒体に焦点を絞った既往研究は様々な展開を経て、一定の成果状況に至っていると判断することができる。一方で、**A-6**のように写真や図面など幾種かの情報媒体が紙面上でどのように関連付けられて掲載されているのかに着目した研究は類例に乏しい。しかし、**A-6**に該当する既往研究は特定の建築家の設計思想やメディアに対する編集方針についての論考を行うものであるため、個別解としての知見は得られるものの一般性を有した論考に留まっている。そこで、個別解に寄らず、なおかつ一般性を有した論考を行う必要があると考えられたため、本研究では複数の情報媒体を扱う点において**A-6**と同じ立場を採りながらも、様々な情報誌や様々な建築を研究資料とすることで一般化を試行した。この点において本研究に新規性が認められると考えられる。

ところで、本研究で扱う複数の情報媒体とは、前述した通り写真と配置図である。まず、「視覚像による情報」のなかでも写真や絵画を扱う**A-1**や**A-2**、**A-3**の既往研究は散見される。しかし、これらの研究の大半は構図解析的な分析手法を採るものであり、通例的な分析になりがちである。そこで、本研究では、組写真（写真の組み合わせや順列）に主眼をおいた分析を行うことによって、メディアに掲載されている複数の写真による情報伝達の技法を解明するものである。

一方で、「記号による情報」の中でも、**A-5**のようにメディアに掲載されている言説に着目した既往研究は多くの研究者によって展開されており、言語情報の整理をする手段を見出していることから一定の研究成果が挙げられていると言える。しかし、「記号による情報」のなかでも図面に着目した既往研究は類例に乏しく、さらに描画方法がある程度画一化されている平面図などの図面を分析資料とした場合は、情報伝達ではなく

建築家の設計論についての議論をせざるおえない状況にあると言える。そこで、本研究ではある描画方法にある程度の自由度が認められる「配置図」を分析対象として、複数の描画者のあいだで共通する情報伝達の技法を解明するものである。

以上より「視覚像による情報」および「記号による情報」の中でもそれぞれ「写真」、「配置図」を分析対象とした点において、分析資料の視点からも新規性が認められると考えられる。

また、本論文では「写真」や「配置図」を対象とした分析によって、それぞれの情報媒体における情報伝達の作法の導出を試みるが、それらの作法の導出に至る過程においてA-5の既往知見を援用し、さらに、個別に得られた作法を総合的に整理するための枠組みの設定に際しては、フェルディナン・ド・ソシュールの言語構造モデルについての報告<sup>注1.89)</sup>を援用している。何故ならば、エイドリアン・フォーティの「言葉と建築—語彙体系としてのモダニズム—」<sup>注1.90)</sup>において、建築を理解するうえで重要な要素として「言葉」に着目した議論がなされており、フォーティに限らずその他にも建築と言語との関係に着目し、我々がどのような言葉によって建築空間の理解の定着を図るか、といった議論には多くの成果がみられるからである<sup>注1.91)</sup>。勿論、建築空間の理解内容や他者への伝達の議論においては、例えば実験心理学的アプローチや知覚構造に関する知見の援用も考えられるが、言語ややはり我々の空間理解の基底を占めていることは疑う余地もない。このように、分析結果を構造的に整理するために、一定の研究成果が認められている建築メディアにおける言語情報についての既往知見や、言語学についての報告を援用する点においても新規性が認められると考えられる。

注 1.89) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，1940

注 1.90) エイドリアン・フォーティ：言語と建築—語彙体系としてのモダニズム—，坂牛卓ほか 訳，鹿島出版会，2006.1

注 1.91) 例えば，Gottfried Semper：Style，1860

以上に記述した本研究の位置づけを、図 1.10 に示す。

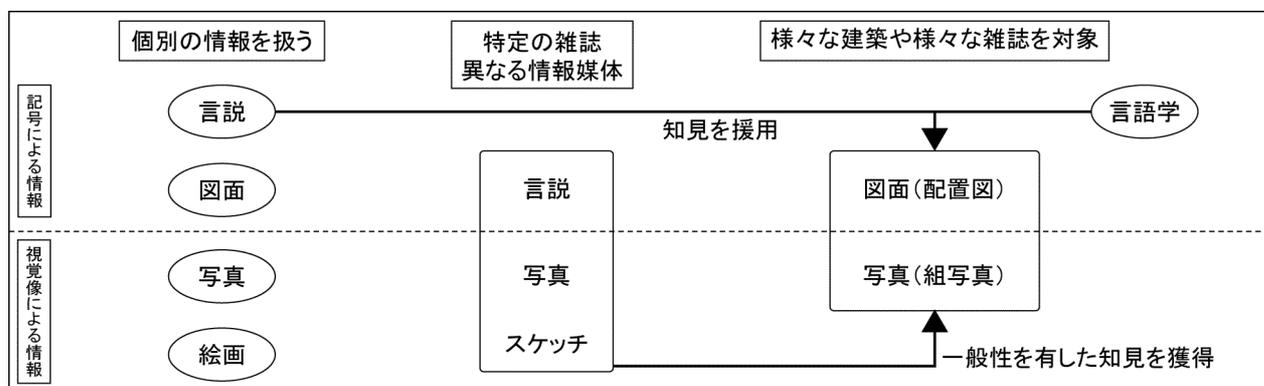


図1.10 研究の位置づけ

### 1-3. 研究の構成

#### 1-3-1. 本研究の構成

以上を踏まえて本研究では以下に示す構成によって論考を進める。

先にも記述したように、本研究では「視覚像による空間の情報」と「記号による情報」について、それぞれ「組写真」と「配置図」を題材として分析を施す。

第2章では「組写真（第2章で後述）」について「写真の組合せ」および「写真の掲載順」の2観点から分析を施す。「写真の組合せ」についての分析では、被写対象となる建築空間を固定したうえで写真家や編集者などの情報発信者側の個体差を超えて共有される写真の組合せの手法を抽出するために、桂離宮を題材とした写真集を分析資料とし、複数誌で共有される写真の組合せの構成について、写真の属性および写真間でどのような身体経験が行われるのかという2観点から分析を施す。一方で、「写真の掲載順」についての分析では、情報発信者側の条件を固定したうえで、様々な建築の個体差を超えて共有される写真の掲載順の手法を抽出するために、特定の建築メディアに掲載されている住宅作品の写真の掲載順を、写真の属性による階層性および写真群の並びの2観点から分析を施す。上記2種の分析の結果を照合することで、写真による情報伝達の作法を導出する。

第3章では「配置図」について、特定の建築メディアに掲載されている住宅作品の配置図を分析資料として、描画者に表現がゆだねられている図上方位、描画範囲、描画位置の3観点から分析を施す。上記3観点の照合により配置図による情報伝達の作法を導出する。

第2章および第3章を受けて、第4章においては、それぞれの分析結果からとして得られた個々の情報伝達の作法について、【伝達内容】と【伝達手段】の枠組みから整理する。

第5章においては、本研究で得られた知見をまとめ、今後の課題および展望を記述する。

なお、補章として実際の身体の経験による空間の理解の原理についての分析を行った。ここでは実験心理学的なアプローチにより、CGによる室内空間モデル（空間の経験における最も単

純なモデルとして採用)を刺激として被験者の眺めの選好傾向を把握する。そこで得られた知見と既往研究による知見との照合を行うことで、実際の身体の経験による空間の理解の原理を把握する。

以上の本研究の構成を示したものが図 1.11 である

また、各章と発表論文との対応は表 1.1 のとおりである。

注 1.92) 永瀬智基ほか：写真による建築空間の表現方法について—桂離宮の写真集を事例として—, 芸術工学会誌 (62), pp.47~54, 2013.09.

注 1.93) 久保井聡ほか：建築誌における現代日本住宅作品の建築写真の掲載順—建築写真の被写対象の属性・葉数・サイズを指標として—, 日本建築学会計画系論文集, No.717, pp2691~2699, 2015.11

注 1.94) 望月大地ほか：現代日本の住宅作品における配置図の描画表現—配置図の図上方位, 描画範囲, 描画位置の観点から—, 日本建築学会計画系論文集, No.709, pp.727~735, 2015.03.

注 1.95) 永瀬智基ほか：室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素, 日本建築学会計画系論文集, No.704, pp.2323~2331, 2014.10.

表1.1 各章と発表論文の関係

各章内容		掲載経過
第1章	序論	
第2章	写真の組合せによる空間の伝達手段	①掲載済 芸術工学会誌 No.62 2013/09
	写真の掲載順による空間の伝達手段	②掲載済 日本建築学会計画系論文集 No.717 2015/11
第3章	建築作品における配置図の描画表現	③掲載決定 日本建築学会計画系論文集 No.709 2015/03
第4章	建築メディアにみる空間の伝達手段に内在する作法	
第5章	結論	
補章	身体の経験による空間の理解	④掲載済 日本建築学会計画系論文集 No.704 2014/10
番号は表中右端の番号と対応		
①	写真による建築空間の表現方法について —桂離宮の写真集を事例として	2013年 永瀬智基・久野紀光 注1.92)
②	建築誌における現代日本住宅作品の建築写真の掲載順 —建築写真の被写対象の属性・葉数・サイズを指標として—	2015年 久保井聡・永瀬智基・久野紀光 注1.93) 2015年 望月大地・永瀬智基・久野紀光 注1.94)
③	現代日本の住宅作品における配置図の描画表現 —配置図の図上方位, 描画範囲, 描画位置の観点から—	2015年 永瀬智基・朝井美樹・久野紀光 注1.95)
④	室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素	

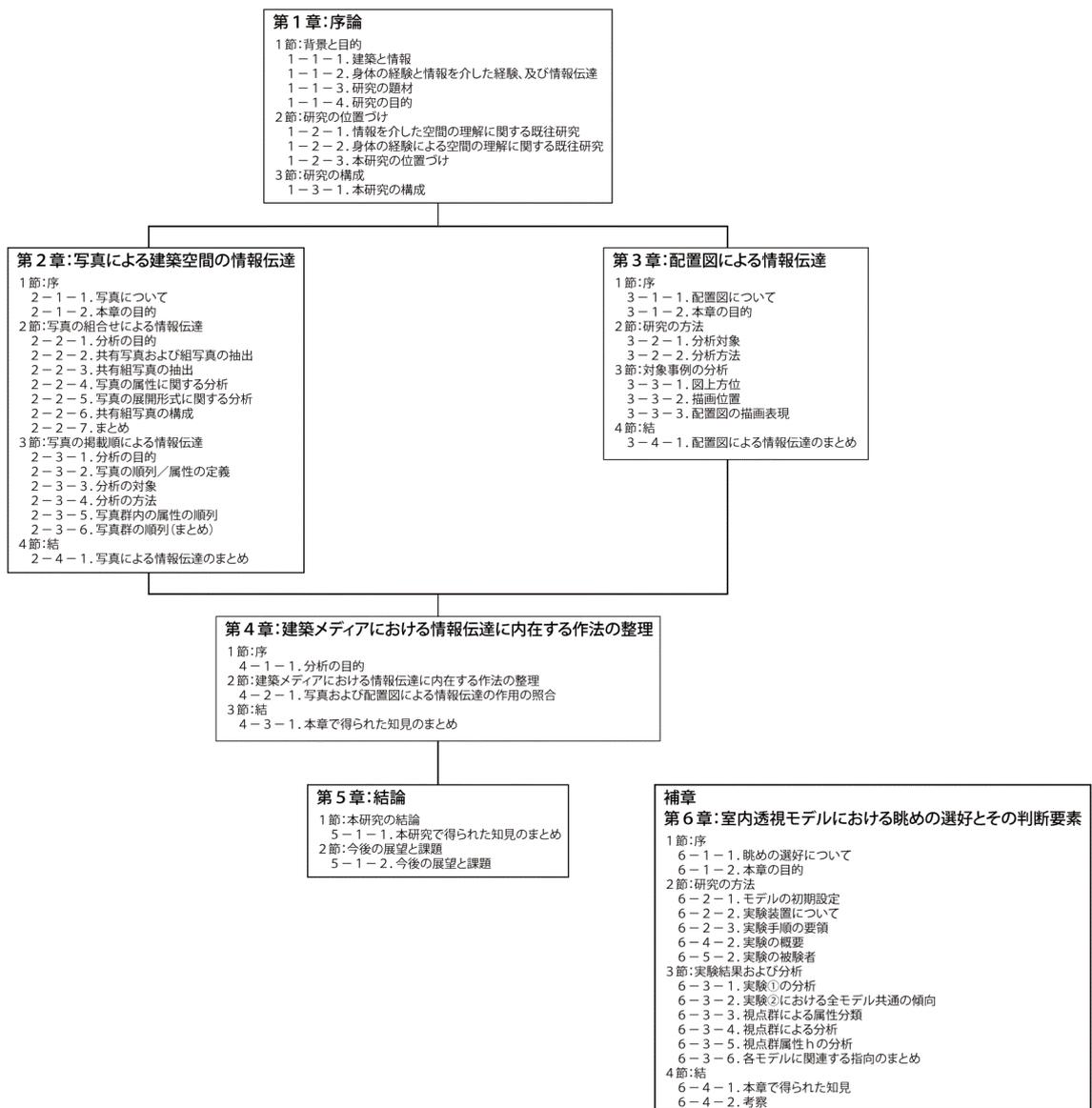


図1.11 本研究の構成

## 第2章 写真による建築空間の情報伝達

### 1節：序

2-1-1. 写真について

2-1-2. 本章の目的

### 2節：写真の組合せによる情報伝達

2-2-1. 分析の目的

2-2-2. 共有写真および組写真の抽出

2-2-3. 共有組写真の抽出

2-2-4. 写真の属性に関する分析

2-2-5. 写真の展開形式に関する分析

2-2-6. 共有組写真の構成

2-2-7. まとめ

### 3節：写真の掲載順による情報伝達

2-3-1. 分析の目的

2-3-2. 写真の順列／属性の定義

2-3-3. 分析の対象

2-3-4. 分析の方法

2-3-5. 写真群内の属性の順列

2-3-6. 写真群の順列（まとめ）

### 4節：結

2-4-1. 写真による情報伝達のまとめ

## 第2章 写真による建築空間の情報伝達

### 2-1. 序

「1-1-3. 研究の題材」で述べたとおり、本研究では建築メディアに掲載されている写真と配置図を題材として論考を進めるわけだが、本章においては特に写真を対象として分析を施す。

#### 2-1-1. 写真について

建築空間は写真や図版などの二次元情報に変換され、それらが掲載されているメディアを通して読者である私たちに広く伝達される。特に、磯が著書の中で、“(前略) もちろん本物を見るにこしたことはないが、遠い場所に建っているものもあるし、一般公開されていない建物もある。そう簡単に多くの建築を見ることはできない。その代わりに果たすのが建築雑誌である。読者の期待は、なるべくありのままの建築を見せてくれることであり、それに応えるのが建築写真家ということになる。その根底には、写真が対象物をストレートに表現するものだという素朴な信頼が横たわっている。”と述べており<sup>注2.1)</sup>、建築写真とは現実の3次元空間に最も近い情報媒体であり、建築空間を理解するにあたり重要な役割を果たしていることは予想に難くない。

ここで、富永は建築空間に対する体験について以下のように述べている。“(前略) いずれにしろ大事だと思われることは建築の空間が空間芸術でありながら、絵画や彫刻と異なって一度に把握さえるのではなく、音楽のように運動とともに継起する時間芸術であることであって、視点の移動とともに習得されるほかはない現象である・・・。”<sup>注2.2)</sup>つまり、建築空間の本質が視点の移動を伴う継起的な体験にあるとすると、単体の建築写真とは建築空間の断片的な情報であるにすぎず、名取の言うような複数の写真の組合せによって構成される「組写真<sup>注2.3)</sup>」を読み取ることで初めて建築空間を体験的に認識することができると考えられる。この組み写真について磯は著書の中で以下のように述べている。“(前略) 建築雑誌でもうひとつ気をつけるべきは、ひとつの建築の説明を複数の写真で構成する、いわゆる組み写真の手法が採られていることである。”<sup>注2.4)</sup>この

注 2.1) 磯達雄：転位する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで、「10+1」No.23, I N A X 出版, 2001

注 2.2) 富永謙：建築巡礼 12 ル・コルビュジェ—幾何学と人間の尺度, 丸善, 1989

注 2.3) 名取洋之助は、著書の中で以下のように述べている。「写真を何枚か並べると、抽象的な概念が表現できるということは、写真によって物語る事を可能にしました。ただ見せるだけでなく、カメラマン、あるいは編集者の意図したように読ませることのできる写真が誕生しました。いわゆる「組写真」です。」(名取洋之助：写真の読みかた, 岩波新書, pp.60~61,1963)

注 2.4) 磯達雄：転位する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで、「10+1」No.23, I N A X 出版, 2001

ように、建築写真において組写真の手法が用いられているという報告が確認される。

ここで、名取や磯が言う組写真という言葉は明確に定義がされていないため、本論における組写真の定義を施す。そこで本論では図2.1に示すように、メディアに掲載されているある建築作品を題材とした一連の写真の中でも、隣り合う2葉の写真の「組合せ」に着目した場合と、一連の写真の「掲載順」に着目した場合に分けて論考することとした。よって、本章では第2節において「写真の組合せ」を、第3節において「写真の掲載順」を分析し、それぞれにおける情報伝達の傾向を把握したうえで、第4節でそれらを総合して意味内容を整理し、写真による情報伝達の作法を導出する手続きを採る。

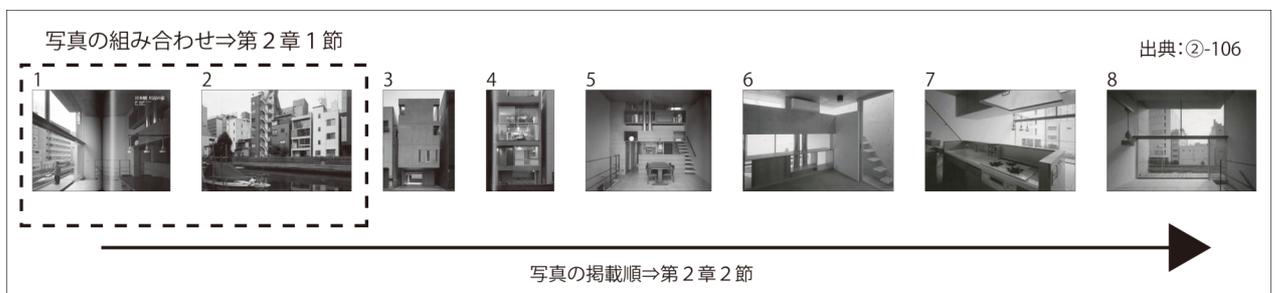


図2.1 写真の組合せ及び写真の掲載順

## 2-1-2. 本章の目的

以上より、本章では、“**建築メディアに掲載されている写真**を対象として、**写真の組合せと写真の掲載順の2観点**から分析を施すことで、**写真による情報伝達の作法を抽出すること**”を目的とする。

## 2-2. 写真の組合せによる情報伝達

### 2-2-1. 分析の目的

本節は同一の建築空間を題材とした写真集複数誌において通底して発現する写真の組み合わせについての論考を行うものであることから、写真家や編集者、出版年代等の書誌事項が多岐にわたる桂離宮を題材とした写真集7件を分析対象とした(表2.1)。それらに掲載されている写真のうち、誌面上で文章中に挿入されているものや写真以外の図版と相互補完的に扱われるものを除く全847葉の写真を分析対象とした。写真集の紙面上で1ページに複数の写真が掲載されている場合の掲載順序は、各写真集の綴じ方(右綴じなのか左綴じなのか)によって異なるが、ここでは文章を読み進める順序に従って決定した。また、本分析はあくまでも写真の組み合わせによる情報伝達についての論考を行うものであることから、紙面上における写真の大小やレイアウトについては言及しないものとする。

以上より、本節では、“桂離宮の写真集を分析資料とし、複数誌で共有される写真の組合せについて、写真の属性および写真間でどのような身体経験が行われるのかという観点から分析を施し、写真の組合せによる情報伝達の傾向を把握すること”を目的とする。

表2.1 分析資料と掲載写真数

	題目	著者	撮影者	編集者	発行	初版発行年	葉数
資料A	桂離宮	堀口捨己	佐藤辰三	不明	毎日新聞社	1952年	109
資料B	桂—日本建築における伝統と創造	丹下健三 ワルター・グロピウス	石元泰博	ハーバード・パイヤー	造型社	1960年	136
資料C	桂離宮 空間と形	磯崎新 熊倉功夫 佐藤理	石元泰博	不明	岩波書店	1982年	191
資料D	新編名宝日本の美22 桂離宮	斎藤俊彦	岡本成男	不明	小学館	1990年	57
資料E	日本名建築選集19 桂離宮	大和智 伊藤ていじ	十文字美信	不明	新潮社	1993年	49
資料F	桂離宮	鈴木嘉吉 中村昌生 佐藤理 建部恭宣	田畑みなお	不明	小学館	1995年	137
資料G	桂離宮	伊藤ていじ 小幡祥一郎 工藤圭章 鈴木嘉吉	不明	不明	新建築社	1996年	168
計(葉)							847

## 2-2-2. 共有写真および組写真の抽出

まず、複数資料で共通する写真配列を把握するにあたって、複数資料に共通して掲載される写真（以降、共有写真）の抽出を行う。具体的には全分析対象写真の「写真のキャプション」、「写真に含まれる対象物（図2.2）」の2観点の精査を行ったうえで、以下の条件を満たすものを共有写真として抽出する。

- ・各資料に掲載される写真の中で、写真に付されているキャプションの比較により同一の視点から同一の対象物をとらえた写真であると判別できること<sup>注2.5)</sup>。

- ・各資料に掲載される写真の中で、写真内に含まれる対象物の比較により同一の視点から同一の対象物をとらえた写真と判別できること<sup>注2.6)</sup>。

図2.3で具体的な抽出例を説明する。図3.2の5葉の写真は、写真のキャプションにより「中書院一の間」の写真と判別されたものである。中でも資料C No. 068、資料E No. 019、資料F No. 109、資料G No. 034のキャプションには一の間西面の「大床」が含まれており、一方で資料A No. 026のキャプションからは一の間であることは判別できるが「大床」は含まれていない。ここで、写真のキャプションによる判別で資料A No. 026は他の4葉とは異なる写真と判別される。一方、5葉の写真において実際に写真内に含まれている対象物を比較すると、全ての写真において「一の間西面の大床」が対象物として含まれていることが明らかである。以上より、資料C No. 068、資料E No. 019、資料F No. 109、資料G No. 034の4葉を1種の共有写真として抽出することができる。同様の手続きで全分析対象写真847葉を精査した結果、146種452葉が共有写真として集出された。共有する資料数別の共有写真数は表2.2のとおりである。表2.2より、2誌のみならず3誌、4誌にわたり共有される写真が存在することが確認された。

注 2.5) 本研究で研究資料として選定した7件の分析資料はキャプションにおける記載内容がそれぞれ異なる。例えば、A室を対象とした写真であっても「A室から西面をみる」や「A室の西面をみる」など、表現が異なる場合もある。しかし、キャプションに記載されている情報が異なるとしても、明らかに同一の対象物をとらえた写真と判断できる場合は、それらは共有写真として抽出される。

注 2.6) 本研究の分析資料には、1資料のなかで異なる時間帯や異なる季節に同一の視点から同一の対象物をとらえた写真が存在する場合がある。それらの写真が共有写真として抽出される場合、抽出される共有写真の枚数は2葉として数えることとする。

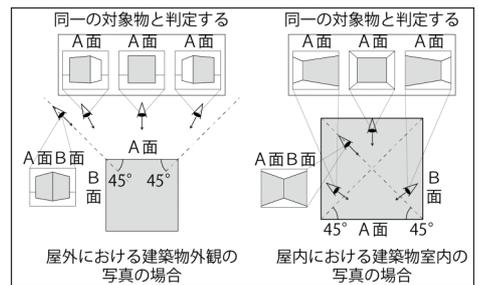


図2.2 主要対象物の判定



図2.3 共有写真の抽出

### 2-2-3. 共有組写真の抽出

次に共有写真が連続している部分について着目する。共有写真の直前もしくは直後に異なる共有写真が連続している場合、それら2葉の共有写真をまとめて組写真とする。一方、前後に異なる共有写真が連続していない場合は単独共有写真として分別する。共有写真が2葉のみならず3葉以上の共有写真が連続する場合もみられるが、それらは全て2葉の組写真の組合せと捉えることができるため、本研究では組写真の最小単位である2葉の共有写真から構成される組写真の分析を行うこととする。さらに組写真のなかでも複数誌において共通してみられるものは「共有組写真(図2.4)<sup>注2.7)</sup>」とし、1誌のみで見られるものは「単独組写真(図2.4)<sup>注2.7)</sup>」とする。以上、全共有写真の内訳を表したものが表2.3である<sup>注2.8)</sup>。抽出された共有写真146種452葉から267組372葉の組写真が抽出され、残る80葉は他の共有写真と連続することなく、独立して掲載されることが分かる。組写真として抽出されたもののうち、176組281葉は単独組写真であり、42種91組162葉は共有組写真であることが分かる。以降の分析では共有組写真である42種91組162葉の写真について詳細な分析を行う。

表2.2 共有する資料数別の共有写真

	2誌	3誌	4誌	5誌	6誌	7誌	計
共有写真の種類数(種)	62	38	29	9	7	1	146
合計写真の枚数(葉)	124	114	117	48	42	7	452

表2.3 組写真の内訳

共有写真		単独共有写真
146種/452葉		
組写真(2葉の共有写真が連続するもの)		80葉
267組/372葉		
共有組写真(複数誌でみられる組写真)	単独組写真(1誌のみでみられる組写真)	
42種/91組/162葉	176組/281葉	

### 2-2-4. 写真の属性に関する分析

ここでは、2葉の共有写真の組み合わせである共有組写真による情報伝達の傾向を明らかにするために、各共有組写真に含まれる共有写真が各々どのような対象物をどのように写真内に

注2.7) 本文中の図2.4では、資料C No.080と資料F No.124、資料C No.081と資料F No.125がそれぞれ共有写真であることから、資料C No.080、No.081、F No.124、No.125が共有組写真として抽出される。一方、資料C No.082、資料F No.126は異なる共有写真であることから、資料C No.081、No.082、資料F No.125、No.126はそれぞれ単独組写真として抽出される。よって資料C No.081、資料F No.125は共有組写真を構成する写真でもあり、単独組写真を構成する写真でもある。

注2.8) 本研究では、連続する2葉の共有写真の掲載順序については言及せず、組写真を構成する2葉の共有写真が同一のものであれば、掲載順序に関わらずそれらを共有組写真として抽出することとする。



図2.4 共有組写真と単独組写真の例  
(出典: 上段①-003、下段①-007)

納めているのか（以降、写真の属性）を明らかにする。全共有組写真に含まれる共有写真の属性は図2.5であらわした5種に大別することができる。判別方法を以下に示す。

・各写真の対象物が建築物の外形または外部空間の植栽や燈籠、などの外構要素なのか、あるいは建築内部の室内空間なのかで「屋外写真」と「屋内写真」の2種に大別する。

・屋外写真のうち、建築物の外形を対象物とした写真の属性は「①外形」、外部空間の外構要素を対象物とした写真の属性は「②外構要素」とする。一方、屋内写真については建築内部の室内空間の写真は対象物が室内1室なのか、室内の複数室なのか、室内の一部分なのかをキャプションによって精査することでさらに3種に大別する。室内1室を対象物とした写真の属性は「③室内-1室」、室内の複数室を対象物とした写真の属性は「④室内-複数室」、室内の一部分を対象物とした写真の属性は「⑤室内-部分」とする。

以上の判別方法によって先に抽出された共有組写真162葉を分類した結果が表2.4である。

また、抽出された共有組写真を構成する2葉の共有写真の属性の組合せを精査しまとめたものが表2.5である。「2葉の属性の一致／不一致」の観点から概観すると、2葉の共有写真の属性が一致しているもの（28種/42種）は不一致のもの（14種/42種）に比して多く発現することが分かる。その中でも屋外写真の場合は①外形どうしの組合せ（6種/42種）、屋内写真の場合は③室内-1室どうしの組合せ（11種/42種）や⑤室内-部分どうしの組合せ（7種/42種）が多いことが分かる。2葉の属性が不一致であるものに着目すると、③室内-1室と④室内-複数室の組合せ（5種/42種）や③室内-1室と⑤室内-部分の組合せ（4種/42種）、④室内-複数室と⑤室内-部分の組合せ（1種/42種）といった屋内写真の異なる属性写真どうしの組合せがみられるが、これらの室内空間の属性の写真と①外形や②外構要素のような屋外写真との組合せはみられない。一方で、①外形と②外構要素の属性の写真の組合せがみられることから、①外形や②外構要素といった屋外写真は、①外形どうしや②外構要素の写真ど

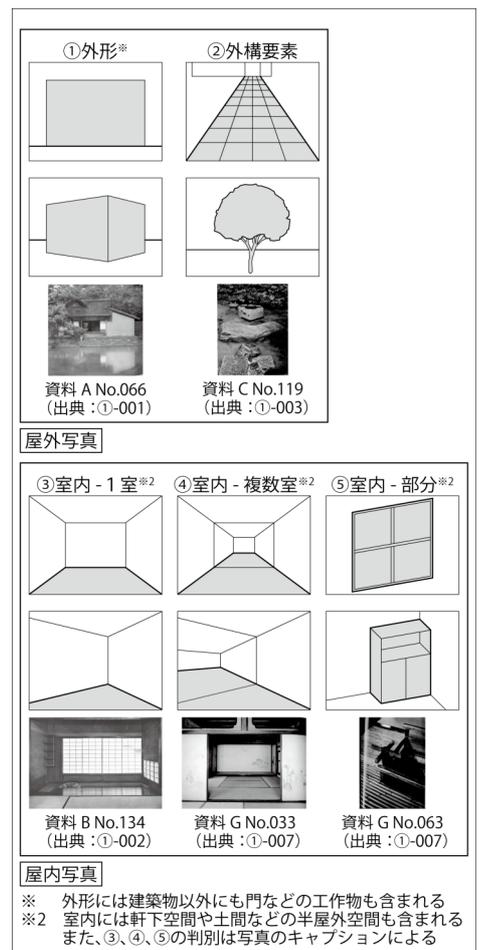


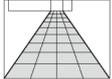
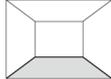
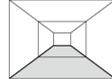
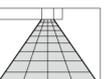
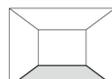
図2.5 写真の属性

表2.4 共有組写真に含まれる共有写真の属性

共有写真の属性	①外形	②外構要素	③室内-1室	④室内-複数室	⑤室内-部分	計
該当共有写真の枚数(葉)	31	20	58	16	37	162

うしといった同じ属性どうしの組合せ、もしくは①外形と②外構要素の組合せのように屋外写真の異なる属性の写真の組合せによる組写真のみが発現する傾向にあることが分かる。また、③室内-1室や④室内-複教室、⑤室内-部分といった屋内写真は、③室内-1室どうしや④室内-複教室どうし、⑤室内-部分どうしと言った同じ属性どうしの写真の組合せ、もしくは③室内-1室と④室内-複教室や③室内-1室と⑤室内-部分、④室内-複教室と⑤室内-部分といった屋内写真の異なる属性の写真どうしの組合せによる組写真のみが発現する傾向にあることが分かる。さらに、屋外写真と屋内写真の組合せによる組写真は発現しないことが分かる。

表2.5 共有組写真を構成する写真の属性の組み合わせ(数値の単位は種)

		屋外写真 13		屋内写真 29				
属性 の 一 致	28	①-①(6)	②-②(3)	③-③(11)	④-④(1)	⑤-⑤(7)		
		 	 	 	 	 		
		(例)A No.066-067 (出典:①-001)	(例)C No.119-120 (出典:①-003)	(例)B No.134-135 (出典:①-002)	(例)E No.017-018 (出典:①-005)	(例)F No.117-118 (出典:①-006)		
		(9)		(19)				
属性 の 不 一 致	14	①-②(4)	③-④(5)	③-⑤(4)	④-⑤(1)			
		 	 	 	 	 		 
		(例)G No.092-093 (出典:①-007)	(例)F No.108-109 (出典:①-006)	(例)G No.063-064 (出典:①-007)	(例)B No.125-126 (出典:①-002)			
		(4)		(10)				

2-2-5. 写真の展開形式に関する分析

ここでは、2葉の写真の組み合わせである共有組写真の構成を明らかにするために、共有組写真を構成する2葉の共有写真間でどのような視覚体験の展開がみられるのか（以降、写真の展開形式）を明らかにする。全共有組写真にみられる展開形式は図2.6で表した6種に大別することができる。「a 移動-写真外」とは、視点に隣接する空間に視点を移して異なる対象を眺めるように写真が連続するもの、「b 断絶」とは、隣り合う写真間に視点による連続関係が見られないもの、「c 移動-写真内」とは、画角内に含まれている空間に視点を移し、そこから異なる対象を眺めるように写真が連続するもの、「d 拡大縮小」とは、同一の対象空間を拡大縮小するように写真が連続するもの、「e 周回」とは、建築物等の外形を異なる視点から眺めるように写真が連続するもの、「f 回転」とは、同一の視点から異なる空間へと対象を移すように写真が連続するものである。

ここで、抽出された共有組写真を構成する2葉の共有写真間の展開形式を精査し表2.6のようにまとめた。これを概観すると、表2.6 共有組写真を構成する写真の展開形式(数値の単位は種)

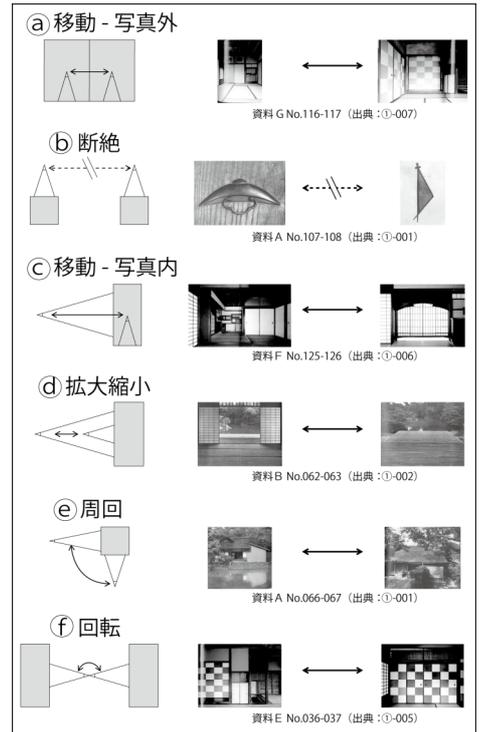


図2.6 写真の展開形式

	対象物が視覚的不連続 26		対象物が視覚的連続 16		
視点場の移動あり 34	a 移動-写真外(7)	b 断絶(11)	c 移動-写真内(6)	d 拡大縮小(7)	e 周回(3)
	(例)A No.027-028 (出典:①-001)	(例)D No.054-055 (出典:①-004)	(例)B No.080-081 (出典:①-002)	(例)C No.175-176 (出典:①-003)	(例)G No.103-104 (出典:①-007)
	(18)		(16)		
視点場の移動なし 8	f 回転(8)		該当なし(0)		
	(例)C No.132-133 (出典:①-003)		(0)		
	(8)		(0)		

視点の移動を伴う写真展開が大半（34種/42種）を占めていることが確認される。その中でも2葉の対象物が視覚的に連続しているもの（16種/42種）と不連続であるもの（18種/42種）は同数程度見られることが分かる。前者の中でも、b断絶が多くを占めることが分かる（11種/42種）。後者の中ではc移動-写真内（6種/42種）やd拡大縮小（7種/42種）が多くを占めていることが分かる。一方で、視点の移動を伴わない写真展開は多くは見られず、それらは全て対象物が視覚的に不連続であるf回転（8種/42種）であることが分かる。

### 2-2-6. 共有組写真の構成

ここまでで得られた共有組写真における共有写真の属性の組合せ、写真の展開形式の照合を行うことで、共有組写真の構成を精査し、写真の組み合わせによる情報伝達の傾向を明らかにする。共有組写真における共有写真の属性の組合せおよび写真の展開形式をまとめたものが表2.7である。

視点の移動を伴い対象物が視覚的に不連続な展開形式によって同属性の屋外写真が組み合わせられた共有組写真として<類型ア>があげられる。<類型ア>はa移動-写真外の展開形式によって属性②外構要素の写真どうしが組み合わせられたものであり、御輿寄せ付近のように外構要素が密集する空間において、近接している外構要素を連続して眺める空間体験を表したものである。

視点の移動を伴い対象物が視覚的に連続する展開形式によって同属性の屋外写真が組み合わせられた共有組写真として<類型イ、ウ>があげられる。<類型イ>はc移動-写真外の展開形式によって属性①外形の写真どうしが組み合わせられたものであり、古書院、中書院、楽器の間、新御殿の4つのヴォリュームで構成される御殿群のような雁行した外観をもつ空間において、建築の外観全体と単体のヴォリュームの外観を連続して眺める空間体験を表したものである。また、<類型ウ>はe周回の展開形式によって①外形の写真どうしが組み合わせられたものであり、月波楼や松琴亭のように単独のヴォリュームである空間

表2.7 共有組写真を構成する写真の属性の組み合わせおよび展開形式(数値の単位は種)

写真の展開形式		視点場の移動あり 34					視点場の移動なし 8	
		対象物が視覚的連続 18		対象物が視覚的不連続 16			対象物が視覚的不連続 8	
写真の属性		a 移動-写真外 7	b 断絶 11	c 移動-写真内 6	d 拡大縮小 7	e 周回 3	f 回転 8	
同属性 28	屋外写真 9	①-① 6 	①-① 6 	イ 16 c ①/B 026/C 017 ①/B 027/C 018 36 c ①/E 006/G 029 ①/E 007/G 028 	11 d ①/A 084/C 149 ①/A 085/C 150 	ウ 5 a ①/A 064/F 035/G 103 ①/A 065/F 034/G 104 6 a ①/A 066/F 061 ①/A 067/F 060 38 a ①/E 030/G 104 ①/E 031/G 103 		
	屋内写真 19	②-② 3 	ア 4 a ②/A 051/C 120 ②/A 052/C 119 19 a ②/B 121/G 132 ②/B 122/G 133 	02 	エ 21 d ②/C 005/G 089 ②/C 006/G 090 	1 	0 	カ 7 f ③/A 071/E 036 ③/A 072/B 110 8 f ③/A 073/B 111 9 f ③/A 077/F 052 ③/A 078/F 053 12 f ③/A 092/B 134 ③/A 093/B 135 27 f ③/C 132/G 112 ③/C 133/G 111 28 f ③/C 133/F 054/G 110 ③/C 134/F 053/G 110 37 f ③/E 019/F 109 ③/E 020/F 110 22 f ④/C 047/E 018 ④/C 048/E 017 
		③-③ 11 	キ 1 a ③/A 027/F 116/G 051 ③/A 028/F 117/G 052 23 a ③/C 081/F 125 ③/C 139/E 035 29 a ③/C 140/E 036 	0 	ク 3 c ③/A 031/F 126 ③/A 032/F 125 	1 	0 	ケ 7 f ③/A 071/E 036 ③/A 072/B 110 8 f ③/A 073/B 111 9 f ③/A 077/F 052 ③/A 078/F 053 12 f ③/A 092/B 134 ③/A 093/B 135 27 f ③/C 132/G 112 ③/C 133/G 111 28 f ③/C 133/F 054/G 110 ③/C 134/F 053/G 110 37 f ③/E 019/F 109 ③/E 020/F 110 22 f ④/C 047/E 018 ④/C 048/E 017 
		④-④ 1 	コ 1 a ④/A 027 ④/A 028 	0 	0 	0 	0 	1 
	異属性 14	屋外写真 4	①-② 4 	キ 26 a ②/C 115/G 092 ②/C 116/G 093 15 b ②/B 003/C 002 ②/B 004/C 003 30 b ②/C 155/D 054/G 133 ②/C 156/D 055/G 134 31 b ②/C 156/F 080 ②/C 157/F 079 	3 	0 	0 	0 
		屋内写真 10	③-④ 5 	ケ 18 c ④/B 080/C 188 ④/B 081/C 187 34 c ④/D 023/G 056 ④/D 024/G 055 	0 	ケ 2 d ④/A 030/C 083 ④/A 031/C 084 17 d ④/B 062/G 020 ④/B 063/G 021 39 d ④/F 108/G 033 ④/F 109/G 034 	2 	3 
③-⑤ 4 			ク 30 b ②/C 155 ②/C 156 	0 	ケ 32 d ⑤/C 175/G 148 ⑤/C 176/G 149 	0 	1 	0 
④-⑤ 1 	キ 33 a ⑤/C 185/F 011 ⑤/C 186/F 012 35 b ⑤/D 033/G 063 ⑤/D 033/G 064 		1 	ク 10 c ⑤/A 079/F 056 ⑤/A 080/F 055 	1 	1 	0 	

凡例

組写真番号 写真の属性 掲載番号 掲載番号

展開形式 資料の種類 資料の種類

視方向  
視点場の移動  
視点場

対象物 1  
対象物 2  
対象物 1+2

において、建築の外観を他方向から連続して眺める空間体験を表したものである。

視点の移動が伴い対象物が視覚的に不連続な展開形式によって同属性の屋内写真が組み合わせられた共有組写真として<類型エ、オ>があげられる。<類型エ>は a 移動-写真外の展開形式によって属性③室内-1室の写真どうしが組み合わせられたものであり、御殿群や松琴亭などの複数の室で構成される空間において、隣接する室内空間を連続して眺める空間体験を表したものである。また、<類型オ>は b 断絶の展開形式によって属性⑤室内-部分の写真どうしが組み合わせられたものであり、新御殿のように室内に意匠的特徴をもつ建具や家具が設えられた空間において、空間的には隣接していないそれらの室内の部分的な意匠を連続して眺めるという空間体験を表したものである。

視点の移動が伴わず対象物が視覚的に連続した展開形式によって同一属性の室内写真が組み合わせられた共有組写真として<類型カ>があげられる。<類型カ>は f 回転の展開形式によって属性③室内-1室の写真どうしが組み合わせられたものであり、松琴亭や笑意軒のように意匠的に特徴をもつ室内空間において、一つの視点にとどまってその室内の異なる壁面を連続して眺める空間体験を表したものである。

視点の移動を伴い対象物が視覚的に不連続である展開形式によって異なる属性の屋外空間の写真が組み合わせられた共有組写真として<類型キ>があげられる。<類型キ>は b 断絶の展開形式によって属性①外形と②外構要素の写真が組み合わせられたものであり、外腰掛や笑意軒のような建築物の周辺に外構要素が多く設えられた空間において、建築物の外形と外構要素を連続して眺める空間体験を表したものである。

視点の移動を伴い対象物が視覚的に連続する展開形式によって異なる属性の屋内写真が組み合わせられた共有組写真として<類型ク、ケ>があげられる。<類型ク>は c 移動-写真内の展開形式によって属性③室内-1室と④室内-複数室の写真が組み

合わせられたものであり、新御殿や月波楼のように複の室で構成される室内空間において、複数室と1室を視覚的に連続するように眺める空間体験を表したものである。また、〈類型ケ〉はd拡大縮小の展開形式によって属性③室内-1室と④室内-複数室の写真が組み合わせられたものであり、複数室と1室を拡大もしくは縮小するように眺める空間体験を表したものである。

## 2-2-7. まとめ

最後に、ここまでで得られた共有組写真の構成における類型どうしの比較によって、写真の組合せによる情報伝達の型を導出する(図2.7)。〈類型ア、エ、ク〉は「空間移動想起型」である。これは、特定の空間ではなく近接して存在する複数の空間の情報を組み合わせることで、対象となる空間とその周辺の状態の伝達を意図する型であると考えられる。対して、〈類型イ、ケ〉は「部分・全体連続型」である。これは、被写対象となる空間が一致しており、その対象の異なる距離からの眺めを組み合わせることで、空間への接近あるいは後退する体験を伝達することを意図する型である。〈類型ウ、カ〉は「多角的連続型」である。これは、同一の建築物の外観における異なる壁面を、周回しながら望むという空間体験、あるいは同一の室内において自らが回転しながら異なる壁面を望むという空間体験を表しており、どちらも空間を多角的な視覚体験によって伝達することを意図した型である。

また、〈類型キ〉は「外観・周辺環境対応型」である。これは、建築物の外観とその周辺環境の眺めを連続させることによって、身体の体験としては断続的ではあるものの、建築とその周辺環境との対応を伝達することを意図した型である。さらに、〈類型オ〉は「同類情報並置型」である。これは、空間としては隣接していないため、身体の体験としては断続的ではあるものの、例えば開口部や家具のように特定の空間要素に着目した眺めを並置することによって、空間全体におけるデザインの統一性や差異性などを伝達することを意図した型である。

以上、本節では、写真集における写真の組合せによる情報伝達の検討を行った。まず、同一の建築空間を題材とした写真集複数誌において共有して掲載される共有写真を抽出し、その共有写真どうしが連続している部分を組写真として捉え、さらに写真集複数誌において共通してみられる組写真を共有組写真として抽出することで、写真家や編集者関わらず、通底して見られる写真配列を把握した。次に、その共有組写真の構成を精査するため、写真の属性と写真の展開形式の2観点からの検討を行い、共有組写真に含まれる2葉の写真の属性の組合せおよび2葉の写真間にみられる写真の展開形式についての傾向を明らかにした。また、それら2観点の照合を行うことで共有組写真の構成を検討し、共有組写真の構成の類型化を行った。最後にその類型どうしの比較によって、写真の組合せによる除法伝達の型として、「空間移動想起型」「部分・全体連続型」「多角的連続型」「外観・周辺環境対応型」「同類情報並置型」を見出した。

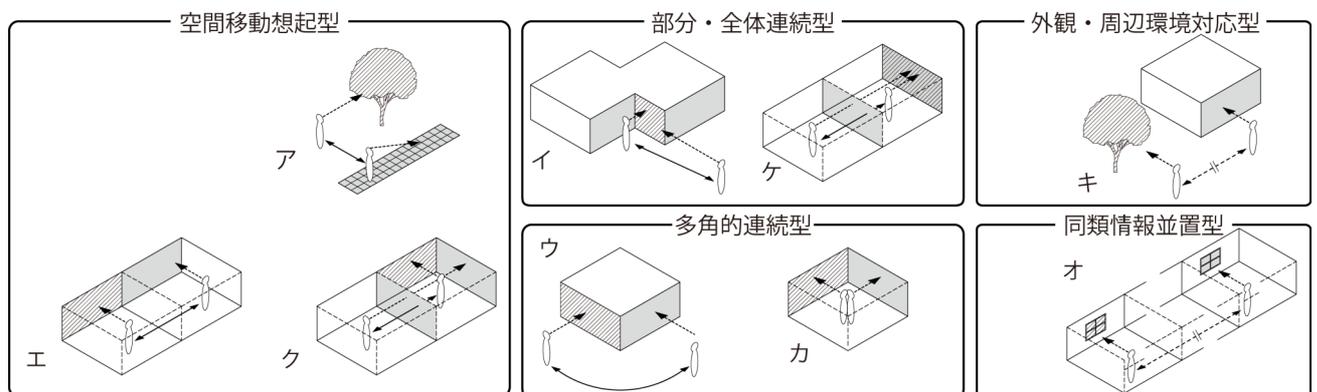


図2.7 写真の組合せによる表現形式

## 2-3. 写真の掲載順による情報伝達

### 2-3-1. 分析の目的

本節は複数の建築作品において通底して発現する写真の掲載順についての論考を行うものであることから、特定の建築雑誌に掲載されている建築作品を分析対象とした。

ここで、建築空間を視覚体験的に捉えることが可能な写真が重要な役割を果たしていることは間違いないが、建築雑誌は本という項をめぐる形式の情報であることから、写真にはそれらを見る順番、すなわち順列が生じていると言える。この写真の順列は誌面上における建築の体験を形作るという意味で重要であり、写真の順列にはある特定の傾向が存在することを磯が以下のように報告している。

“写真は往々にして、外観、エントランス、ホール内、主要室内、それ以外といった順番に配置される。つまり、実際の建物を訪問したような体験がここには仕込まれている。”<sup>注2.9)</sup>

同様の言及は多くの建築家や編集者によってなされており、これらは総じて、磯の報告にあるように外観から内観へと実際に建物を訪問したかのように並べる「体験順」と位置づけられている。しかし、実際に建築雑誌を概観すると上記のような順列ではないものも相当数みられ(図2.8)、全ての作品において必ずしも「体験順」の掲載ではないことが確認される。また、実際の体験のなかでも訪問時のそれのみが「体験順」として位置づけられていることに対しても検討の余地があると考えられる。

以上より、本節では、“**建築メディアに掲載される住宅作品の写真の掲載順を、写真群の順列および写真の属性による順列の観点から分析を施し、建築メディア上の写真の掲載順による情報伝達の傾向を把握すること**”を目的とする。

注2.9) 磯達雄：転位する建築写真—リアリズムからスーパーフラットまで、10+1 No. 23, INAX出版, 2001  
また、以下のような同様の報告もみられる。

例えば、福屋は“ページを開くと、…(中略)…その記事は大判の外観写まっている。その次に鳥瞰図、また別の側の外観、外観、それからエントランスのディディール、外観、内部の吹抜け空間、個性的な内観、内観、内観のディディール、個別の部屋、部屋、部屋のディディール。どの記事でもこの流れはほとんど同じだ。”と述べており(福屋粧子：建築はどのように伝達されるか 制度としての建築写真, 建築文化, vol. 53, no. 616, 1998. 2)

植田も“建築を実態とみる姿勢は、体験のシークエンスと見ることに直結している。そこに不可避的に建築写真がつねに組み写真としてあらわれる基盤がある。つまり、外観-玄関-主な部屋-従属的な部屋といったヒエラルヒーが建築の「実体」をより強固にし…(中略)…。”と述べている(植田実：編集者の立場から、建築雑誌, vol. 94 no. 1156, 1979. 10)。

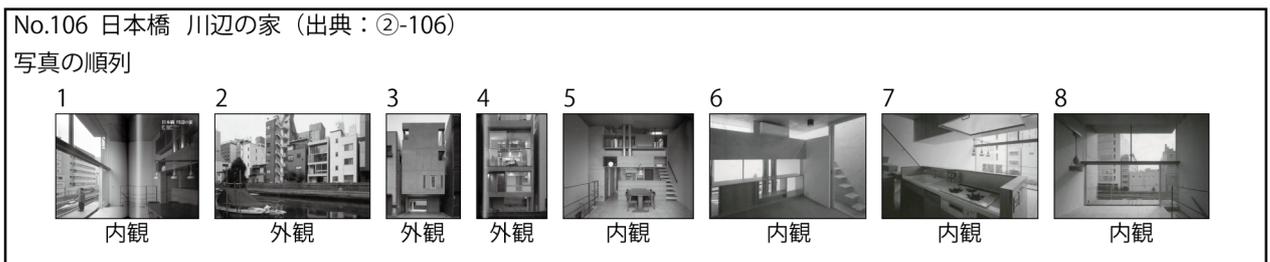


図2.8「体験順」の掲載ではない事例 No.106日本橋 河辺の家

写真の順列を検討する上で建築の規模や用途に応じて掲載葉数や被写対象の種類数が異なると考えられることから、それらによる影響を最小限にすること、加えて本研究は複数の事例に共通する除法伝達の傾向の抽出を目的とするため事例数が豊富であることが求められる。以上より、本国の住宅建築が分析対象として適当であると考えた。ところで「新建築 住宅10年 2000-2010」<sup>注2.10)</sup>に掲載された住宅作品は読者が雑誌に掲載された複数葉の写真より、その作品の空間を類推、理解を試みた結果として評価に至ったものである。この時、掲載の順列もこの類推、理解に寄与したことが予想されるため、これらの住宅作品は本研究の論旨上、分析対象として適当であると考えた。これより、それらの作品評価の元資料である「新建築」誌及び「新建築住宅特集」誌を本研究の分析資料とした。

### 2-3-2. 写真の順列／属性の定義

本研究では、掲載された写真の順列を項の順に沿って決定する。分析対象の検索年代において「新建築住宅特集」誌は雑誌の体裁として、左綴じと右綴じの2種がみられた。よって、図2.9のように体裁別に写真の順列を決定することとした。また、磯らの言説を総合すると、写真の順列は主に被写対象が外形、エントランス、主要な室、従属的な室の4種類で捉えられている(別表2.1)<sup>注2.11)</sup>。これより、外観写真において、主たる被写対象として外形が扱われている場合、その写真の属性を「外形」、主たる被写対象としてエントランスが扱われている場合、その写真の属性を「部分」と判別する。また、内観写真において、主室が被写対象として扱われている場合、その写真の属性を「主室」、それ以外を「副室」として判別する(図2.10)。

注2.10) 「新建築 住宅10年 2000-2010」は建築家がアンケートで選んだある一定の評価が得られた作品のみを掲載していることから分析事例選定に適当であると考えた。

注2.11) 注2.11における3名の順列に関する言説より写真の属性の設定を行った。別表2.8より、外形、部分、主室、副室の4種に整理されることがわかる。

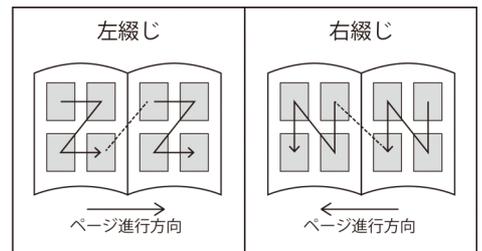


図2.9 写真の順列

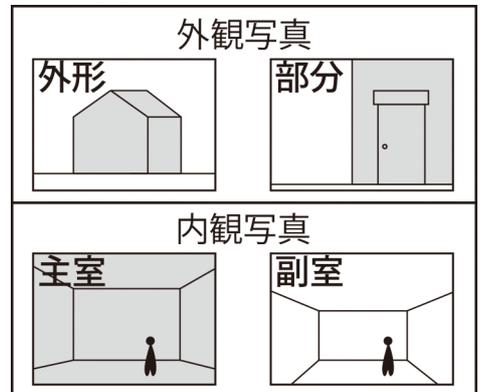


図2.10 写真の属性

### 2-3-3. 分析対象

分析対象となった154事例の全写真葉数は1303葉であり、全写真について上述の4種の属性(図2.10)のいずれであるかを判別すると、属性が外形、主室、副室の写真は概ね350葉～500葉であるのに対して属性が部分の写真は36葉と少なく、単に磯の言う「体験順」として成立する可能性のある事例は極端に少ないことがわかる(表2.8)。

表2.8 写真の属性と葉数

写真の属性	外形	部分	主室	副室	計
葉数	362	36	480	425	1303

### 2-3-4. 分析の方法

本研究では、まず図2.11のように一葉ずつの属性を判別した後、連続する外観写真(以下、外観写真群)及び連続する内観写真(以下、内観写真群)を括り、各写真群に含まれる写真の属性の順列を検討する。次に写真群間の順列を検討し、偏向がみられたものを順列の型として抽出する。得られた順列の型を整理した後、各順列の型がどのような建築の実態的性格を反映しているかといった両者の応答を捉えることによって、本研究の目的の理解に至る。

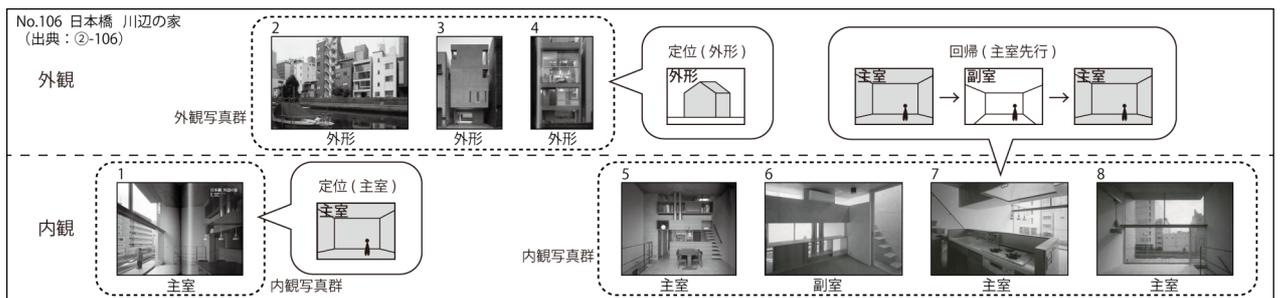
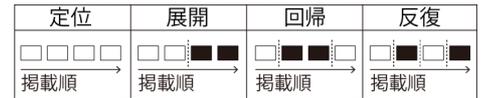


図2.11 分析例 No.106 日本橋 川辺の家

### 2-3-5. 写真群内の属性の順列

ここでは、外観写真群内及び内観写真群内の図 2.10 に示す属性の順列を把握する。全 154 事例における外観写真群は 256 群、内観写真群は 249 群であった。写真群内の属性の順列を把握するにあたっては、属性の切替わりは視点の移動を示していると考えられるため、この属性の切り替わりに着目し、写真群を視点の移動の観点から分別する。結果として、属性の切り変わりがなく、特定の属性に留まる「定位」、属性の切替わりが 1 回あり、ある属性から異なる属性へ移行する「展開」、属性の切替わりが 2 回あり、ある属性から異なる属性へ移行した後、再び始めの属性に戻る「回帰」、属性の切替わりが 3 回以上あり、異なる属性間を繰り返し移動する「反復」の全 4 種の視点の移動に大別した(図 2.12)。さらにこの 4 種の視点の移動に各写真群の冒頭の写真の属性を鑑みると外観写真群および内観写真群は 8 種に分別される(表 2.9、表 2.10)。例えば図 2.11 の事例は内観写真群、外観写真群、内観写真群の順列(内→外→内、以下同様に表記する)という 3 群からなる写真群の順列であるが、最後の内観写真群に着目すると 4 葉の属性の順列は、主室、副室、主室、主室であり、主室という属性から副室という異なる属性に移行した後、また主室に戻るため、この内観写真群内の順列は「回帰」となり、さらに写真群内の冒頭の写真の属性を鑑みると主室が副室に対して先行して掲載されるため「回帰(主室先行)」と判別される。

同様の手順でまず全ての外観写真群について分析を行ったところ(表 2.9)、「定位」に 232/256 群と大半が該当し、次いで「展開」に多くの外観写真群が該当する。「回帰」と「反復」にはほぼ該当するものはみられなかった。属性を鑑みると、外形に「定位」するようにみせる順列が 220/256 群と大半を占め突出している。外形全体から部分へと建築に歩み寄っていくように「展開」する順列は該当数が 17/256 群と少なかった。



□と■は互いに異なる属性を示す  
 .....は属性の切り替わりを示す

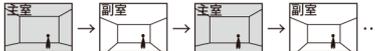
図2.12 4種に大別される視点の移動 模式図

さらに全ての内観写真群についても同様に分析を行ったところ(表 2.10)、「定位」に 112/249 群と最も該当し、次いで「展開」に 62/249 群が該当する。「回帰」、「反復」にも 33/249 群、42/249 群該当し、突出して該当するものはないが、各写真群の冒頭の写真の属性を鑑みると主室が副室に対して先行するものに偏向がみられた。特に「展開」においてはこの偏向は顕著であった。また、外観写真群ではほぼみられなかった「回帰」、「反復」が内観写真群では相当数用いられることがわかる。

表2.9 外観写真群内の順位

外観写真群の順位			写真群数	
定位	定位(外形)		220	232
	定位(部分)		12	
展開	展開(外形先行)		17	21
	展開(部分先行)		4	
回帰	回帰(外形先行)		3	3
	回帰(部分先行)		0	
反復	反復(外形先行)		0	0
	反復(部分先行)		0	
計			256	

表2.10 内観写真群内の順位

内観写真群の順位			写真群数	
定位	定位(主室)		66	112
	定位(副室)		46	
展開	展開(主室先行)		52	62
	展開(副室先行)		10	
回帰	回帰(主室先行)		22	33
	回帰(副室先行)		11	
反復	反復(主室先行)		32	42
	反復(副室先行)		10	
計			249	

### 2-3-6. 写真群の順列 (まとめ)

ここでは、まず外観・内観写真群の順列を把握する。次に前項において視点の移動の観点で性格付けされた写真群内の順列を踏まえ、写真群間の順列を把握し、偏向がみられたものを写真の順列の型として抽出する。最後に得られた順列の型の意味内容を検討し整理する。

例えば図2.11の事例では、[内→外→内]という外観・内観写真群の順列であった。全資料について同様に外観・内観写真群の順列を整理し、まとめたものが表2.11である。写真群数が1群のものや、写真群数が5群以上になる事例は該当数が少なく、2群から4群の間に大半が該当することがわかる。よって、これらの中でも該当数の偏向がみられた5種の外観・内観写真群の順列を主要な写真群の順列として抽出し(表2.11太枠部)<sup>注2.12)</sup>、以降これに該当する計126事例について詳しく分析することとする。主要な写真群の順列をみると写真群数が2群または4群のものは外観写真群の先行する該当数が多い傾向にあるのに対

注2.12) 平均掲載枚数が8枚/事例であることから、掲載枚数が8枚のとき、理論上あり得る外観・内観写真群の順列の種類数16で総事例数154を除いた数9.6以上該当するものを、主要な写真群の順列として抽出した。

表2.11 写真群の順列

写真群数	写真群の順列	事例数
1	外	0
	内	0
2	外→内	42
	内→外	12
3	外→内→外	20
	内→外→内	19
4	外→内→外→内	33
	内→外→内→外	5
5	外→内→外→内→外	9
	内→外→内→外→内	3
6	外→内→外→内→外→内	8
	内→外→内→外→内→外	2
7	外→内→外→内→外→内→外	0
	内→外→内→外→内→外→内	0
8	内→外→内→外→内→外→内→外	0
	外→内→外→内→外→内→外→内	1
計		154

して、写真群数が3群のものは同数程度であることがわかった。得られた主要な写真群の順列において、表2.9、表2.10に示した視点の移動という観点での写真群内の順列の性格を踏まえ、偏向がみられた写真群間における順列の型を抽出する。例えば図2.11で[内→外→内]という写真群の順列に着目すると、まず内観写真群で主室に「定位」し、次いで外観写真群で外形に視点が「定位」し、さらに内観写真群で視点が主室から副室へ移りさらに主室へ戻る「回帰」の順列であると判別することができる。同様の手順で先に限定した126事例について精査した結果、①～⑫の12種の型が得られた<sup>注2.13)</sup>(表2.12)。

順列の型は訪問や辞去といった実際の体験(以下、身体的体験)と照合することで整理できる。一方、村井は建築にはその建築を代表する「ハレ」の部分が存在することを示唆しており<sup>注2.14)</sup>、例えばそれは大橋や高井が述べるように<sup>注2.15、2.16)</sup>往々にして建築の全景、ファサードであると考えられる。また内観においても、磯らの言説による順列は、ある建物を訪問する際に、必ずしも主室が副室に先んじて訪れられるとは限らないにも関わらず、主室が先んじて掲載される順列である。これらのことから、写真の属性に意味的な序列が存在することが予想され、身体的体験とは別に属性の階層によって形作られる体験(以下、意味的体験)で整理する必要があると考えられる。

そこでまず、身体的体験に則した順列の型の整理を行う(図2.13)。①～④は外観・内観写真群の順列が[外→内]のものであり、外観写真、内観写真という水準でその順列を捉えると実際に建物を訪問したときの体験に則した順列であると捉えられることから、これらを『訪問順』と位置づけることができる。一方、⑤は外観・内観写真群の順列が[内→外]のものであり、『訪問順』に対して建物を辞去するときの体験に則した順列であると捉えることができることから、これを『辞去順』と位置づけることができる。『訪問順』が4種あるのに対して、『辞去順』

注2.13) 外観写真群の順列において定位が突出しているため、内観写真群の順列の組合せのみを検討した結果、理論上44種の組合せがあり、分析事例数126を44で除した数が2.9であったため、3事例以上のものを抽出した。

注2.14) 写真家である村井修は「建築メディアというのは技術専門誌であり、「建築写真」は建築家が意図した「ハレ」の部分抽出することが役割なのです。」と述べている(村井修:「建築写真」を開く-象徴としての写真.建築雑誌 vol.125 no.1606.2010.7)。

注2.15) 大橋富夫は「使う写真を見てわかったのは、建築家にとって一番のメインはファサードだということ。」と述べている(大橋富夫:「建築写真」はカタくない.建築雑誌 vol.125 No.1606.2010.7)。

注2.16) 高井潔は「建物を代表する写真というとは、やはりオーソドックスな全景写真といえるでしょう。」と述べている(高井潔:建築写真術.学芸出版社 1988)

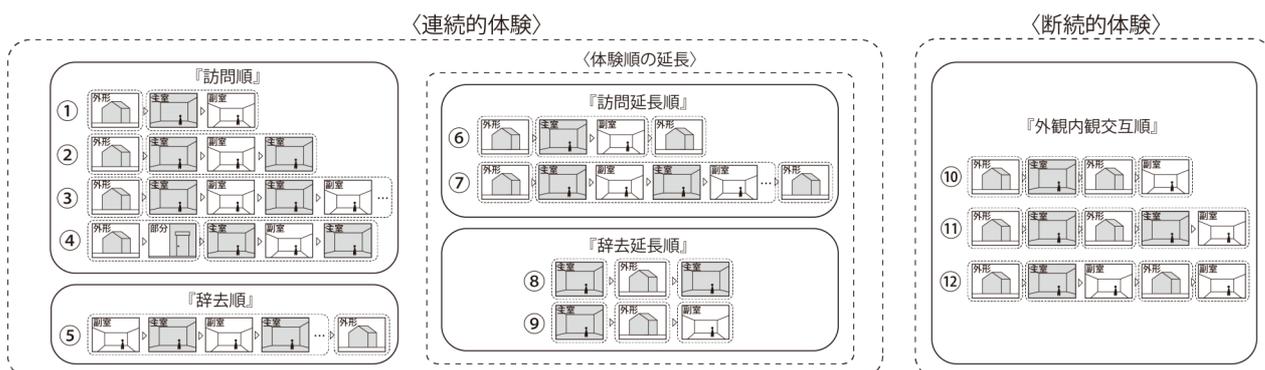


図2.13 身体的体験による順列の型の整理



は⑤の1種のみであった。⑥⑦は外観・内観写真群の順列が[外→内→外]のものであり、『訪問順』の外観写真群から内観写真群へという体験にさらに外観を末尾に追加し、その体験を延長した順列と捉えられることから、これらを『訪問延長順』と位置づける。『訪問延長順』と同様に体験を延長したものとして⑧⑨があり、『辞去順』の内観写真群から外観写真群へという体験にさらに内観写真群を末尾に追加し、再び建築の内部空間に戻ってくるという体験を有した順列である。これらを『辞去延長順』と位置づけることができる。以上の『訪問順』、『辞去順』、『訪問延長順』、『辞去延長順』は一連の体験として成立した連続的体験であったのに対して、⑩ー⑫は外観・内観写真群の順列が[外→内→外→内]のものであり、外観写真群と内観写真群が交互に並べられることから、断続的な体験と捉えられ、これらを『外観内観交互順』と位置づけることができる。以上、身体的体験として、大きく連続的体験と断続的体験の2種、さらに、連続的体験は4種に別れ、合計5種に整理することができた。

次に、意味的体験を形づくる属性の階層は[外形>主室>副室]であると考えられることから<sup>注2.17)</sup>、これに則した整理を行う。①は順列全体にわたって[外形>主室>副室]である階層を遵守したものであるため、『階層順』と位置づけることができる。また、②③④⑥⑦⑫は順列導入部では階層を遵守しつつも、順列後半部においては階層の序列とは異なる順列であることから、これらを順列導入部においてのみ階層を遵守する『導入部階層順』と位置づけることができる。対して、⑤⑧⑨⑩⑪は順列全体において階層の序列とは異なる順列が施されているものであり、『非階層順』と位置づけることができる。一方、属性の階層[外形>主室>副室]に対して、その序列とは逆順(副室、主室、外形の順)となる順列の型はみられなかった。以上、意味的体験として、3種に整理することができた。

身体的体験として整理した5種と意味的体験として整理した3種をまとめたものが表2.13である。これらの照合の結果、表5.8に示すI-VIの型としてまとめることができた。身体的体験として『訪問順』であるものは意味的体験において『階層順』と『導入部階層順』になるものがあることがわかる。一方、身体的体験として『訪問延長順』であるものは必ず、意味的体験において『導入部階層順』となることがわかる。他方、身体的

注2.17) 磯らの言説(注2.9)の順列より、属性の階層は[主室>副室]であると考えられ、注2.11)の言説と合わせると、属性の階層は[外形>主室>副室]となる。

体験として『外観内観交互順』であるものは意味的体験において『導入階層順』と『非階層順』になるものがあることがわかる。また、身体的体験として、内観から始まる『辞去順』及び『辞去延長順』は必然的に『非階層順』となる。

以上、12種の順列の型を身体的体験及び意味的体験から7種の型として整理した。磯らの述べる体験順は身体的に訪問する体験であり、かつ階層順である『Ⅰ：訪問-階層型』に最も近いが、必ずしも訪問する体験だけではなく、建物を辞去する体験（『Ⅱ：辞去-非階層型』）、訪問や辞去する体験を延長するもの（『Ⅲ：訪問延長-階層型』、『Ⅳ：辞去延長-非階層型』）等が存在することがわかった。

表2.13 身体的体験及び意味的体験として整理された順列の型

写真群内の 写真の順列		階層順		非階層順 (〔外形→主室→副室〕を尊重しない)
		全体階層順 (順列全体わたり、〔外形→主室→副室〕を尊重)	導入部階層順 (導入部にて、〔外形→主室→副室〕を尊重)	
連続的 体験	訪問順	①	② ③ ④	
	辞去順		I：訪問-階層型	⑤
	訪問延長順		⑥ ⑦	II：辞去-非階層型
	辞去延長順		III：訪問延長-階層型	IV：辞去延長-非階層型
断続的 体験	外観内観交互		⑧ ⑨	⑩ ⑪
			⑫	
		V：外観内観交互-階層型		VI：外観内観交互-非階層型



## 2-4. 結

### 2-4-1. 写真による情報伝達のまとめ

以上の2節において導出した写真の組合せおよび写真の掲載順による情報伝達の型に対して、意味内容を解釈したうえで写真による情報伝達の作法を導出する。

エドワード・レルフは著書の中で、場所を経験ための重要な要素について以下のように述べている<sup>注2.18)</sup>。

“行動的内側性それ自体は、(中略) 第一に私たちの直接的経験の形態であり、(中略) それは、場所経験のもっともよく理解されている側面であり、(中略) 場所のアイデンティティにおけるその役割を述べようとする本項で考察するのは、主としてこれらの視覚的形態である。”

つまり、エドワード・レルフは、空間を理解するにあたって視覚的情報による直接的な経験が重要であることを述べている。

さらに、福屋の研究によって建築メディア上で最も多く使用されている情報媒体が「写真」であることが報告されていることから<sup>注2.19) 注2.20)</sup>、メディア上でも視覚的な情報媒体である「写真」が、空間を理解するための重要な要素であることが伺える。

ここで、瓜生は映像モンタージュの方法について<sup>注2.21)</sup> 無声映画とテレビによる現場実況中継について以下のように報告している。

“無声映画の時代には、せりふによって、内面を表白することはできなかったから、心理をも映像で表現することに、大きな努力が払われた。何も彼も映像で表現しなければならぬので、映像による表現力は、トーキーになってからよりも豊かであったといえるように思う。(中略) 観客の音声は映像と同時にモンタージュされることによって、現場実況中継を生き生きとしたものにしていく野球中継が時折ある。(中略) 広い観客席の各所に適宜マイクを配し、マイクのとらえる音声を適宜切りかえながら、<映像×音声>のモンタージュが、追求されるべきである。”

つまり、瓜生は映像のみによるモンタージュと、映像と音声によるモンタージュの存在を示しているが、前者は映像のみによって全ての内容を「自律的」に伝達するのに対して、後者は

注2.18) エドワード・レルフ：場所の現象学—没場所性を超えて—、高野岳彦ほか 訳、筑摩書房、pp.96～97、1991

注2.19) 福屋粧子：建築はどのように伝達されるか—制度としての建築写真—(第31回建築文化懸賞論文入選発表 課題:建築/制度)、建築文化 No.616、彰国社、pp.218～224、1998.2

注2.20) 福屋の研究によれば、1997年10月1日発行の雑誌「建築文化」第612号は、表紙・広告などを含めた印刷された誌面の総ページ数168の訳7割の118ページにおいて写真の技術が使用されていることが報告されている。

注2.21) 瓜生忠夫：新版モンタージュ考—映画の認識の系譜—、時事通信社、pp.106～149、1981

音声を補助的な情報として映像に組合せることによって内容を「他律的」に伝達するものだと捉えることができる。

以上の論述を踏まえて前2節で得られた型を概観すると、写真の組合せによる「部分・全体連続型」や「多角的連続型」は、2葉の写真の組合せによって視覚的な体験のみならず身体の移動をも理解することが可能な情報伝達の型である。また、写真の掲載順による「訪問一階層順」や「訪問延長一階層順」は、建築を訪問する、あるいは訪問した後に辞去するという身体の体験の大枠と、屋外および屋内において体験すべき階層をも理解することが可能な情報伝達の型である。ここで、中村による“知覚される空間や物体は、われわれの行動、または仮想の行動と結びついた、さまざまな意味に充ちている”という報告を援用すると<sup>注2.22)</sup>、これらの型は写真の組合せや掲載順によって空間の仮想行動を伝達していると考えられる。

以上の4種の情報伝達の型はいずれも当該の情報のみによって自律的に空間の仮想行動を伝達することを意図したものだと言える。よって、これらの4種の型を「自律的仮想行動の伝達」の作法として括りとることができる(図2.14)。

また、写真の組合せによる「空間移動想起型」は、2葉の写真の組合せによって隣接する空間への移動を想起させるものであるが、その空間の移動を想起するためには写真以外の補助的な情報として言説や図面による理解を必要とするものである。ここでも同じく中村による報告を援用すると<sup>注2.22)</sup>、当該の情報のみによっては空間体験の本質的理解には至らず、他の補助的な情報と併せることにより、他律的に空間の仮想行動を伝達することを意図したものであると言える。よって上記の情報伝達の型を「他律的仮想行動の伝達」として括りとることができる(図2.14)。

続いて、上記の作法によって整理することができなかった残りの情報伝達の型の意味内容を整理するためにフェルディナン・ド・ソシュールによる研究報告を援用する。ソシュールは、言語学的な立場から言語情報が2つの水準に構成されていることについて、以下のように説明している<sup>注2.23)</sup>。

“言語辞項間の関係と差異は、二つの分명한区域のなかで展開する。(中略)一方、話線のなかで、語はそれらの連繋の力によって、かの二個の要素を一時に発音することをゆるさな

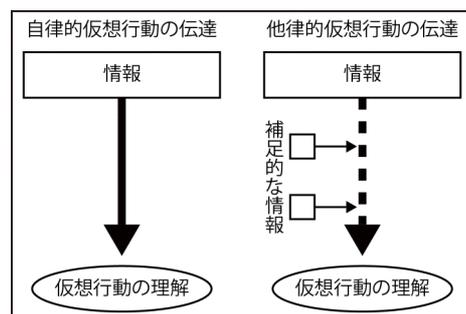


図2.14 自律的仮想行動の伝達および他律的仮想行動の伝達

注2.22) 中村良夫：風景学入門，中公新書，p.92, 1982

注2.23) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，pp.170～177, 1940

い・言語の線的特性にもとづく関係を、それらのあいだに取り  
むすぶ。要素は言の連鎖の上に順ぐりに配置される。このよう  
な・支えとして拮がりをもつ統合は、これを統合 (syntagme)  
と称することができる。統合はそれゆえつねに二個以上の接踵  
単位からなる(たとえば:re-lire; contre tous; la vie humaine;  
Dieu est bon; S' il fait beau temps, nous sortirons, etc. )。  
統合内におかれるときは、辞項はそれに先行するもの、後続す  
るもの、もしくはその双方と、対立することによってはじめて  
価値をえる。他方、話線のそとで、なんらかの共通のものを示  
す語は、記憶のなかで連合し、かくしてそこに多種多様な関係  
のむすばれる語群ができあがる。(中略)それらは支えとして  
拮がりをもたない、それらは、かの各人のうちに言語を組み立  
てる内部の財室の一部をなす。われわれはこれを連合関係  
(rapport associatif) とよぼうと思う。統合関係は顕在であ  
る;それは実効のある系列のうちにひとしく現前する二個以上  
の辞項にもとづく。これに反して、連合関係は陰在的記憶系列  
のうちに潜在する辞項をつなぐ。”(現代の記号論では、ソシ  
ュールの言う統合、連合はそれぞれ統語、範列という用語に置  
き換えられている。)

さらにソシュールは、上記の関係を建築空間に置き換えて以  
下のように述べている。

“この二重の観点からすれば、言語単位は建築物の一定部分、  
たとえば柱に比べることができる;これは、一方、その支え  
る台輪とある関係をなしている;このひとしく空間中に現前す  
る二個の単位の配備は、統合関係を想わせるものがある;他方、  
その柱がドリア式であるとすれば、それは脳裡に他の様式(イ  
オニア式、コリント式、など)との比較をよびおこす、これら  
は空間中に現前していない要素である:この関係は連合的であ  
る。”

実際に建築の設計にソシュールの述べる記号論的な思考を導  
入する建築家も数多くみられる。なかでも坂本は、以下のよう  
に述べている<sup>注2.24)</sup>。

“部分を内容する建築の空間は、一つの部屋のように室内部  
で分節される空間的な場の集合によって形成される、いわゆる  
内部空間だけではない。個々の部屋である室の集合を包含する  
建築全体の内部空間、あるいは建築の分節された外形ヴォリュ  
ームの集合である建築の外形、さらにその外形ヴォリュームに

注2.24) 坂本一成:住宅-日常の詩学, TOTO出版,  
pp.240~246, 2001

よって分節される外部空間、そして建築、工作物や空地が集合することでヴォイドとます（ヴォリューム）によって形成される地域や都市の空間、また逆に建物内部を形成する部位・部材の構成による関係による空間もある。こうした空間はすべてその部分をなすものと、それらの配置によって連鎖をなした集合の構成といえる。つまりどの空間もそれを形成する部分である単位にかかわり、そして集合の仕方にかかわる。だから空間配列はその空間を構成する空間の単位の選択がまず問題となる。

（中略）建築の内部空間を分節している単位である室に、どのような選択の可能性の幅である範列的选择があり得るか。開放的な室、暗い室といったそれぞれの部屋の性格にかかわることもあれば、寝室、居間あるいは教室、病室といった使用用途に機能的に対応することもある。”

このように、坂本は建築における室を空間単位として、それらの配列（位相関係）によって空間が構成されているという視点から建築を評価する。この室の配列は、ソシュールの言うところの統合関係に該当する。さらに、単位となる室には様々な用途や機能が対応しており、これらについてどのような範列関係によって分類されるのかについても言及している（図2.15）。

以上のように、建築においても記号論的な思考による捉え方が導入されていることを踏まえて前2節で得られた型を概観すると、写真の組合せによる「同類情報並置型」は、同一の建物内あるいは、異なる建物間において、開口部や手掛けなどの特定の空間要素を連続させることで、特定の空間要素の統一性や差異性などを理解させることが可能な情報伝達の型である。また、写真の掲載順による「外観内観交互一階層順」や「外観内観交互一非階層順」は、外観および内観の視覚像のまとまりを、反復させながら連続させることで、建築空間の全体を対照的に理解させることが可能である。これら4種の型は、ソシュールや坂本による空間における範列関係を伝達するものであると言えるため、これら4種の型を「範列関係の伝達」の作法として括り取る（図2.16）。

また、写真の組合せによる「外観・周辺環境対応型」は、建物の外観を含めた外部空間の要素を組合せることで、建築と外部空間の構成を理解させることを意図した型であり、写真の掲載順による「辞去一非階層順」や「辞去延長一非階層順」は、

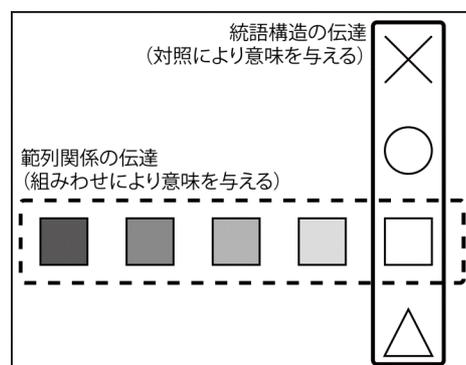


図2.15 統合構造の伝達及び範列関係の伝達

内観写真のまとめり、外観写真のまとめりを連続させることで、建築空間における辞去する（あるいは辞去した後に訪問する）という空間体験を意識しつつ、屋内及び屋外における体験は複数の写真の組合せによって成立し、さらにまとめり同士が連続することで屋内から屋外へと辞去するような体験を理解させることが可能となる。よってこれら3種の型を「統語構造の伝達」の作法として括り取る（図2.16）。

以上、前2節において得られた知見について、意味内容を解釈したうえで同じ意味内容の作法として括り取った結果、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「範列関係の伝達」「統語構造の伝達」の4種を導出した（図2.16）。

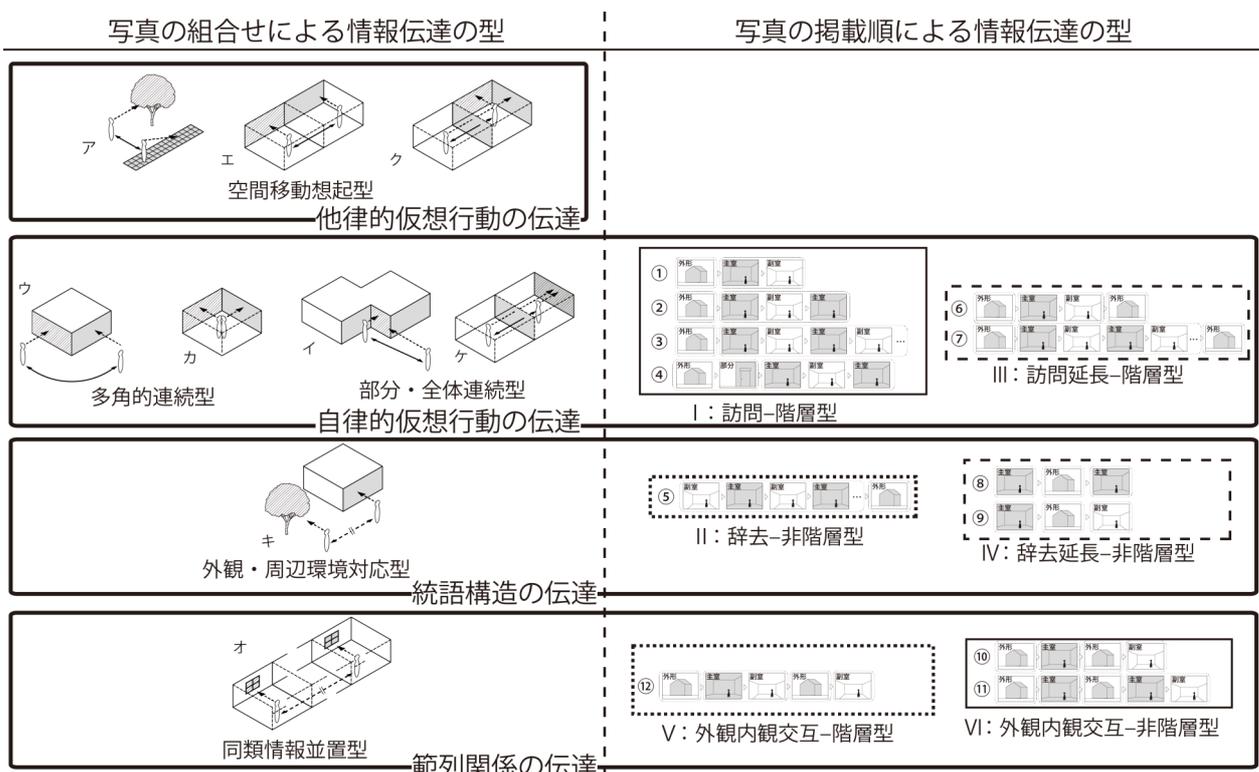


図2.16 写真による情報伝達の作法

## 第3章 配置図による情報伝達

### 1節：序

3-1-1. 配置図について

3-1-2. 本章の目的

### 2節：研究の方法

3-2-1. 分析対象

3-2-2. 分析方法

### 3節：対象事例の分析

3-3-1. 図上方位

3-3-2. 描画位置

3-3-3. 配置図の描画表現

### 4節：結

3-4-1. 配置図による情報伝達のまとめ

### 第3章 配置図による建築空間の情報伝達

#### 3-1. 序

「1-1-3. 研究の題材」で述べたとおり、本研究では建築メディアに掲載されている写真と配置図を題材として論考を進めるわけだが、本章においては特に配置図を対象として分析を施す。

#### 3-1-1. 配置図について

実体の建築空間を他者に伝える媒体のひとつとして、建築図面が挙げられる。これら各種図面のうち配置図は、敷地内における当該建築の配置の説明はもとより、様々な周辺環境の様相を説明する役割の一端を担っていると予想される。

さて、我が国に1958年より制定される建築製図通則(JIS A0150)によれば、配置図は北を図面上方として描くことを原則とされているが、建築作品集や建築雑誌等の専門誌を概観すると、あえて北以外の方位を図面上方とする配置図が散見される(図3.1、3.2)。これがある意図のもとになされているとするならば、図面上方とする方位(以下、図上方位)の設定は、実体の建築空間ないしは周辺環境を伝えるために配置図の向きを重視した結果だと推測される。また、配置図において、描画者ないしは編集者はどこまでの範囲を描くか(以下、描画範囲)を決定する際、当該建築の周辺環境を説明するのに事足りる実体の周辺環境の括り取りを行っているといえる。ところで、図上方位の問題に比して配置図の描画範囲の設定には原則がなく、当該建築を配置図内のどこに据えるか(以下、描画位置)も、各建築作品において一様ではない(図3.1、3.2)。つまり、描画範囲と描画位置の設定は、描画者ないしは編集者に委ねられており、ここに、配置図における図上方位、描画範囲、及び描画位置の設定は、実体の周辺環境を他者に伝えるためのある種の空間表現であると考えることができる。

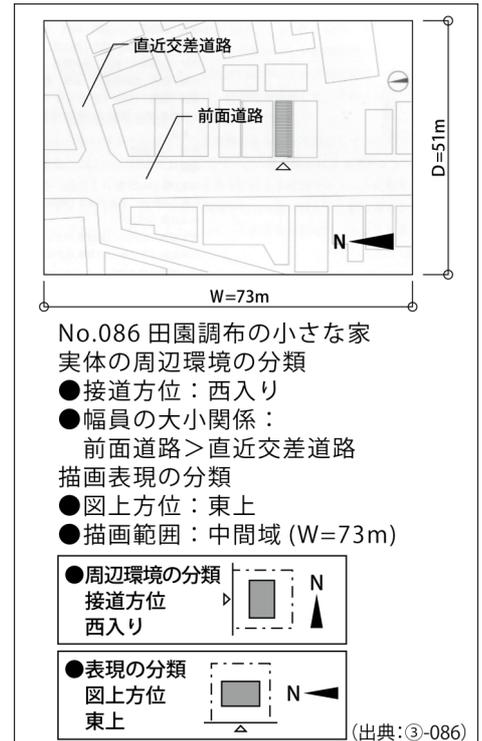


図3.1 図上方位の分析例

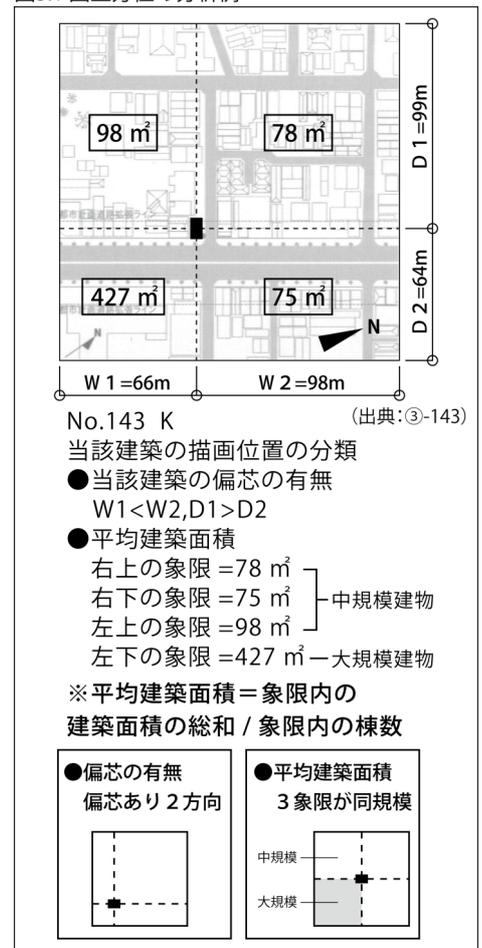


図3.2 当該建築の描画位置の分析例

### 3-1-2. 本章の目的

以上より、本研究では“現代日本の建築作品の配置図を対象に、実体の周辺環境に対する図上方位、描画範囲、及び描画位置の設定傾向を分析することで、配置図による情報伝達の作法を抽出すること”を目的とする。

### 3-2. 研究の方法

#### 3-2-1. 分析対象

本章では、様々な描画者ないしは編集者による配置図を図上方位、描画範囲、及び描画位置の3観点から検討し、実体の周辺環境をどのように配置図に定着させているか、その描画表現の傾向の理解を試みる。なお、本章では、個々の事例が備える固有の環境要素をひとたび捨象し一般化する観点を介することで、さまざまな配置図の比較分析を可能にし、これらに内在する一定の傾向という基礎的知見を得ることを論旨とする。ここで、こうした論旨から、実体の周辺環境に対する形式的側面に限定した上記の3観点によって比較分析をするにあたり、本研究では建物規模、立地条件等を概ね揃える必要があると考えた。そこで、これを満足し、より豊富な事例数が得られる「高密度な都市環境に建つ住宅（以下、都市住宅）」の配置図<sup>注3.1)</sup>を対象とし、北以外<sup>注3.2)</sup>の図上方位<sup>注3.3)</sup>によって掲載される事例を選定する。また、レイアウトの都合上、掲載誌毎に配置図の描画範囲に相違があることが予想されるため、我が国を代表する建築雑誌である新建築社出版の2誌（新建築、新建築住宅特集）に掲載される建蔽率50%程度以上の都市住宅を満たし、かつ建築

注3.1) 配置図は様々な周辺環境の様相を説明する役割を担うことが予想されるため、本研究では当該建築・道路・周辺建物の描画がなされている配置図を分析対象として扱った。

注3.2) 北を図面上方とする配置図は、建築製図通則の原則に従った結果なのか、それともたまたま配置図が表現すべき意味内容が通則と一致したのかを判別するのは困難と言わざるを得ないため、通則以外の空間表現の意図の存在を判読可能である南・東・西を図上方位とする配置図を分析対象とした。

注3.3) 各事例の図上方位の判定基準は、下図のように図面を八方向に分割した際、四方位のうち斜線部の範囲に含まれる方位をそれとする。これより、右図の図上方位は西となる。

表3.1 資料リスト

事例番号	掲載年月	作品名	図上方位	建蔽率	事例番号	掲載年月	作品名	図上方位	建蔽率	事例番号	掲載年月	作品名	図上方位	建蔽率	事例番号	掲載年月	作品名	図上方位	建蔽率						
1	2011.10	深沢の家	南	52.9	45	1997.05	遠ざかる家	南	58.3	89	2004.09	新野中の住宅	東	58.4	133	1992.05	中田邸	東	69.0	177	2002.01	A residence+studio	西	59.3	
2	2011.10	代々木上原の家	南	56.4	46	1999.02	S-HOUSE	南	66.0	90	2004.07	器の家	東	59.4	134	1991.07	石巻の家	東	49.9	179	2001.05	真田利和の家	西	69.3	
3	2011.09	祐天寺の家	南	57.0	47	1996.09	曲り居の家	南	52.3	91	2004.03	アコ	東	51.1	135	1991.03	鶴見野の家	東	78.1	179	2001.02	白のボロン	西	50.7	
4	2011.05	大塚山の住宅	南	59.6	48	1996.08	CRYSTAL UNIT II	南	67.0	92	2003.11	器の家	東	50.6	136	1990.10	路地裏の家	東	68.1	180	2000.11	中村中野の家	西	58.1	
5	2011.03	HTG	南	49.4	49	1996.06	花見台のある家	南	100.0	93	2002.05	G&A HOUSE	東	50.0	137	1990.06	向島三枚柱立て	東	82.1	181	2000.10	一橋学園+M邸	西	59.0	
6	2010.06	東京郊外の家	南	50.1	50	1995.10	お花茶屋の家	南	61.1	94	2002.08	M邸	東	58.7	138	1990.04	YAKICHI	東	71.4	182	2000.09	ドミノ+	西	60.0	
7	2009.07	Karita's Jungle LCHSH-#14	南	57.7	51	1995.02	TAKAMATSU HOUSE	南	54.8	95	2002.07	鶴ノ木の家	東	65.7	139	1989.02	ブロンクハウス-2	東	49.7	183	2000.06	新巻の舟井	西	68.4	
8	2009.04	OUCHE-06	南	50.7	52	1994.11	MUSEE DE RUKI	南	58.7	96	2002.05	元居の家	東	59.9	140	1897.10	F HOUSE	東	59.9	184	1999.10	嵐川の家	西	58.5	
9	2009.02	機房邸	南	49.4	53	1994.10	亀戸の家	南	72.7	97	2001.12	新緑住居	東	52.6	141	1985.autumn	信州の家	東	59.0	185	1999.09	K-house	西	57.1	
10	2008.09	変形地+OFFSET	南	49.8	54	1994.06	目黒不動の家	南	62.0	98	2001.11	空をつかまえる家	東	49.9	142	2012.10	中目黒の家	南	59.7	186	1999.06	北島の家	西	55.7	
11	2008.07	G-house	南	49.9	55	1994.06	香妻連りの家	南	59.6	99	2001.07	ホワイトボックス	東	51.7	143	2012.07	K	西	60.2	187	1998.12	岐阜の住宅	西	55.1	
12	2008.04	K邸	南	59.5	56	1994.06	ヨコスカハウス	南	60.0	100	2001.05	池田山の住宅	東	59.9	144	2012.06	大宮の家	西	58.7	188	1998.07	GOD FIELD	西	58.2	
13	2008.01	IRONHOUSE	南	49.2	57	1994.01	大井町の家	南	75.3	101	2000.11	A-1	東	60.3	145	2012.06	N邸	西	49.9	189	1998.03	アパ1988	西	61.8	
14	2007.05.※	白山通りのいえ	南	77.5	58	1993.03	寺倉邸	南	62.5	102	2000.11	梅田海神の家	東	49.9	146	2012.03	旗布の家	西	69.5	190	1998.01	ハチオオのある家	西	59.2	
15	2006.07	+HOUSE	南	55.8	59	1992.11	山原の家	南	58.6	103	2000.04	T-house	東	50.0	147	2012.03	スキャンイエ	西	49.9	191	1997.11	北原ふみの家	西	59.8	
16	2006.07	おちの家	南	46.1	60	1991.10	駒場の家	南	56.6	104	2000.03	KUSIハウス	東	59.8	148	2012.02	谷田邸の家	西	53.0	192	1997.10	世田谷ハウス	西	59.0	
17	2005.12	大田の家	南	57.7	61	1991.04	MH	南	49.7	105	1999.12	八雲の家	東	69.8	149	2011.12	桜の家	西	69.6	193	1997.08	栞石の家	西	69.3	
18	2004.11	植村YAMA DUPLEX	南	71.8	62	1985.autumn	吉田邸 長瀬のクライスラビル	南	59.5	106	1999.11	福島の家	東	69.0	150	2011.12.※	二重螺旋の家	西	55.7	194	1997.08	SCHOLA	西	59.6	
19	2004.11	デュムハウス	南	57.0	63	2012.12	星上げの家	東	51.5	107	1999.10	ナチュラシエルター	東	59.2	151	2011.11.	御所西の家	西	59.9	195	1997.08	CASA O	西	59.4	
20	2004.09.※	G	南	58.8	64	2012.03	元浅草の住宅	東	73.0	108	1998.08	国立の上の家	東	49.5	152	2011.04.※	地盤+壁紙の家	西	58.1	196	1996.06	上原邸の住宅	西	56.9	
21	2004.08	九段の家	南	58.1	65	2011.11	川口邸	東	58.5	109	1998.12	『空』の露台	東	50.0	153	2011.03	SKY GARDEN HOUSE	西	67.8	197	1996.04	Healthcare小森	西	59.0	
22	2004.04	S-HOUSE	南	49.9	66	2011.04	house M	東	58.0	110	1998.11	管谷の家	東	53.3	154	2010.12	ミンナノイエ	西	53.1	198	1996.04	石津邸	西	59.9	
23	2003.05	Double-L	南	49.2	67	2010.12	百人町の家	東	70.0	111	1998.10	静谷連りの住宅	東	58.2	155	2010.07	タワーまちや	西	82.5	200	1995.09	Y STUDIO	西	79.3	
24	2003.03	ナチュラルウッド	南	59.5	68	2010.07	YK	東	59.3	112	1998.08	駒込邸	東	57.3	156	2009.08	妙蓮寺の店舗併用住宅	西	67.5	200	1995.07	T-house	西	70.8	
25	2003.02	月夜の家	南	53.7	69	2009.12.※	House H	東	69.5	113	1998.06	お花茶屋すきばー	東	59.9	157	2009.03	美術館のような家	西	54.8	201	1995.06	藤枝 能舞台のある家	西	50.3	
26	2002.07	SUGAR	南	52.1	70	2009.11	[Jaabiko]	東	59.9	114	1998.05	Re-Site House	東	64.5	158	2009.03	NOVELA	西	63.1	202	1995.02	東大泉の住宅1994	西	63.2	
27	2002.06	F1-ガレージ	南	49.8	71	2009.09	cross air	東	59.1	115	1998.04	PF-2	東	59.9	159	2008.10	DOUBLE CUBE	西	59.8	203	1994.11	小路の家	西	57.0	
28	2000.08	仲連上の住宅	南	59.0	72	2009.06	柿の木坂の家	東	50.0	116	1998.03	階段収納の家	東	50.0	160	2008.09	アトリウムハウス	西	82.8	204	1994.10	嵐くまの家	西	59.7	
29	2000.06	西田邸	南	49.0	73	2008.12	練馬の家	東	58.0	117	1997.11	ちっちゃな家	東	59.1	161	2008.08	露地の家	西	59.7	205	1994.09	西沢の家	西	58.9	
30	2000.05	白倉の家	南	59.8	74	2008.11	SWING	東	51.9	118	1997.09	永久保邸	東	49.9	162	2007.12	Oval Panel House	西	49.9	206	1994.07	彫刻家の住宅	西	68.0	
31	1999.11	根城大野の家	南	49.6	75	2008.07	柱と床	東	53.1	119	1997.05	FORMATION	東	49.8	163	2007.01	colors	西	56.9	207	1994.04	パールの家	西	67.9	
32	1999.10	寛ヶ谷の住まい	南	48.6	76	2007.06	M'異化された場	東	59.7	120	1997.05	鷹倉の家	東	58.6	164	2006.01	box k	西	55.2	208	1994.03	北原の家 置中案	西	52.9	
33	1999.09	船場の家	南	48.4	77	2007.06	FROLLEY	東	50.1	121	1997.02	初音の家	東	52.4	165	2006.01	船場の家IV	西	79.9	209	1993.12	オパール	西	49.7	
34	1999.05	O-house	南	50.2	78	2007.05	H'Orange	東	59.7	122	1997.01	ふくむ建築の家	東	53.3	166	2006.01	東武ハウスが'001	西	56.3	210	1993.02	藤原の家	西	65.9	
35	1998.11	新原の家	南	59.8	79	2007.02	橘	東	59.9	123	1996.08	中伊豆の家	東	70.0	167	2005.12	UK	西	51.4	211	1992.12	PERR HOUSE	西	51.5	
36	1998.11	新原の家	南	58.4	80	2006.11	WHITE BASE	東	66.4	124	1995.07	新築大久保の家	東	60.0	168	2005.11	松原のobalax	西	61.3	212	1992.11	嵐川の家	西	50.5	
37	1998.10	青木山の家	南	57.2	81	2006.07	東北沢の住宅	東	59.9	125	1995.02	甲府の家	東	52.9	169	2005.07	studio d	西	57.5	213	1992.05	F HOUSE	西	59.7	
38	1998.09	立休土間の家	南	68.8	82	2006.05	三角敷地の家	東	52.7	126	1995.01	中塚ハウス	東	60.8	170	2005.06	赤堤連りの家	西	59.5	214	1992.05	大島水野邸	西	55.4	
39	1998.08	大森の家	南	57.8	83	2006.02	HOUSE SH	東	60.0	127	1994.11	WEB HOUSE	東	59.8	171	2005.04	Ca	西	49.5	215	1988.04	時の浜の家	西	76.8	
40	1998.06	飯田小園	南	53.0	84	2005.11	ヨウキ	東	59.7	128	1994.07	アルテラレ町屋	東	79.7	172	2005.01	Ca	西	50.8						
41	1998.05	美原の家	南	54.4	85	2005.09	とやまの家	東	59.0	129	1994.04	境界線の上の家	東	59.8	173	2004.04	K邸	西	65.4						
42	1997.12	江波の家	南	74.0	86	2005.08	武蔵野の小さな家	東	71.6	130	1993.08	一芳堂+和菓子屋とすまい	東	78.5	174	2004.04	住友k201	西	50.0						
43	1997.10	南台のアトリエ	南	59.8	87	2005.06	田園調布F邸	東	58.9	131	1992.11	上野の家	東	55.0	175	2003.05	自由が丘のコートハウス	西	50.0						
44	1997.07	CAGE HOUSE	南	52.0	88	2005.02	Nt-house	東	60.0	132	1992.07	中野の家	東	56.1	176	2002.04	箱の家-49	西	54.9						

掲載年月の欄に※の記される事例は「新建築」に掲載される作品を示す。

製図通則(JIS A 0150)が定められた 1958 年以降に掲載される作品の配置図のうち、周辺建物等の描画がみられる 1985 年以降の配置図として、全 215 葉を分析対象とした(表 3.1)。

### 3-2-2. 分析方法

本章は前節で述べた通り、基礎的知見を得るために実体の周辺環境に関する分析の視点も近傍道路の性格と周辺の建物規模という形式的観点に限定し、ア) 図上方位と描画範囲、イ) 描画位置の 2 種から配置図の描画表現を論考する。まず、実体の周辺環境に対するア) 図上方位と描画範囲を検討するため、前面道路と直近交差道路<sup>注3.4) 注3.5)</sup>といった敷地近傍の道路の幅員の大小関係によって分類した実体の周辺環境のパターンとその際の図上方位との関係进行分析する(図 3.1)。さらに図 3.1 が示すように、D と W の計測から描画範囲を抽出し、上記の分析結果との照合を行う。次に、イ) 描画位置を検討する。例えば、図 3.2 の事例では当該建築を配置図の中心から左下へ偏芯させて描いている。ここで、当該建築を原点に配置図を 4 象限に分割した際の平均建築面積<sup>注3.6)</sup>をみると、最も大きな規模の建物の建ち並びが配置図左下の小さな象限に描かれ、かつ他の 3 つの象限に概ね同規模の建物の建ち並びが描かれていることがわかる。これより、当該建築を配置図のどこに据えるかという問題には実体の周辺環境、すなわち 4 象限における平均建築面積の揃い・不揃いとの間に何らかの応答がみられると予想される。以上より、い) 配置図における当該建築の偏芯の有無、ろ) 平均建築面積の 2 水準から描画位置を検討する。このために、まず図 3.2 に示すように当該建築を原点に配置図を 4 象限に分割し、D1, 2、W1, 2 を計測する。計測した各値をもとに、い) 当該建築の偏芯の有無を検討、分割した 4 象限をもとに、ろ) 平均建築面積を検討したのち、両者の照合から描画位置の傾向を把握する。

次に、個別に検討した図上方位、描画範囲、及び描画位置の分析結果の照合から、これら 3 観点が一致するものを配置図の表現形式として抽出し、さらに抽出された表現形式に対して知

注3.4) 配置図に描画される道路のうち、前面道路に交差する最も近傍の道路を直近交差道路とする。

注3.5) 二辺接道の敷地をもつ事例の場合は、当該建築のエントランスが位置する外壁と平行な道路を前面道路、他方の道路を直近交差道路とする(下図)。

注3.6) 象限内に描かれる周辺建物の建築面積の総和を、象限内の周辺建物の棟数で除したものを平均建築面積と定義する。

覚体験に関する既往知見の援用により意味内容を解釈したうえで、同じ意味内容として括りとられる複数の表現形式のまとまりを、配置図による情報伝達の型として導出することを試みる。

### 3-3. 対象事例の分析

#### 3-3-1. 図上方位

ここでは配置図の描画表現のうち、図上方位と描画範囲について検討する。そこで本章では、これより以下、各図上方位における接道方位について、前面道路と直近交差道路の幅員の大小関係とその描画位置について検討したのち、さらに描画範囲と上記の検討結果を照合し、実体の周辺環境に対する図上方位及び描画範囲設定の傾向を把握する。

各図上方位で採用される接道方位の偏向をみるため、図上方位を縦軸、接道方位を横軸に設定した表を作成する(表 3.2)。その結果、各図上方位における接道方位の偏向をみると(表 3.2 黒枠部)、南上配置図では北入り(35/62)、東上配置図では西入り(35/79)、西上配置図では東入り(34/74)に最も多くの該当がみられ、いずれも配置図において前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定するものであった。次いで、南上配置図では西入り(13/62)、東上配置図では北入り(24/79)、西上配置図では北入り(17/74)に多くの該当がみられ、これらは前面道路を敷地の左・右側に描画するよう図上方位を設定するものであった。この結果から、全事例を配置図における前面道路の描画位置4種に分類すると(表 3.3)、前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定するものに全体の約5割(104/215)の該当がみられ(表 3.3 黒枠部)、次いで左

表3.2 図上方位と接道方位

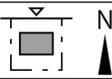
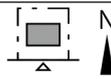
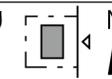
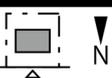
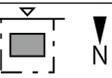
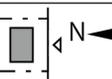
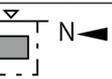
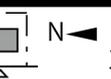
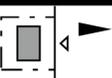
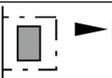
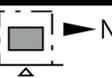
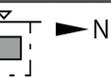
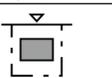
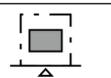
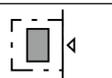
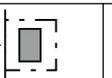
接道方位 図上方位	北入り  N	南入り  N	東入り  N	西入り  N	合計
南上配置図	 N 35 葉	 N 4 葉	 N 10 葉	 N 13 葉	62 葉
東上配置図	 N 24 葉	 N 10 葉	 N 10 葉	 N 35 葉	79 葉
西上配置図	 N 17 葉	 N 15 葉	 N 34 葉	 N 8 葉	74 葉
合計	76 葉	29 葉	54 葉	56 葉	215 葉

表3.3 前面道路の描画位置

前面道路	上側  N	下側  N	右側  N	左側  N	合計
件数	22 葉	104 葉	40 葉	49 葉	215 葉

側に描画するよう図上方位を設定するもの（49/215）と右側に描画するよう図上方位を設定するもの（40/215）に多くの該当がみられた。一方で、前面道路を敷地の上側に描画するよう図上方位を設定するもの（22/215）は最も該当が少なかった。さらに、前面道路を右側と左側に描画するよう図上方位を設定するもの 89 葉を対象に、直近交差道路の描画位置をみると、いずれも直近交差道路を敷地の上側に描画するよう図上方位を設定するものに比して下側に描画するよう図上方位を設定するものに偏向がみられた（表 3.4 黒枠部）。

ここまでの検討した結果より、前面道路ないしは直近交差道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定する傾向がみられた。これより、本項では前面道路と直近交差道路の幅員の大小関係によって分類した実体の周辺環境のパターンと前面道路の描画位置を比較することにより、実体の周辺環境に対する近傍道路の描画位置の傾向を把握する。まず、前面道路と直近交差道路の幅員の大小関係という実体の周辺環境に関する観点を縦軸に設定し、描画表現に関する観点として前面道路の描画位置を横軸に設定した表を作成する（表 3.5）。各幅員の大小関係における前面道路の描画位置の偏向をみると、前面道路の幅員が直近交差道路より大きいないしは同程度である場合は、前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定するものみに偏向がみられた。一方、前面道路より直近交差道路の幅員が大きい場合では、前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定するものと、前面道路を敷地の左右側かつ直近交

表3.4 前面道路と直近交差道路の描画位置

前面道路	右側 (40 葉)		左側 (49 葉)		合計
交差道路	上側	下側	上側	下側	
件数	13 葉	27 葉	18 葉	31 葉	89 葉

表3.5 前面道路と直近交差道路の大小関係、及びその描画位置と描画範囲

前面道路の描画位置 幅員の大小関係 描画距離	上側			下側			右側			左側			合計
	近傍域	中間域	遠方域	近傍域	中間域	遠方域	近傍域	中間域	遠方域	近傍域	中間域	遠方域	
前面道路 > 交差道路	1 葉	4 葉	2 葉	10 葉	26 葉	16 葉	2 葉	6 葉	3 葉	2 葉	12 葉	2 葉	86 葉
前面道路 与 交差道路	2 葉	4 葉	3 葉	6 葉	17 葉	8 葉	1 葉	2 葉	6 葉	1 葉	11 葉	3 葉	64 葉
前面道路 < 交差道路	0 葉	5 葉	1 葉	1 葉	15 葉	5 葉	2 葉	10 葉	8 葉	4 葉	8 葉	6 葉	65 葉
合計	22 葉			104 葉			40 葉			49 葉			215 葉

差道路を下側に描画するよう図上方位を設定するものに事例数の分散がみられた（表 3.5 網掛部）。

以降、これまでの分析結果に、さらに描画範囲の観点を加えた分析を行う。描画範囲を検討するために、図 1 に示すように計測した DとWのうち、より大きい値 (L) <sup>注3.7)</sup> を描画範囲として抽出し、5 m毎の該当事例数を示す表を作成する（表 3.6）。表 3.6 より、75m に該当する事例数（18 葉）が最も多く、その半数である 9 葉を上回る描画範囲は、50m 以下、105m 以上ではみられなくなる。これより、それらを境に全事例を  $L \leq 50m$ 、 $50 < L \leq 100m$ 、 $100m < L$  の 3 種の描画範囲に大別し、それぞれを近傍域、中間域、遠方域とした<sup>注3.8)</sup>。

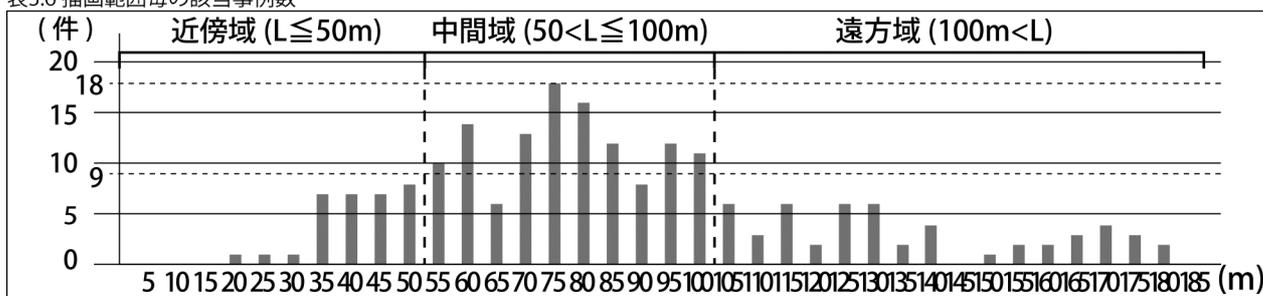
注3.7) 掲載誌のレイアウトの都合上、配置図に描かれる範囲を切削する場合も予想されたため、配置図の長辺のみを描画範囲として抽出した。

注3.8) 本稿では、さまざまな配置図に内在する描画範囲の観点における一定の傾向を把握するために、最頻値に寄り添うまとまりがどの程度のレンジとして括り取ることが可能であるのか、同時にこの最頻値に寄り添うまとまりから上下に外れていると判読し得るレンジとに仕分けることができるのか、を検討することが必要であると考えた。そのため、表4.6 に示す頻度分布が一瞥して正規分布に近かったことより、本文中で記述した手法と併せて、四分位法によって最頻値に寄り添うまとまりを理解する方法も比較検討したところ両方法で得られる結果に違いがなかったことから、結果として得られたレンジ分けに一定の妥当性をみたした。

表 4.5 の横軸に第 2 水準として 3 種の描画範囲を加え、各幅員の大小関係における偏向をみる（表 3.5 黒枠部）。例えば前面道路の幅員が直近交差道路より大きい場合に着目すると、前面道路の描画位置と描画範囲の組合せ 12 種に対して、当該の幅員の大小関係に該当する事例数は 86 葉、平均該当数は各組合せあたり 7.2 葉であることから、8 葉以上の該当がみられた 4 種の組合せを偏向がみられたものとした。このとき、網掛部に包含されるもの、すなわち前面道路を敷地の下側に描画するものにおける描画範囲の偏向をみると、偏りはみられず、いずれの描画範囲にも発現することがわかる。同様の手順で各幅員の大小関係における前面道路の描画位置と描画範囲の偏向をみると、前面道路の幅員と直近交差道路の幅員が同程度の場合も、描画範囲の偏りはみられず、いずれの描画範囲にも発現することがわかる。一方、直近交差道路の幅員が前面道路より大きい場合には近傍域に偏りがみられない。

以上、前面道路の幅員が直近交差道路より大きい、ないしは同程度である場合は、前面道路を敷地の下側に描画するように図上方位を設定する傾向がいずれの描画範囲でもみられる。一方、直近交差

表3.6 描画範囲毎の該当事例数



道路の幅員が前面道路より大きい場合は、前面道路を敷地の下・右・左側に描画するように図上方位を設定するが、近傍域を描く傾向はみられず、中間域以上の描画範囲を包含する偏りが認められた。

注3.9) 平均建築面積が5㎡を示す該当象限数は36件であり、最も多くの件数がみられた70㎡の該当象限数(51件)の過半を満たすが、突発的に発現したものであることから、建物規模を大別する際の境は35㎡と110㎡のみとした。

注3.10) さまざまな配置図に内在する周辺建物の平均建築面積の観点における一定の傾向を把握するために、注119に記した同様の手順を以ってレンジ分けを検討し、妥当性をみた。

### 3-3-2. 描画位置

本項では当該建築の描画位置の問題を検討するために、図3.2に示したように当該建築を原点に配置図を4象限に分割し、D1, 2, W1, 2を計測する。計測した各値と各象限の平均建築面積をもとに、表現に関する観点として、い) 配置図における当該建築の偏芯の有無、実体の周辺環境に関する観点として、ろ) 平均建築面積によって全事例を大別したのち、両者の照合から配置図の当該建築の描画位置の傾向を把握する。

実体の周辺環境を分類するために、図4.2に示すように当該建築を原点に配置図を4象限に分割し、各象限の平均建築面積(S)を算出する。ここで、各事例につき4件の象限が得られることから、全事例215葉に対して860件の象限が得られる。全象限にて平均建築面積(S)を算出し、5㎡毎の該当象限数を示す表を作成した結果(表3.7)、70㎡に該当する象限数(51件)が最も多く、その半数である25.5葉を上回る該当は、35㎡以下、110㎡以上ではみられない<sup>注3.9)</sup>。したがって、それらを境に平均建築面積を $S \leq 35.5 \text{ m}^2$ 、 $35 < S \leq 100 \text{ m}^2$ 、 $100 \text{ m}^2 < S$ の3種の建物規模に大別し、それぞれを小規模、中規模、大規模建物とした<sup>注3.10)</sup>。

表3.7 平均建築面積毎の該当象限数

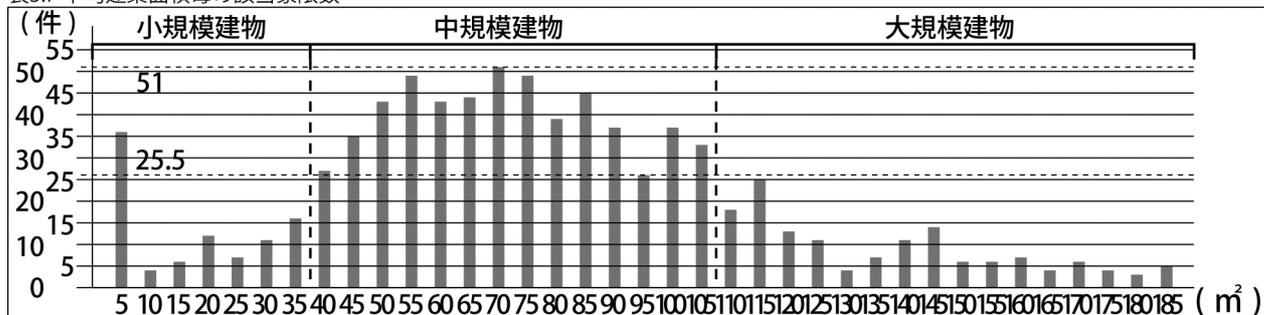
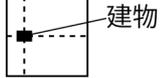
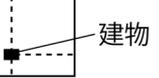


表3.8に示すように各象限の平均建築面積を、大別した3種の建物規模に変換し、4象限の建物規模とその並びの観点から全事例を4種の実体の周辺環境のパターンに分類した。例えば、図3.2の事例は、左下の象限のみが大規模建物を示し、他の3象限は中規模建物を示すため、実体の周辺環境のパターンのうち、「3象限が同規模」に該当する。こうして、4種の実体の周辺環境のパターンに分類した結果、「4象限が同規模」といった同規模の建物が建ち並ぶ周辺環境の事例(66/215)に対して、異なる規模の建物が混在する周辺環境の事例(149/215)により多くの該当がみられた。また、異なる規模の建物が混在する周辺環境の事例における内訳をみると、「3象限が同規模」(89/215)に最も多くの該当がみられた。

注1 2 2) 計測した値の大小関係の傾向を理解するため、収集した全データのD1とD2、W1とW2の比率を示す頻度の分布をみたところ、1.0~1.2の比率に過半数以上の標本数のまとまりがみられたため、これを意味的にはD1=D2およびW1=W2(1.0の比率)とみなして「偏芯なし」とし、それ以外の比率を示す事例を「偏芯あり」と判断した。

ここで、配置図における当該建築の偏芯の有無を検討するために、まず、計測したD1とD2、及びW1とW2の大小関係から「偏芯なし」、「偏芯あり1方向」、「偏芯あり2方向」の3種に全事例を大別する(表4.9)。その結果、「偏芯なし(61葉)」に対して「偏芯あり(154葉)」に偏向がみられた。また、「偏芯あり」の内訳をみると、「偏芯あり1方向」の該当件数は103葉、「偏芯あり2方向」の該当件数は51葉であり、「偏芯あり1方向」により多くの該当件数がみられた。以上より、必ずしも当該建築を配置図の中心に据えて描かないことがわかる。先述した通り、当該建築を配置図のどこに据えるかという問題には、実体の周辺環境との応答がみられると予想されるため、以降で平均建築面積によって分類した実体の周辺環境のパターンと本節の分析結果の照合を行う。

表3.9 当該建築の偏芯の有無

当該建築の偏芯の有無	偏芯なし	偏芯あり		合計
	 建物	1方向  建物	2方向  建物	
件数	61 葉	103 葉	51 葉	215 葉

ここからは、平均建築面積によって分類した実体の周辺環境のパターンと当該建築の偏芯の有無を照合することにより、実体の周辺環境に対する当該建築の描画位置の傾向を把握する。

まず、平均建築面積によって分類した実体の周辺環境のパターンを縦軸に、当該建築の偏芯の有無を横軸に設定した表を作成する(表 3.10)。例えば4象限が同規模の場合に着目すると、当該の実体の周辺環境のパターンに該当する事例数の小計 66 葉に対して、期待値の観点から偏芯なし(22 葉)と偏芯あり1方向(32 葉)に偏向を認めることができる。同様の手順で各実体の周辺環境のパターンにおける当該建築の偏芯の有無の偏向をみると、3象限が同規模、2象限が同規模(並列)の場合はいずれも「偏芯あり1方向」のみに偏向がみられたが、2象限が同規模(交差)の場合は「偏芯あり1方向」と「偏芯あり2方向」に偏向がみられた(表 3.10 黒枠部)。以上より、いずれの実体の周辺環境のパターンにおいても「偏芯あり1方向」に偏向がみられたが、「偏芯なし」は4象限が同規模の場合にのみ偏向がみられ、「偏芯あり2方向」は2象限が同規模(交差)の場合にのみ偏向がみられた。

ところで、図 3.2 の事例は前述した通り、3象限が同規模という実体の周辺環境のパターンに該当し、左下の象限のみが他の象限とは異なる規模の建物の建ち並びが描かれている。ここで各象限の大きさに着目すると、異なる規模の建物の建ち並びが描かれる左下の象限は、4象限

表3.8 平均建築面積による実体の周辺環境のパターン

事例番号	右上象限	右下象限	左上象限	左下象限	事例番号	右上象限	右下象限	左上象限	左下象限	事例番号	右上象限	右下象限	左上象限	左下象限	事例番号	右上象限	右下象限	左上象限	左下象限
1	中	中	中	中	5	中	大	中	中	11	小	大	中	中	16	中	大	小	中
2	中	中	中	中	6	小	小	中	中	13	小	中	中	中	18	中	中	大	中
3	中	中	中	中	7	中	中	大	中	14	中	大	中	大	21	中	大	大	中
4	中	中	中	中	8	小	中	中	中	19	大	大	中	中	32	中	大	大	中
9	中	中	中	中	10	中	中	中	大	29	小	小	中	中	41	中	中	小	中
17	中	中	中	中	12	中	中	中	中	36	中	中	中	中	65	大	中	中	中
20	中	中	中	中	15	中	中	大	中	38	大	小	中	中	72	中	大	大	中
24	中	中	中	中	22	中	大	中	中	42	中	大	中	大	73	大	中	中	大
26	中	中	中	中	23	中	中	中	大	43	中	小	大	大	77	中	中	中	大
27	中	中	中	中	25	大	中	中	中	49	中	中	小	大	164	大	中	中	小
30	中	中	中	中	28	中	中	中	中	51	中	中	小	中	171	中	大	大	中
34	中	中	中	中	31	大	中	中	中	52	中	大	中	中	181	中	大	大	中
37	大	大	大	大	33	中	中	中	中	53	大	中	中	中	187	中	大	大	中
40	中	中	中	中	35	中	中	中	小	56	大	大	中	中	210	大	小	中	大
45	中	中	中	中	39	小	小	中	中	61	中	中	小	小	-	-	-	-	-
48	中	中	中	中	44	中	中	大	中	74	中	小	中	小	-	-	-	-	-
54	中	中	中	中	46	中	中	中	大	78	中	大	中	中	-	-	-	-	-
55	中	中	中	中	47	大	中	中	中	89	中	大	中	大	-	-	-	-	-
58	中	中	中	中	50	中	小	中	中	97	中	大	中	中	-	-	-	-	-
63	大	大	大	大	57	中	中	中	中	101	中	大	中	大	-	-	-	-	-
66	大	大	大	大	59	中	大	中	大	107	中	小	中	中	-	-	-	-	-
67	中	中	中	中	60	中	中	小	中	108	中	中	中	中	-	-	-	-	-
68	小	小	小	小	62	中	中	中	小	111	中	大	中	中	-	-	-	-	-
69	中	中	中	中	64	中	中	大	中	118	中	大	中	中	-	-	-	-	-
70	中	中	中	中	75	中	中	中	大	120	中	中	中	中	-	-	-	-	-
71	中	中	中	中	76	中	中	大	中	122	大	大	中	中	-	-	-	-	-
79	中	中	中	中	80	中	中	中	中	124	中	中	中	中	-	-	-	-	-
86	中	中	中	中	81	中	中	大	中	126	中	小	中	中	-	-	-	-	-
87	中	中	中	中	82	中	中	大	中	128	中	中	中	小	-	-	-	-	-
90	中	中	中	中	83	中	大	中	中	136	中	中	中	大	-	-	-	-	-
92	小	小	小	小	84	大	大	大	大	141	中	小	中	中	-	-	-	-	-
95	小	小	小	小	85	大	大	大	中	142	大	大	中	中	-	-	-	-	-
99	中	中	中	中	88	中	小	中	中	145	大	中	中	大	-	-	-	-	-
104	中	中	中	中	91	大	中	中	中	151	中	中	中	大	-	-	-	-	-
106	大	大	大	大	93	中	小	中	中	156	中	大	中	中	-	-	-	-	-
115	中	中	中	中	94	中	中	中	中	175	大	小	中	中	-	-	-	-	-
119	中	中	中	中	96	大	中	中	中	179	中	中	中	中	-	-	-	-	-
125	中	中	中	中	98	中	中	中	大	189	中	中	中	大	-	-	-	-	-
127	中	中	中	中	100	大	中	中	中	190	中	中	中	大	-	-	-	-	-
130	中	中	中	中	102	中	中	小	中	191	大	大	小	中	-	-	-	-	-
138	中	中	中	中	103	中	小	中	中	193	中	大	中	中	-	-	-	-	-
140	中	中	中	中	105	中	中	中	小	200	中	大	中	中	-	-	-	-	-
146	中	中	中	中	109	中	中	中	中	204	中	小	中	中	-	-	-	-	-
147	中	中	中	中	110	中	中	中	大	207	大	大	中	中	-	-	-	-	-
149	大	大	大	大	112	大	大	中	中	209	中	小	中	中	-	-	-	-	-
150	中	中	中	中	113	小	中	小	小	215	中	中	大	大	-	-	-	-	-
152	中	中	中	中	114	中	大	大	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
154	中	中	中	中	116	大	大	大	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
158	中	中	中	中	117	中	中	中	小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
160	大	大	大	大	121	小	大	大	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
165	中	中	中	中	123	中	小	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
166	小	小	小	小	129	小	小	中	小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
167	中	中	中	中	131	中	中	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
168	中	中	中	中	132	中	中	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
169	中	中	中	中	133	大	中	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
172	中	中	中	中	134	中	中	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
174	中	中	中	中	135	中	中	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
176	中	中	中	中	137	中	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
178	中	中	中	中	139	中	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
182	大	大	大	大	143	中	中	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
188	中	中	中	中	144	中	小	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
199	中	中	中	中	148	大	大	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
201	大	大	大	大	153	大	大	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
202	中	中	中	中	155	中	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
203	中	中	中	中	157	中	中	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
208	中	中	中	中	159	大	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	161	大	中	大	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	162	中	小	小	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	163	大	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	170	中	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	173	小	中	中	小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	177	中	中	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	180	大	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	183	中	中	中	小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	184	中	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	185	大	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	186	大	大	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	192	中	中	中	小	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	194	中	小	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	195	中	中	大	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	196	中	中	小	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	197	中	中	中	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	198	中	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	205	中	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	206	小	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	211	大	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	212	中	大	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	213	大	中	大	大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	214	大	中	中	中	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

4象限が同規模



66葉

3象限が同規模



89葉

2象限が同規模(並列)



46葉

2象限が同規模(交差)



14葉

のうち最も小さい象限であることがわかる。このように異なる規模の建物が混在する実体の周辺環境のパターンにおいては、当該建築を配置図の中心から偏芯させることにより、異なる規模の建物の建ち並びを誇張ないしは矮小化する表現をなすことが予想される。これより以下、3象限が同規模・2象限が同規模（並列・交差）という異なる規模の建物が混在する実体の周辺環境のパターン、かつ「偏芯あり」の事例110葉（表3.10 網掛部）を対象に、異なる規模の建物の建ち並びが描かれる象限の大きさについて詳述する。

実体の周辺環境のパターンを縦軸に、異なる規模の建物の建ち並びが描かれる象限が、最も小さい象限と最も大きい象限のいずれに該当するのかを横軸に設定した表を作成し、表3.10と同様の手順で偏向のみられたものをみると（表3.11 黒枠部）、いずれの実体の周辺環境のパターンにおいても最小象限ないしは最大象限に該当するものに偏向がみられ、それ以外の象限に該当するものには偏向がみられなかった。したがって、当該建築を配置図の中心から偏芯させることによって異なる規模の建物の建ち並びを誇張ないしは矮小化させる、すなわち同一規模の建

表3.10 実体の周辺環境のパターンと当該建築の偏芯の有無

実体の周辺環境	偏芯の有無	偏芯なし	偏芯あり1方向	偏芯あり2方向	合計
4象限が同規模		22 葉	32 葉	12 葉	66 葉
3象限が同規模		26 葉	41 葉	22 葉	89 葉
2象限が同規模(並列)		11 葉	24 葉	11 葉	46 葉
2象限が同規模(交差)		2 葉	6 葉	6 葉	14 葉
合計		61 葉	103 葉	51 葉	215 葉

表3.11 異なる規模の建築の建ち並びが描かれる象限の大きさ

実体の周辺環境	該当する象限の大きさ	小象限のみに該当	大象限のみに該当	大・小象限ともに該当	大・小象限以外に該当	合計
3象限が同規模		 29 葉	 25 葉		 9 葉	63 葉
2象限が同規模(並列)		 15 葉	 11 葉	 9 葉		35 葉
2象限が同規模(交差)				 11 葉	 1 葉	12 葉
合計		44 葉	36 葉	20 葉	10 葉	110 葉

物の建ち並びと異なる規模の建物のそれを等価に扱うことはないという傾向が確認された。

### 3-3-3. 配置図の描画表現

最後に、図上方位、描画範囲、及び描画位置といった前章までに個別に検討した結果を前提として、これらの照合から配置図の描画表現を捉え、その表現形式を見出す。さらに、抽出した表現形式の比較を通じて、描画表現の型の導出を試みる。

ここでは、これまでに個別に検討した図上方位と当該建築の描画位置の照合から描画表現の形式を見出す。まず、描画表現に関する観点であるⅠ. 前面道路の描画位置(図上方位)、Ⅱ. 描画範囲、Ⅲ-1. 当該建築の偏芯の有無(描画位置)、Ⅲ-2. 異なる規模の建物の建ち並びが描かれた象限の大きさ(描画位置)の4種3系の観点に、実体の周辺環境に関する観点であるA. 近傍道路の幅員の大小関係、B. 平均建築面積の2種を加えた全6種5系の観点の検討結果をまとめた表を作成する(表3.12)。表4.12よりも、描画表現の観点であるⅠ～Ⅲ-2の4種において一致する14種の事例のまとめ<sup>注3.11)</sup>を配置図の表現形式として抽出した。

次に、抽出した14種の表現形式と、当該の表現形式が発現する実体の周辺環境との比較から、両者の応答を把握する。

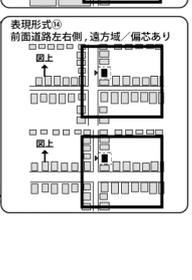
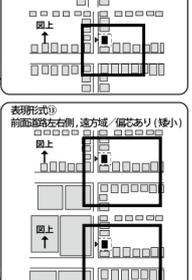
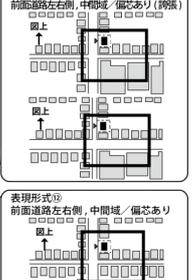
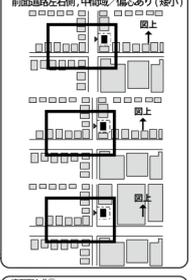
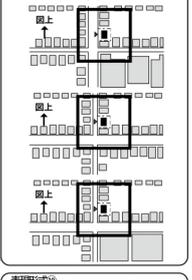
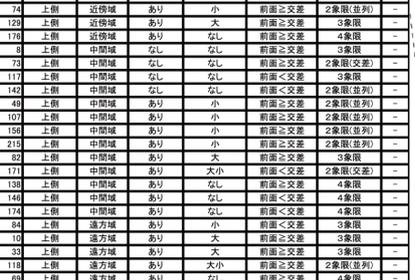
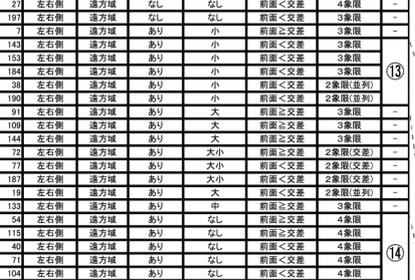
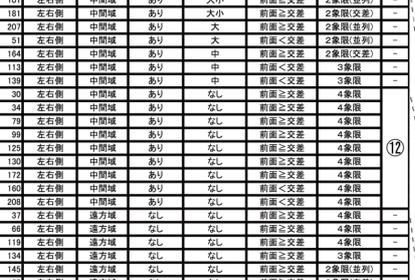
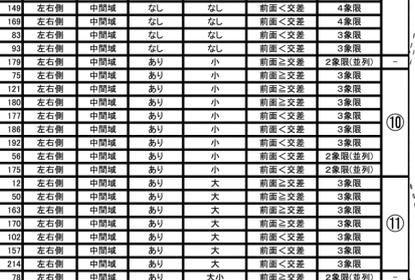
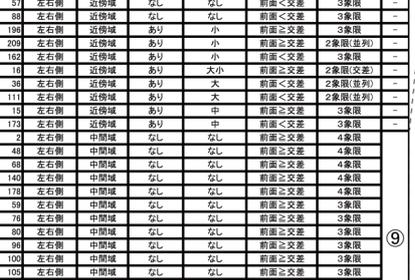
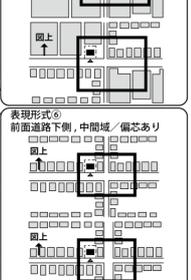
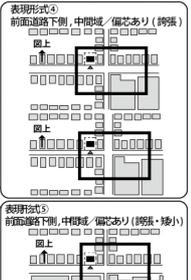
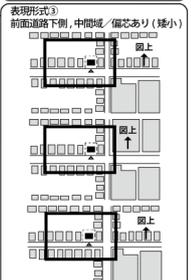
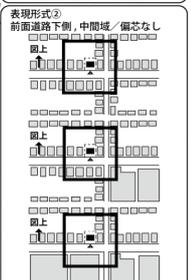
まず、前節で述べた6種5系の観点のうち、描画表現に関する4種3系の観点と当該の表現形式を縦軸、実体の周辺環境に関する2種の観点を横軸に設定した表を作成する(表3.13)。

表3.13より、幅員の大小関係に着目すると、前面道路の幅員が直近交差道路より大きい、ないしは同程度の場合のみに発現する形式は①②⑤⑧であり、そのうち①⑤⑧は前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定し、かつ当該建築を偏芯させて描画するものである。一方、直近交差道路のほうが大きい場合のみに発現する形式は③のみであり、前面道路を敷地の左右側に描画するよう図上方位を設定し、かつ当該建築を偏芯させて描画するものである。また、幅員の大小関係に拘わらず

注3.11) 前面道路の描画位置(上・下・左右側の3種)、Ⅱ.描画範囲(近傍・中間・遠方域の3種)、Ⅲ-1.当該建築の偏芯の有無(あり・なしの2種)、Ⅲ-2.異なる規模の建物の建ち並びが描かれた象限の大きさ(偏芯ありの事例において小・大・大小・それ以外の4種)の組み合わせとして理論上導出される45組に対して、全事例215葉であるため、組み合わせの平均該当数は4.77葉となる。したがって、5葉以上の該当がみられた組み合わせのうち、当該の実体の周辺環境のパタンに複数葉該当するものをまとめとして抽出した。

表3.12 配置図の表現形式

事例番号	描画表現の観点				実体の周辺環境の観点		表現形式
	1 図上方位 I 前面道路の 位置	II 描画範囲	III-1 幅の有無	III-2 異なる規模 の建物 の描かれる 像の大きさ	A 幅員の大/小関係	B 間隔の 像数	
4	下側	近傍域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
168	下側	近傍域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
203	下側	近傍域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
189	下側	近傍域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
35	下側	近傍域	あり	小	前面<交差	3像限	-
13	下側	近傍域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
39	下側	近傍域	あり	小	前面<交差	3像限	-
126	下側	近傍域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
128	下側	近傍域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
9	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
17	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
20	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
87	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
92	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
95	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
166	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
202	下側	近傍域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
3	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
24	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
165	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
168	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
22	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
46	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
64	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
214	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
42	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
47	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
57	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
61	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
136	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
141	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
154	下側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
153	下側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
135	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
47	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
81	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
85	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
84	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
123	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
132	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
135	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
155	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
184	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
204	下側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
25	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
80	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
185	下側	中間域	あり	小	前面<交差	3像限	-
110	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
116	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
131	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
205	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
28	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
82	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
103	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
111	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
23	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
106	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
21	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
37	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
41	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
210	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
188	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
151	下側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
43	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
117	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
211	下側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
1	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
45	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
89	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
127	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
152	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
189	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
24	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
58	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
67	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
203	下側	中間域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
90	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
114	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
148	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
159	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
181	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
53	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
97	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
122	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
106	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
147	下側	遠方域	なし	なし	前面<交差	4像限	-
23	下側	遠方域	あり	小	前面<交差	3像限	-
185	下側	遠方域	あり	小	前面<交差	3像限	-
124	下側	遠方域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
5	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
31	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
44	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
137	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
181	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
193	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
18	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
14	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
200	下側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
213	下側	遠方域	あり	中	前面<交差	3像限	-
188	下側	遠方域	あり	中	前面<交差	3像限	-
63	下側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
70	下側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
150	下側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
167	下側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
182	下側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
8	上側	近傍域	あり	大	前面<交差	3像限	-
129	上側	近傍域	あり	大	前面<交差	3像限	-
7	上側	中間域	なし	なし	前面<交差	3像限	-
83	上側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
142	上側	中間域	なし	なし	前面<交差	2像限(並列)	-
149	上側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
107	上側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
156	上側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
215	上側	中間域	あり	小	前面<交差	2像限(並列)	-
82	上側	中間域	あり	大	前面<交差	3像限	-
143	上側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
140	上側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
138	上側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
146	上側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
174	上側	中間域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
86	上側	遠方域	あり	小	前面<交差	3像限	-
96	上側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
37	上側	遠方域	あり	大	前面<交差	3像限	-
118	上側	遠方域	あり	大	前面<交差	2像限(並列)	-
69	上側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-
201	上側	遠方域	あり	なし	前面<交差	4像限	-



発現する形式は上記以外の9種であり、そのうち複数の表現形式に共通する特徴をもつものは③④⑥と⑩⑪⑫である。前者は前面道路を敷地の下側、後者は左右側に描画するよう図上方位を設定し、かつ両者とも当該建築を偏芯させて中間域を描画するものである。

次に周辺の建物規模に着目すると、4象限が同規模である場合のみに発現する形式は①⑥⑧⑫⑭であり、そのうち①⑥⑧は前面道路を敷地の下側に描画するよう図上方位を設定し、かつ当該建築を偏芯させて描画するといった共通の特徴をもつ。一方、4象限が同規模でない場合、すなわち異なる規模の建物が混在する場合のみに発現する形式は③④⑤⑩⑪⑬であり、そのうち複数の表現形式に共通する特徴をもつものは③④⑤と⑩⑪である。前者は前面道路を敷地の下側、後者は左右側に描画するよう図上方位を設定し、かつ両者とも当該建築を偏芯させて中間域を描画するものである。また、周辺の建物規模の揃い・不揃いに拘わらず発現する形式は②⑦⑨であり、いずれも当該建築を配置図の中心に据えて描画するものである。さらに、実体の周辺環境のパターンを構成する2観点双方に着目すると、前面道路の幅員が直近交差道路より大きい、ないしは同程度である場合かつ4象限が同規模である場合にのみ発現する形式は①⑧であり、直近交差道路の幅員のほうが大きい場合かつ4象限が同規模でない場合にのみ発現する形式は⑬である。①⑧⑬はいずれも当該建築を偏芯させて描画するが、①⑧は前面道路を

表3.13 表現形式と実体の周辺環境のパターン

実体の周辺環境のパターン			前面道路 ≥ 交差道路				前面道路 < 交差道路					
			4象限が同規模	3象限が同規模	2象限が同規模(並列)	2象限が同規模(交差)	4象限が同規模	3象限が同規模	2象限が同規模(並列)	2象限が同規模(交差)		
図上方位	描画範囲	描画位置										
前面道路 下側	近傍域	偏芯あり	表現形式①	○								
		偏芯なし	表現形式②	○	○	○						
	中間域	偏芯あり	表現形式③		○	○			○			
			表現形式④		○				○			
		表現形式⑤			○	○						
		表現形式⑥	○					○				
	遠方域	偏芯なし	表現形式⑦		○	○			○			
		偏芯あり	表現形式⑧	○								
前面道路 左右側	中間域	偏芯なし	表現形式⑨	○	○			○	○			
			表現形式⑩		○				○	○		
		偏芯あり	表現形式⑪		○				○			
			表現形式⑫	○					○			
	遠方域	偏芯あり	表現形式⑬						○	○		
			表現形式⑭	○					○			

敷地の下側、⑬は左右側に描画するよう図上方位を設定し、かつより広い範囲（遠方域）を描くものである。幅員の大小関係に拘わらず4象限が同規模でない場合に発現する形式は③④と⑩⑪であり、③④は前面道路を敷地の下側、⑩⑪は左右側に描画するよう図上方位を設定し、かつ両者ともに当該建築を偏芯させて中間域を描画するものである。

以上より、実体の周辺環境のパターンに該当する表現形式を比較することで、表現形式と実体の周辺環境の応答を整理した。

以降はここまでの結果をもとに、同様の実体の周辺環境のパターン、及び描画表現の特徴をもつ複数の表現形式を配置図の描画表現の型として導出する。まず、同様の実体の周辺環境のパターン、及び描画表現の特徴をもつ複数の表現形式を前面道路と直近交差道路の幅員の大小関係、及び敷地周辺の建物規模の観点により大別する（図 3.3）。

ところで、ノルベルグ・シュルツは、“自然的な偶然の知覚という点からみれば、人間の空間は、「主体を軸にして中心化」されている。”注3.12)と述べており、人間の知覚は己を中心にあらゆる環境を外在化させていると理解できる。上記の論述から、当該建築を配置図の中心に据えて描く表現形式②⑦⑨は、当該建築と己を重ね合わせることで当該建築を主体とみなし、それを配置図の中心に据えることで、周辺環境の理解を意図する「主体中心的伝達」と位置づけられる。一方、当該建築を配置図の中心から偏芯させて描く表現形式①③④⑧⑩⑪⑬は、特定の周

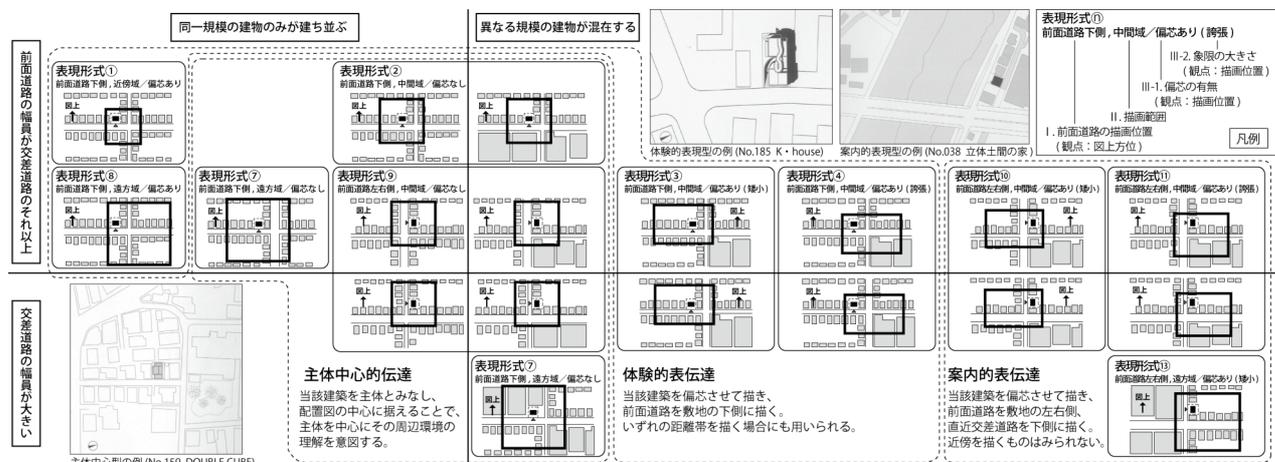


図3.3 配置図における情報伝達の作法

(出典: 左から③-159、③-185、③-038)

注3.12) C・ノルベルグ・シュルツ: 実存・空間・建築, 加藤邦男 訳, p.44, 鹿島出版会, 1997

辺環境と当該建築について何らかの関係づけをおこなうものと予想されることから、専ら知覚体験を意図した形式であるといえる。

ここで、井上充夫は寺社境内絵図の描画法から、『当時の人びとが寺社空間を、進むにつれて景観が展開する行動的空間として捉えていた』<sup>注2.13)</sup>と推察しており、この描画法は天子南面の寺社境内を絵図の下方から上方へと空間が展開していくように読ませることを意図するものであると述べている。すなわち、下方から上方へと画を読ませていく手法は、観る人をそこへ引き込み、その場所を仮想体験させるものであるといえる。

井上の論述より、知覚体験を意図した7種の表現形式①③④⑧⑩⑪⑬は、下方から上方へと空間が展開していくように読ませることを意図するものであると推測される。表現形式①③④⑧は前面道路を敷地の下側、表現形式⑩⑪⑬は前面道路を敷地の左右側かつ直近交差道路を下側に描くよう図上方位を設定することから、前者は前面道路から敷地までの空間の展開、後者は直近交差道路から敷地までの空間の展開を読ませるものであるといえる。これより寺社境内絵図の様に、ある限定された範囲における空間の展開を読ませる表現形式①③④⑧は「体験的伝達」、より幅員の大きい直近交差道路からの空間の展開を読ませる表現形式⑩⑪⑬は「案内的伝達」と位置づけられる。また、「体験的伝達」は距離帯に拘わらずみられるが、「案内的伝達」には近傍域を描く形式がみられない。

得られた3種の型と実体の周辺環境の応答をみると(図3.3)、「主体中心的伝達」はいずれの周辺環境においても発現しており、実体の周辺環境に拘わらず、当該建築を配置図の中心に据えることで主体を中心にその周辺環境の理解を意図していることが伺える。一方、「体験的伝達」は周辺の建物規模に拘わらず発現するが、「案内的伝達」は異なる規模の建物が混在する場合にのみ発現することがわかる。これより「体験的伝達」は前面道路から敷地までという限定された範囲における空間の展開を意図したものであり、周辺の建物規模に重きが置かれなことが伺え、「案内的伝達」は異なる規模の建物の建ち並びと当該建築に何らかの関係づけをおこなうために、より広範囲の周辺環境を描き、かつ直近交差道路から敷地までの空間の展開を読ませることを意図したのだと伺える。以上より、表現形

注3.13) ケヴィン・リンチ：都市のイメージ、丹下健三ほか訳、p.252、岩波書店、2007

式と実体の周辺環境の応答の意味を精査することによって、個別の特徴をもつ表現形式を3種の配置図の描画表現の型に位置づけた。

### 3-4. 結

#### 3-4-1. 配置図による情報伝達のまとめ

本章では、現代日本の住宅作品における配置図の描画表現について、図上方位、描画範囲、及び描画位置の検討から14種の表現形式を見出し、それらに共通する性格を把握することにより、配置図の描画表現の型3種を抽出した。さらにこれら3種について、既往の知見をもとに、配置図にみられる描画表現の意味を精査した結果、当該建築を主体とみなし、それを配置図の中心に据えることで、周辺環境の理解を意図する「主体中心的伝達」と、当該建築と特定の周辺環境に何らかの関係づけをおこなう「体験的伝達」、「案内的伝達」として位置づけられることを示した。

また、抽出した3種の型と実体の周辺環境の応答から、「主体中心的伝達」は主体を中心にその周辺環境の理解を意図するため、実体の周辺環境に拘わらず用いられる型であった。一方、「体験的伝達」は前面道路から敷地といった限定された範囲の空間の展開、「案内的伝達」は直近交差道路から敷地までといったより広い範囲の空間の展開を読ませるものであることから、「体験的伝達」は周辺の建物規模に拘わらず用いられる型であり、「案内的伝達」は異なる規模の建物が混在する場合にのみ用いられる型であった。

以上、図上方位、描画範囲、及び描画位置の検討から配置図における空間表現の類型とその意味の一端が整理された。

## 第4章 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

### 1節：序

#### 4-1-1. 分析の目的

### 2節：建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

#### 4-2-1. 写真および配置図による情報伝達の作法の照合

### 3節：結

#### 4-3-1. 本章で得られた知見のまとめ

## 第4章 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

### 4-1. 序

本章では、前章までで得られた写真による情報伝達の作法と、配置図による情報伝達の作法について、既往知見を援用しながら整理することを試みる。

#### 4-1-1. 分析の目的

まず、情報伝達の作法を整理する枠組みを設定するにあたって、奥村らの研究報告を援用する。奥村らは、インターネットの急速な拡大にともない、情報洪水とよばれるほどの大量の情報であふれる現代社会において、効率的かつ迅速なウェブによるテキスト検索を可能とするためには5W1H分類・ナビゲーションシステムの重要性を述べている<sup>注4.1)</sup>。つまり、大量に伝達されるテキスト情報を5W1H(Who-だれが、When-いつ、Where-どこで、What-なにを、Why-なぜ、How-どのように)の観点に従って整理することで、テキスト情報を構造的に管理するシステムである。また、フェルディナン・ド・ソシュールは言語記号学の立場から、“言葉とは話し手から聞き手へと意味を伝達する手段であること”を前提として、言葉で意味を伝達するためには“音素の配列、組合せ”によって位置づけられる“意味”、あるいは“意味”によって位置づけられる“音素の配列、組合せ”を、話し手と聞き手の間で共有する必要があると述べている<sup>注4.2)</sup>。つまり、“意味”とは、“伝達によって聞き手に理解させたい内容”のことであり、“音素の配列、組合せ”とは、“意味を理解させるための手段”として捉えることが可能である。これを、上述の奥村らの報告と照合すると、“意味：伝達によって聞き手に理解させたい内容”とは「What-なにを」に相当し、“音素の配列、組合せ：意味を理解させるための手段”とは「How-どのように」に相当すると言える。

奥村らやフェルディナン・ド・ソシュールの報告では言語情報に限定された論述であったが、これは建築メディアに掲載される様々な情報媒体においても、如何なる情報伝達がされているのかを把握するうえで欠かすことのできないシステムであると言える。よって、本研究では建築メディアにおける空間の情

注4.1) 奥村明俊ほか：5W1H分類・ナビゲーションによる情報活用プラットフォーム，情報処理学会研究報告DD(97)，pp.1～7，1997.09

注4.2) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，，1940

注4.3) 町田健：ソシュールのすべて—言語学でいちばん大切なこと—，研究社，2004

報伝達に内在する作法を体系化するために、前章までで得られた写真による情報伝達の作法および配置図による情報伝達の作法について、【伝達内容（如何なる情報を：What-なにを）】と【伝達手段（如何なる手段で：How-どのように）】の2水準の枠組みで整理することが有効な手段であると考えた。

以上より、本章の目的を、“**建築メディアにおける写真および配置図による情報伝達の作法を、伝達内容、伝達手段の枠組みによって体系化すること**”を目的とする。

## 4-2. 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

### 4-2-1. 写真および配置図による情報伝達の作法の照合

まず、【伝達内容】の観点で各情報伝達の作法を概観すると、配置図における「主体中心的伝達」のように、空間全体の中で特定の着眼点を絞った『主題』と、写真の掲載順による「統語構造の伝達」のように、複数の室や空間全体に着目した『全容』の2種に大別することができる（図4.1）。

このように、全ての情報伝達の型についての【伝達内容】を整理していく。まず、写真による「自律的仮想行動の伝達」をみると、写真の組合せによる「部分・全体連続型」のように特定の部位に着目した仮想行動、あるいは「訪問一階層型」のように空間内の何らかの序列に従った仮想行動を伝達することを意図していることから、『主題』に該当する情報伝達の作法であることが分かる。続いて、配置図による「主体中心的伝達」をみると、図面の中心に当該の建物を据えるという意図が明確であるため、『主題』に該当する情報伝達の作法であることが分かる。同様に、「体験的伝達」をみると、狭い範囲に限定された配置図内において周辺道路から当該建物までの道のりを想起させるという、特定の仮想行動を想起させることを意図したものであることから、『主題』に該当する情報伝達の作法であると言える。

一方で、「他律的仮想行動の伝達」は、写真の組合せによる「空間移動想起型」のように隣接する複数の室における移動を伝達することを意図していることから、『全容』に該当する情報伝達の作法であることが分かる。同様に、配置図による「案

伝達内容	主題	第2章:自律的仮想行動の伝達 第3章:体験的伝達	第3章:主体中心的伝達	第2章:範列関係の伝達1
	全容	第2章:他律的仮想行動の伝達	第2章:統語構造の伝達 第3章:案内的伝達	第2章:範列関係の伝達2

図4.1 伝達内容の枠組みによる整理

内的伝達」をみると、周辺の建物や道路などの環境を広域でおさめた配置図内において、当該建物までの道のりおよび周辺環境を案内的に伝達することを意図していることから、『全容』に該当する情報伝達の作法であることが分かる。

また、「範列関係の伝達」の写真の組合せによる「同類情報並置型」をみると、特定の空間要素を題材とした視覚象を連続することを意図していることから、『主題』に該当する情報伝達の作法であると言える。対して、「外観内観交互一階層型」や「外観内観交互一非階層型」をみると、外観写真群と内観写真群を交互に並べながら空間の全体像を伝達することを意図しているため、『全容』にも該当する情報伝達の作法と言える。

以上のように、情報伝達の作法について【伝達内容】の観点から整理した結果を図4.1に示す。

次に、【伝達手段】の観点で各情報伝達の作法を概観する。奥山は建築空間に関する言説についての研究報告によって、建築メディアに掲載されている建築家による言語情報には、建築家の空間的な思想の基本的なあり方として、体系的側面と現象的側面が存在していると報告している<sup>注4.3)</sup>。ここでいう体系的側面とは、“領域・構成といった建築の実体がもたらす内容を、階層的な空間構成とでも呼べる建築的体系としてまとめようとする思考”である。対して、現象的側面とは、“建築的体系として空間を連続的に経験する総体として捉える思考、あるいはひとまとまりの空間の視覚的な状況として捉える思考”である。つまり、奥山は建築空間を言語情報によって伝達するにあたって、構成的な視点から空間要素（情報同士）の位相関係を伝達する場合と、時系的な視点から空間における身体の体験に伴う時間の流れを伝達する場合の2種の手段が存在することを報告している。この論述を援用すると、情報伝達にける伝達手段は『情報の位相』と『時間の流れ』の2種によって位置づけることができる（図4.2）。

例えば、写真による「他律的仮想行動の伝達」や「自律的仮想行動の伝達」は、写真の組み合わせや順列によって実際の空間を仮想体験させようとする意図が働いている。つまり、写真の組み合わせや順列により時間の概念を導入していると言え、これらは『時間の流れ』に該当する情報伝達の作法であると言える。同様に配置図における「体験的伝達」をみると、配置図上にお

注4.4) 奥山信一ほか：戦後「新建築」誌における建築家の創作論－建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル－，日本建築学会計画系論文集 No.477, pp.101～108, 1995.11

ける身体の移動を想起させることを意図していることから、『時間の流れ』に該当する情報伝達の作法であると言える。

一方で、写真による「統語構造の伝達」をみると、「辞去延長—非階層型」のように様々な種類の写真を並べることで、空間の全体像を伝達することを意図していることから、『情報の位相』に該当する情報伝達の作法であると言える。同様に、配置図による「主体中心的伝達」は、当該建物を配置図上の中央に据えることを優先しており、また「案内的伝達」は、広範囲における当該建物と周辺の建物や道路との位置関係を伝達することを意図していることから、どちらも『情報の位相』に該当する情報伝達の作法であると言える。

ここで、上記の『時間の流れ』や『情報の位相』では位置づけることができない写真による「範列関係の伝達」をみると、「同類情報並置型」のように、空間の位置関係や実際の身体経験の順番などとは関係せず、同一空間要素の情報を羅列することによって空間の共通性や差異性などを伝達することを意図しているのとらえることができる。よってこの型を『情報の羅列』という伝達手段として位置付けた（図4.2）。

以上のように、写真および配置図による情報伝達の型について、【伝達内容】と【伝達手段】の2水準によって整理することができた。先にも述べたように、情報伝達に内在する作法とは【伝達内容】と【伝達手段】の総合として表すことができる。

例えば、写真による「自律的仮想行動の伝達」や配置図による「体験的伝達」とは、特定の空間を『主題』として『時間の流れ』によって伝達することを意図した情報伝達の作法として

	伝達手段		
	時間の流れ	情報の位相	情報の羅列
	第2章:自律的仮想行動の伝達 第3章:体験的伝達	第3章:主体中心的伝達	第2章:範列関係の伝達1
	第2章:他律的仮想行動の伝達	第2章:統語構造の伝達 第3章:案内的伝達	第2章:範列関係の伝達2

図4.2 伝達手段の枠組みによる整理

まとめることができる。一方で、写真による「他律的仮想行動の伝達」とは、空間の『全容』を『時間の流れ』によって伝達することを意図した情報伝達の作法としてまとめることができる。

また、配置図による「主体中心的伝達」とは、当該建築を『主題』として『情報の位相』による伝達を意図した作法としてまとめることができる。また、写真による「統語構造の伝達」や配置図による「案内的伝達」とは、空間の『全容』を『情報の位相』によって伝達することを意図した作法としてまとめることができる。

さらに、写真による「範列関係の伝達」は、特定の空間を対象とした『主題』、あるいは空間の『全容』を『情報の羅列』によって伝達することを意図した作法としてまとめることができる。

以上のように、写真および配置図による情報伝達の作法を【伝達内容】と【伝達手段】の2水準から整理することができた。

(図4.3)。

		伝達手段		
		時間の流れ	情報の位相	情報の羅列
伝達内容	主題	第2章:自律的仮想行動の伝達 第3章:体験的伝達	第3章:主体中心的伝達	第2章:範列関係の伝達1
	全容	第2章:他律的仮想行動の伝達	第2章:統語構造の伝達 第3章:案内的伝達	第2章:範列関係の伝達2

図4.3 伝達内容および伝達手段の枠組みによる整理

## 4-3. 結

### 4-3-1. 本章で得られた知見のまとめ

本章では、前2章の分析によって得られた写真による情報伝達の型および配置図による情報伝達の作法について、【伝達内容】と【伝達手段】の2水準の枠組みから整理した結果、伝達内容としては『主題』と『全容』の2種を、「伝達手段」としては『時間の流れ』と『情報の位相』、『情報の羅列』の3種によって整理することができた。

## 第5章 結論

### 1節：本研究の結論

5-1-1. 本研究で得られた知見のまとめ

### 2節：今後の展望と課題

5-2-1. 今後の展望と課題

## 第5章 結論

---

### 5-1. 本研究の結論

#### 5-1-1. 本研究で得られた知見のまとめ

本研究では建築メディアに掲載される「視覚像としての空間の情報」および「記号による空間の情報」のうち、主要な情報媒体としてそれぞれ「写真」と「配置図」を対象に分析を施した。特に写真は「写真の組合せ」と「写真の掲載順」に観点を分けて分析を施した。

分析の結果、写真の組合せによる情報伝達の型としては「部分・全体連続型」「多角的連続型」「空間移動想起型」「同類情報並置型」「外観・周辺環境対応型」の5種を、写真の掲載順による情報伝達の型としては「訪問一階層型」「訪問延長一階層型」「辞去一非階層型」「辞去延長一非階層型」「外観内観交互一階層型」「外観内観交互一非階層型」の6種を導出した。それらの意味内容を整理することで、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「配列関係の伝達」「統語構造の伝達」の4種を導出した。一方で、配置図による情報伝達の型として14種を導出し、それらの意味内容を整理することで配置図による情報伝達の作法として「主体中心的伝達」「体験的伝達」「案内的伝達」の3種を導出した。

上記の作法について、【伝達内容】と【伝達手段】の2の枠組みから整理した結果、伝達内容における『主題』と『全容』の2観点と、伝達手段における『時間の流れ』『情報の位相』『情報の羅列』の3観点によって建築メディアにおける情報伝達の作法を体系化されることを明らかにした。

## 5-2. 今後の展望と課題

注 5.1) 浜口隆一：建築ジャーナリズム論，建築文化 Vol.16 No.5, pp33～40, 彰国社, 1961.5

### 5-2-1. 今後の展望と課題

本研究の冒頭で述べたように、情報を介した建築空間の理解と、身体の体験を通じた理解との間に齟齬があることも予想されるため<sup>注 5.1)</sup>、本研究で得られた知見が身体の経験を通じた空間の理解についての議論への直接的な補強を施すことは困難であることは間違いない。よって、本研究において見出した建築メディアによる情報伝達の作法の枠組みを、身体の経験を通じた理解に対してどのように活用していくべきかを検討することは今後の課題として残されたと考えられる。しかし、本研究で試みたような情報伝達への論考を推し進めることが、建築空間の知覚のメカニズムに関わる研究課題のアプローチとなることも考えられる。本研究で得た知見が、この種の議論を深める足掛かりとなることを期待する。

また、本研究で見出した情報伝達の作法を整理する枠組み、すなわち『伝達内容』の【主題】【全容】と、『伝達手段』の【時間の流れ】【情報の位相】【情報の羅列】の枠組みとは、掲載される情報を読解するための要点を提示していると換言することができる。これは、建築メディアが発信した情報を読者が読解するための拠り所（リテラシー）の一端を提示したとも捉えられるため、この点において社会への還元性が認められると考えられる。

## 補章

### 第6章 室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素

#### 6節：序

6-1-1. 眺めの選好について

6-1-2. 本章の目的

#### 2節：研究の方法

6-2-1. モデルの初期設定

6-2-2. 実験装置について

6-2-3. 実験手順の要領

6-2-4. 実験の概要

6-2-5. 実験の被験者

#### 3節：実験結果および分析

6-3-1. 実験①の分析

6-3-2. 実験②における全モデル共通の傾向

6-3-3. 視点群による属性分類

6-3-4. 視点群による分析

6-3-5. 視点群属性 h の分析

6-3-6. 各モデルに関連する指向のまとめ

#### 4節：結

6-4-1. 本章で得られた知見

6-4-2. 考察

## 第6章 室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素

### 6-1. 序

本性のでは、本研究で得られた建築メディアにおける情報伝達の作法を整理するための枠組みに対して、実際の身体の経験による空間の理解についての知見を照合することで、身体の経験が情報伝達に如何なる影響を及ぼしているのかを把握するための基礎的な知見を得ることを目的としている。

#### 6-1-1. 眺めの選好について

写真にせよドローイングにせよ我々は実際の空間を経験し、自らの判断基準に従い情報媒体として出力されているのだが、その判断基準が空間経験者自信にとって「分かり易い」情報であること予想される。ここから、第6章では実際の空間の経験を情報化する際の分かり易さとは何なのかを検討する。そこで、実験心理学的なアプローチによって複数名の被験者に空間モデルを刺激として与えた場合の眺めの選好傾向を把握し、空間の経験を情報として出力する際の根源的な分かり易さの指標を解明する。

ところで、我々が出力された情報よりその対象を「理解」する際に、ギンター・ニチュケが著書の中で、“(前略)知覚空間はひとつの中心をもち、それは知覚する人間である。それゆえ、それは人体の動きとともに変化する優れた方向の体系をもっている。・・・それは限定された不均質なものであり、主観的に定義され知覚されている。距離と方向はその人に固有なものであり、人によって違う。”と述べているように、「距離」と「方向」が大きな影響を及ぼしていると考えられる<sup>注6.1)</sup>。また、メルロ・ポンティ、高橋の両者によって、空間を知覚するにあたって最も重要な要素は「奥行き」であることが報告されており<sup>注6.2)注6.3)</sup>、その奥行きは知覚主体から知覚対象までの「距離」や、知覚対象の「見かけの大きさ」と同時に語られている。加えて、知覚主体は距離や奥行きを手掛かりに空間を理解しているとの仮設をもとに、その際に面のきめ勾配や陰影など様々な要因が関わっていることをギブソンは報告している<sup>注6.4)</sup>。ところで、二次元情報におけるそれらの要素と空間理解の関連に

注 6.1) G.Nitschke : Anatomie der gelebten Umwelt, 1968 (Bauen+ Wohnen September 1968)/エドワード・レルフ: 場所の現象学-没場所制を超えて, 高野岳彦ほか訳, 築摩書房, pp.17, 1991

注 6.2) モーリス・メルロ・ポンティ: 知覚の現象学 2, 竹内芳郎ほか訳, みすず書房, pp.79, 1974

注 6.3) 高橋鷹志ほか: かたちのデータファイル-デザインにおける発送の道具箱, 彰国社, pp.34, 1984

注 6.4) ジェームス・ジェーロン・ギブソン: 生態学的視覚論-ヒトの知覚世界を探る, 古崎敬ほか訳, サイエンス社, 1985

についての論考は一定数みられるが、同様に空間の形も大きく影響していると予想される。実際の空間における空間の形と空間理解との関連についての論考は黒田らによって報告されている<sup>注 6.5)</sup> 一方で、二次元情報における空間の形と空間の理解についての論考は類例に乏しいと言える。

注 6.5) 黒田正巳は著書の中で複数の研究成果について報告している。(黒田正巳：空間を描く遠近法，彰国社，1992)

### **6-1-2. 本章の目的**

以上の背景を受けて、本章では二次元情報の中でも、写真や絵画などに比べて空間の形以外の要素を容易に捨象することが可能な、CGによって作成された単純矩形による直方体ヴォリュームを室内空間のモデルに設定し、様々なモデルパターンを被験者に刺激として与える実験心理学的アプローチを採る。なお、CGは写真などの静止画とは異なり、行動と眺望を連動させて継起的な眺望の選定が可能であることから、実験材料とした有用だと考えられる。

さらに、こうした室内空間モデルを鑑賞者に体験させたとき、その室内空間における理解しやすい眺め、つまり「分かり易い」眺めを得ることが可能な視点位置が複数人に共有されて発現するのか、また発現するのであればそれは室内空間のどのような判断要素と連動するのかという問題を検討する手段を採り、実際の空間における身体の実験による空間の理解に関する基礎的な知見を得ることを目的とする。

## 6-2. 研究の方法

### 6-2-1. モデルの初期設定

本章はCG<sup>注6.6)</sup>によって作成された仮想室内空間モデルを刺激として複数被験者に与え、選択された視点位置から得られる眺めの共通性やその要因を探るものである。ここで、本章における視点位置の選択とは、知覚主体と知覚対象との位置関係の要素である「距離」と「方向」のうち、「距離」のみを選択する行為とする。前述の通り、空間の形以外の要素を捨象した状況下にあつて、我々が体験の対象となる空間をどのように知覚するのかを明らかにするため、最も単純であると考えられる直方体ヴォリュームを採用した。このモデル上で被験者は対面する壁面に正対した視点位置上を移動することが可能な、視点の高さが床面から1.5mである人間を操作して、その人間が得る眺めが投影された映像を見ながら視点位置を選択する。被験者は壁面に正対する眺めを得る視点位置上を手前と奥に移動することが可能であり、視方向の選択はしないものとする。なお、CG上では肉眼視の視野角に近いとされる焦点距離35mmに設定した。

### 6-2-2. 実験装置について

本実験はコンピューターを用いて、3次元モデリング・ソフトウェア Google Sketch UP を操作することで行う。実験装置(図6.1)は被験者が座る椅子と作業台、映写機、壁に投影された映像により構成される。椅子は被験者の身長の違いによる視点の高さの差を解消するために、高さの調節機能を備えたものを用意し、被験者は投影された映像の高さの中心に自分の視線が揃うように椅子の高さを調節する。作業台にはCGを操作するためのマウスのみが置かれており、被験者はそのマウスでCG上の人間を操作することで視点位置を選択する。映写機は作業台の下部に設置し、椅子から3.5m離れた壁面に映像を投影する。壁面の表面は凹凸が少なく白色であり、被験者の視野に投影壁面以外のものが入らないような、十分な広さと高さとした。壁に投影された映像は、 $W=1.4\text{m}$ 、 $H=1.0\text{m}$ <sup>注6.7)</sup>であり、投影された映像には実験モデル以外の情報が含まれないように設定した。また、

注6.6) 松下らの既往知見により、「CG(コンピュータ・グラフィックス)を用いたスタディは、対象空間の可視化、把握等に最も有用な手法の一つである。CGは建築設計過程のあらゆる部分に導入され、不可欠な道具となっている。人は擬似的に現実空間を表現したCGをもとに、自らの空間認識を補完的に用いて実物を推測し、両者を対応づけることによりシミュレーションを行う。」(松下大輔ほか: CG画像の感性評価による対話型進化計算を用いたファサードガラス特性の探求法の研究, 日本建築学会計画系論文集, 第584号, pp.187~192, 2004.10)ことが報告されている。

注6.7) 三橋らが著書の中で、「人間の安定注視視野角は水平に約60度、垂直に約45度とされている」(三橋哲雄ほか: 映像情報メディア基幹技術シリーズ8 画像と視覚情報科学, コロナ社, pp.101~02, 2009.02)と述べていることから、その注視視野角の面的な範囲は幅:高さ=1.4:1である。よって投影される映像は上記の幅と高さの比率によって設定した。

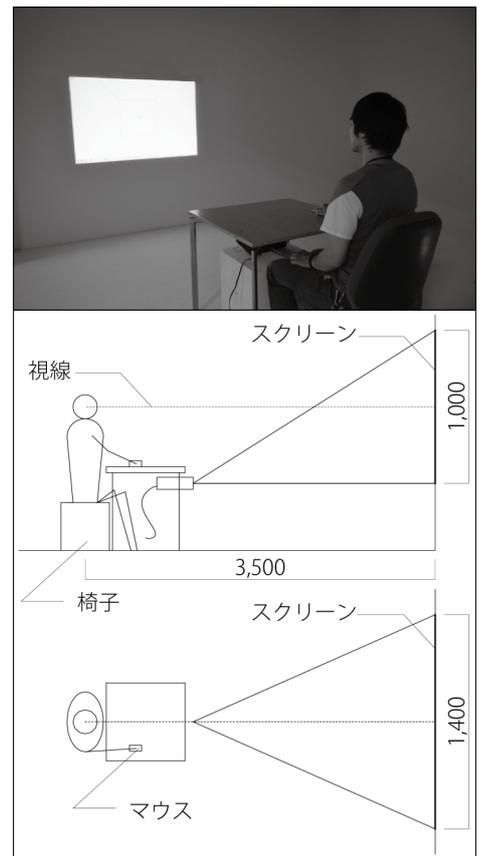


図6.1 実験装置及び実験風景

実験場所は自然光及び人工照明を遮断した室内とした。

### 6-2-3. 実験手順の要領

実験は、以下の要領で行う。1)実験は1被験者ごとに行い、まず、被験者が実験室に入室したら実験の主旨を表記した紙(図6.2)を読ませる。2)次に被験者に椅子の高さを調節させる。3)被験者は椅子に座り映像を見ずに待機し、その間に実験者が最初の室内空間モデルを投影する。4)被験者はマウスを操作し、モニター上で自分が「分かり易い」と考える視点位置で操作を終了する。この時あらかじめ被験者に必ず全ての視点位置からの眺めを経験させることで、より自然な視点位置の選択行為を促す。5)そして被験者による「分かり易い」視点位置決定の合図を機に、実験者はデータを保存し、次の刺激の準備を行う。以降は、3)から5)の手順を繰り返す。

### 6-2-4. 実験の概要

まず、本実験に先立ち上述の実験装置及び手順に従い予備実験を行い、意図せぬ要因が被験者の視点位置選択に影響を及ぼさないこと、被験者が実験の主旨を正しく理解して実験が行われることを確認した。本実験は2段階の実験によって構成される。実験①では対面(視線に直交する最も奥に視認される壁面)の幅と高さを3.0mに固定し、奥行きを6.0mから30.0mまで3.0mずつ変化させた9パターンを刺激として与え、奥行きの変化に対する視点位置の選好傾向を把握する(表6.1)。続く実験②では奥行きを15.0mに固定して、対面の幅を3.0mから15.0mまで、高さを3.0mから12.0mまでそれぞれ3.0mずつ変化させた計20パターンを刺激として与え、対面形状の変化に対する視点位置の選好傾向を把握する(表6.1)。

#### 実験手順について

実験をはじめの前に視点の高さを調節します。椅子に座って背もたれにしっかり背中を付けてください。その状態で目の前にあるモニターに映写されている画面を見て、モニターの中央の位置に自分の視線が当たるように椅子の高さを調節してください。椅子の調整が終わったら実験に入ります。実験中も必ず椅子の背もたれに背中を付けたままです。前かがみにならないようにお願いします。

実験の手順を簡単に説明します。モニターに映写されている映像は室内空間に人間が立った時に目に見える眺望と仮定してください。この室内空間には開口部や家具、装飾などはないものとします。

まず、マウスの左クリックを押しながらマウスを上下させて室内空間で視点位置を室内の手前から奥まで、移動させることで全ての眺めを体験してください。

そのうえで、あなたがこの室内空間を最も分かり易くとらえていると考える眺めで操作を終了してください。

操作を終了したら実験者に「はい」と合図し、後ろを向いて待機してください。実験者の合図があったら前を向いてモニターを見てください。最初に操作の確認のために練習を行います。練習後に実験を開始します。実験は全部で20回繰り返します。

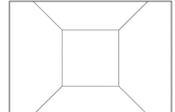
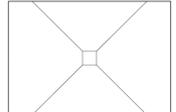
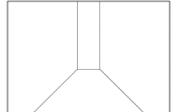
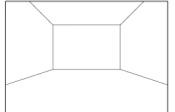
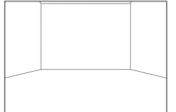
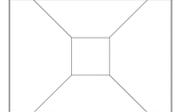
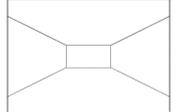
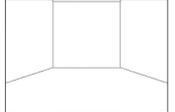
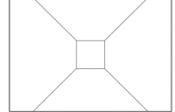
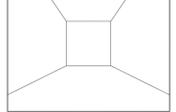
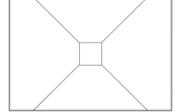
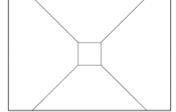
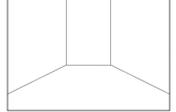
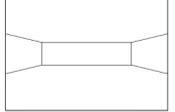
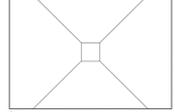
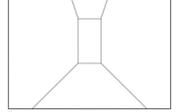
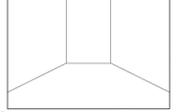
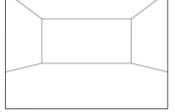
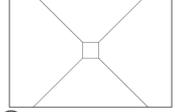
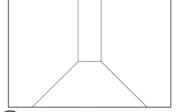
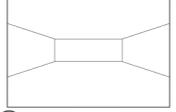
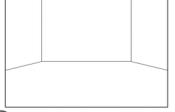
図6.2 実験手順説明文

### 6-2-5. 実験の被験者

本実験の被験者は名古屋市立大学の学生で、性別、先行分野、学年などが概ね均等に分配されるように40名を選出した。また、実験の主旨を表記した紙は実験室から持ち出すことを禁止し、被験者どうしでの本研究に関する情報の共有も禁止する旨を伝えた。なお、予備実験、実験①、実験②では異なる被験者を選出した<sup>注5,8)</sup>。

実験①の被験者属性			実験②の被験者属性				
	男子	女子	計		男子	女子	計
建築学科	11	9	20	建築学科	10	10	20
他学科	10	10	11	他学科	10	10	11
計	21	19	40	計	20	20	40

表6.1 実験①、②のモデルパタンの一覧

実験①のモデル		実験①のモデル		実験②のモデル		実験②のモデル		実験②のモデル	
									
									
		実験②のモデル		実験②のモデル		実験②のモデル		実験②のモデル	
									
									
<p>※画像は各モデルにおいて対面から最も離れた視点位置からの眺めを表す。 W×D×H (m)</p>									

### 6-3. 実験結果および分析

#### 6-3-1. 実験①の分析

本実験では、9パタンの刺激について、40名の被験者が「分かり易い」と認定した視点位置を、対面からの奥行き寸法を両端のみ0.25m、その間を0.5mずつに区分けし、各視点位置への度数として記録した。これをもとに度数分布表を作成し、分析対象とした(表6.2)。

表6.2からわかるように、例えば、奥行き6.0mの㉞の場合には対面からの距離が6.0mの視点位置に度数が偏向するといった具合に、いずれのモデルにおいても対面から最も離れた視点位置に選好が偏る傾向が共通してみられた。つまり、モデルの奥行きにかかわらず室内空間を鑑賞する場合は、対面から最も離れた視点位置から眺める傾向が看取されたと言える。

一方で、最も離れた視点位置以外の度数に着目すると、㉞、㉟、㊱は4を超える度数(被験者40名に対する1割)の分布がみられるが、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶は全て4以下の度数分布である。ところで、㉞~㊶の9モデルは、いずれも対面の形状は等しく、奥行きのみが異なるため、例えばモデル㉞、㉟、㊱での鑑賞体験は全てモデル㊲~㊶に包含されることとなる。こうしたことを鑑みると、㉞、㉟、㊱における“対面から最も離れた視点位置以外の度数偏向”が、㊲~㊶では発現しないことより、㉞、㉟、㊱での度数偏向を“複数の被験者が共有した分かり易い眺めを得る視点位置”とは捉え難く、むしろ選択可能な視点位置が充分量に達していないため、被験者による自由な視点位置の選択が限定され、結果的に特定の視点位置に度数が偏向したと捉えるのが妥当といえる。加えて、㊲~㊶においては度数が分散していることから、被験者が視点位置の選択を行うにあたって充分量の奥行きを有していると捉えることができる。これより、以降の分析ではモデル㊲の奥行きを充分量の最小値と捉え、奥行きを15.0mに固定したうえで、対面の高さと同幅の変化に対する視点位置の選好傾向を探る。

表6.2 実験①の度数分布表

視点位置	記号								
	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷
	W	3	3	3	3	3	3	3	3
	D	6	9	12	15	18	21	24	27
H	3	3	3	3	3	3	3	3	3
30.0									7
29.5									0
29.0									0
28.5									2
28.0									1
27.5									0
27.0									7
26.5									1
26.0									1
25.5									1
25.0									1
24.5									0
24.0									7
23.5									1
23.0									1
22.5									1
22.0									0
21.5									0
21.0									8
20.5									2
20.0									0
19.5									1
19.0									0
18.5									1
18.0									2
17.5									0
17.0									1
16.5									2
16.0									4
16.0									2
15.5									0
15.0									3
14.5									2
14.0									0
13.5									1
13.0									0
12.5									1
12.0									1
11.5									8
11.0									2
10.5									2
10.0									3
9.5									1
9.0									2
8.5									0
8.0									0
7.5									1
7.0									1
6.5									0
6.0									0
5.5									21
5.0									7
4.5									2
4.0									1
3.5									0
3.0									0
2.5									0
2.0									0
1.5									0
1.0									0
0.5									0
0.0									0

■ 度数の偏向が認められる視点位置  
各枠内の数値は被験者の回答数を示す。

### 6-3-2. 実験②における全モデル共通の傾向

ここでは、奥行きを 15.0m に固定した全 20 種の室内空間パタンの刺激について、実験①と同様の手順で全 40 名の被験者が「分かり易い」と認定した視点位置を記録し、全 31 に区分された視点位置への度数分布表を作

成し、それを分析の対象とした(表 6.3)。作成した表 6.3 の度数分布と室内空間パターンとを比較し、度数分布の大小と選択された視点位置、眺めとの関係を把握する。まず、室内空間の見え方を説明し得る指標として、「眺めに含まれる面数」に着目した。この指標は、任意の視点位置からの眺めの中に含まれる壁面、床面及び天井面の面数を表した指標であり、鑑賞者の背面を除いて、対面、右側面、左側面、床面、天井面の最大 5 面である(図 6.3)。例えば図 6.3 のように、モデル㊸の場合、 $3.0\text{m} \leq D \leq 15.0\text{m}$  の視点位置で得られる眺めには、対面、床面、天井面、右側面、左側面の 5 面が含まれ、一方で  $0\text{m} \leq D \leq 2.5\text{m}$  の視点位置で得られる眺めには、対面、右側面、左側面の 3 面のみが含まれることとなる。このように、全てのモデルにおいて同様の確認を行い、各モデルにおける視点位置と眺めに含まれる面数の対応を表 6.3 に表した。これを見ると、全モデルを通じて最大面数(5面もしくは4面)を眺めにおさめられる視点位置に度数の分布が確認できる。また、いずれのモデルにおいても実験①で得られた傾向と同様に  $D=15.0\text{m}$  やその近傍の視点位置(対面より離れた位置)の選好が認められるが、ここで対面が  $H=9.0\text{m}$  である㊸、㊹、㊺、㊻、㊼に着目すると、他のモデルに比べて  $D=15.0\text{m}$  の視点位置への選好の偏りが強いことが分かる。これは、この 5 モデルにおいては最大面数を眺めにおさめる視点位置が  $D=15.0\text{m}$  に限定されることに起因していると考えられ、事実、他のモデルにおいてもより多く面数を視認できる視点位置に選好が偏っている点からも、最大面数を眺めにおさめるとい**う指向**1:**面数最大への指向**(図 6.4)の存在が示唆されている。

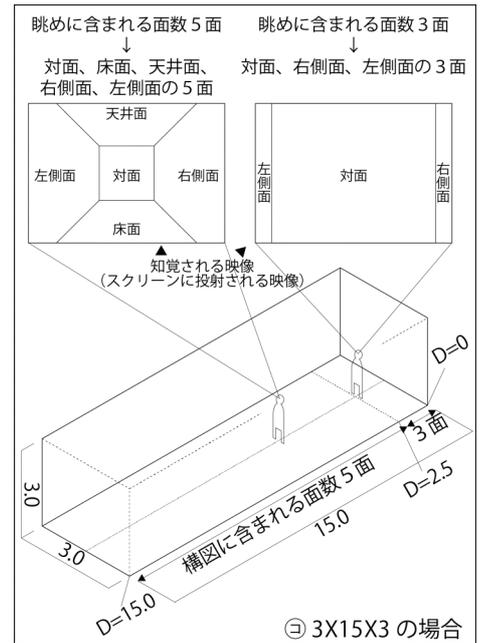


図6.3 眺めに含まれる面数区分

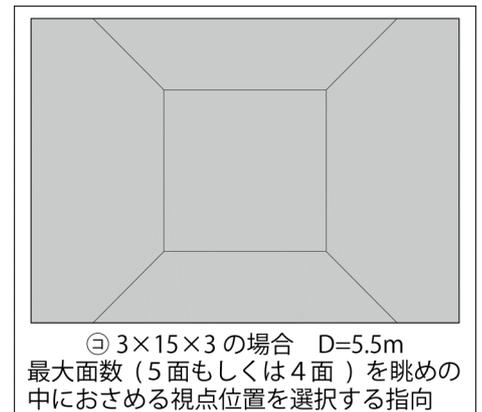


図6.4 1: 最大面数への指向

### 6-3-3. 視点群による属性分類

前節の分析から全20モデルで共通して対面から離れた視点位置の選好傾向が看取され、その要因の1つとして指向 $\boxed{1}$ を導出したが、この傾向は指向 $\boxed{1}$ も含めた他の様々な指向が連動した結果であると予想される。そこで、各モデルにおいて働く指向を把握するために「視点群」の指標を用いて分析を行う。

視点群とは、眺めの中での対面の見付長さその他の面の見付長さの大小関係によって視点位置をいくつかの領域に分別する指標である。図6.5に示すように、対面の見付幅Fwと両側面の見付幅Rw(=Lw)<sup>注6.9)</sup>及び、対面の見付高さFhと床面の見付高さGh<sup>注6.10)</sup>とを等号・不等号を用いて整理し<sup>注6.11)</sup>、マトリクスを作成する。表中で縦軸と横軸の掛け合わせ、つまり眺めの中の幅方向及び高さ方向の大小関係を照合したものを視点群と定義したうえで、モデル毎に各視点群に含まれる視点位置の度数を算出し、度数の偏向状況を精査する(表6.4)。次に、すべてのモデルにおいて視点群ごとの度数分布を整理し、さらに選択可能な視点群に着目すると表6.4に示す①~⑧の8種の属性に分別する

注6.9) Fwと両側面のRwとLwを比較する際、視点位置は常に対面に対して正対しているものであるため、RwとLwは常に同じ値となる。よってFwとRw、Lwの3者を比較するのではなく、FwとRwを比較することで、対面と側面の寸法の大小関係を把握する。

注6.10) 対面がH=3.0mのモデル以外は天井面が床面よりも先に眺めの外に外れるため、FhとGhの寸法を比較することとする。

注6.11) 正確なFW=RwやFh=Ghの眺めはある1点の視点位置からしか得ることはできないが、本研究では、正確な視点位置からの眺めの分析を行うものではなく、視点群という特定のまとまりから得られる眺めを分析するものであるため、FW=RwやFh=Ghが得られる視点群の前後の2つの視点群を含めてFW=RwやFh=Ghとすることとする。

表6.3 実験②の度数分布表と眺めに含まれる面数、及び視点群

記号 W/D/H	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨		⑩		⑪		⑫		⑬		⑭		⑮		⑯		⑰		⑱		⑲	
	3 15 3	3 15 6	3 15 9	3 15 12	6 15 3	6 15 6	6 15 9	6 15 12	9 15 3	9 15 6	9 15 9	9 15 12	12 15 3	12 15 6	12 15 9	12 15 12	15 15 3	15 15 6	15 15 9	15 15 12																		
15.0	6	5	12	10	4	6	15	6	4	8	17	7	9	6	14	13	10	14	21	17																		
14.5	0	0	3	1	1	2	4	1	2	1	2	4	2	5	8	4	5	3	5	9																		
14.0	0	1	1	3	0	4	1	3	1	3	3	2	1	5	6	4	4	4	5	3																		
13.5	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	2	3	4	4	1	1																		
13.0	3	3	3	4	5	4	1	5	1	3	1	5	2	4	3	6	6	6	4	2																		
12.5	2	8	3	2	2	4	1	2	2	2	2	1	2	1	5	7	7	1	2	6																		
12.0	1	4	4	1	1	1	1	2	3	2	3	4	2	4	4	2	0	2	3	2																		
11.5	0	4	2	2	2	1	1	1	1	3	6	2	4	2	3	0	1	1	1	1																		
11.0	1	1	2	3	1	7	0	1	1	1	6	2	4	4	0	4	0	1	1	0																		
10.5	1	3	2	0	1	3	1	3	7	2	1	3	3	2	3	1	0	0	1	1																		
10.0	2	6	2	3	2	5	4	0	2	2	1	3	2	3	0	1	1	0	0	0																		
9.5	2	2	1	2	2	2	2	0	5	3	0	2	0	1	1	0	1	0	1	0																		
9.0	2	1	2	3	1	1	1	0	2	3	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0																		
8.5	2	0	2	1	2	0	1	1	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0																		
8.0	3	0	1	2	5	0	1	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0																		
7.5	2	1	0	0	3	2	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
7.0	1	0	0	1	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
6.5	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
6.0	3	0	0	0	4	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
5.5	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
5.0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
4.5	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
4.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
3.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
3.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
2.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
2.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
1.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		
0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																		

5面  
対面、  
右側面、  
左側面、  
床面

4面  
対面、  
右側面、  
左側面、  
床面

3面  
対面、  
右側面、  
左側面

記号の凡例

Lw>Lw	Lw=Lw	Lw<Lw
Fw>Fw	Fw=Fw	Fw<Fw
Gh>Fh	Gh=Fh	Gh<Fh

ことができた。㊸は  $Lw > Fw$  かつ  $Gh > Fh$ 、 $Lw > Fw$  かつ  $Gh \leq Fh$ 、 $Lw \leq Fw$  かつ  $Gh < Fh$  による5つの視点群を有するモデル(視点群属性㊸)であり、同様に、㊹は  $Lw > Fw$  かつ  $Gh \leq Fh$ 、 $Lw \leq Fw$  かつ  $Gh < Fh$  による4つの視点群を有するモデル(視点群属性㊹)、㊺は  $Lw \geq Fw$  かつ  $Gh > Fh$ 、 $Lw < Fw$  かつ  $Gh > Fh$ 、 $Lw < Fw$  かつ  $Gh \leq Fh$  による5つの視点群を有するモデル(視点群属性㊺)、㊻は  $Lw \geq Fw$  かつ  $Gh = Fh$ 、 $Lw \leq Fw$  かつ  $Gh < Fh$  による4つの視点群を有するモデル(視点群属性㊻)である。㊼、㊽、㊾、㊿は  $Lw > Fw$  かつ  $Gh < Fh$ 、 $Lw \leq Fw$  かつ  $Gh < Fh$  による3つの視点群を有するモデル(視点群属性㊼)であり、㊽、㊾、㊿は  $Lw < Fw$  かつ  $Gh > Fh$ 、 $Lw < Fw$  かつ  $Gh \leq Fh$  による3つの視点群を有するモデル(視点群属性㊽)、㊿、㊽、㊾、㊿は  $Lw < Fw$  かつ  $Gh < Fh$  による1つの視点群を有するモデル(視点群属性㊿)となる。以降の分析では、8種の視点群属性ごとに、共有される視点位置の度数分布状況を精査することで、視点位置の選択における指向を把握するが、視点群属性㊸、㊹、㊺については、モデルが1つずつしか該当しないため、㊸と㊹は㊸の視点群属性と、㊺は㊹と組み合わせることで、近似した視点群属性との比較による分析を行う。また、㊻についてもモデルが1つしか該当しないが、近似する視点群属性がみられないため、他の視点群属性の分析結果を踏まえて分析を行う。なお、㊿については、視点群が1つのみであり、視点群による分析が困難なため、㊸から㊿の視点群属性の分析で得られた結果を踏まえて分析を行う。また、各モデルの視点位置と視点群の対応を表6.3に記号で表した。

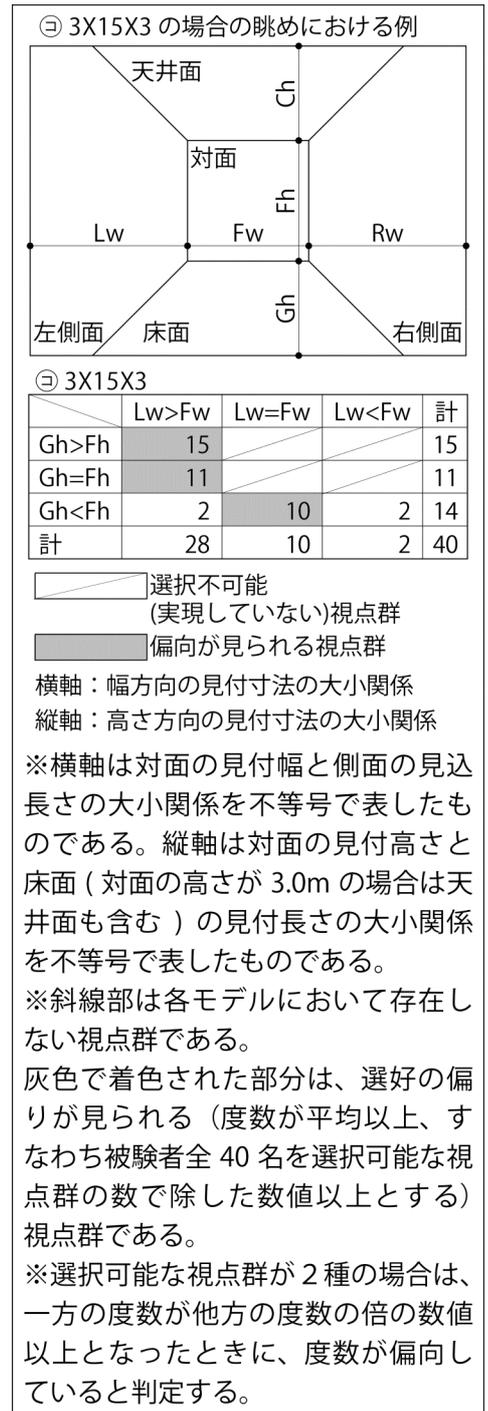


図6.5 視点群の判定例

### 6-3-4. 視点群による分析

最初に、視点群属性①に属する㊸、㊹、㊺、㊻についての分析を行う。これらはモデルの形状より、眺めにおける見付高さに関してはいずれも  $Gh < Fh$  (床面の見付高さと対面の見付高さの比較において、対面の見付高さが大きくなる) の視点群を有する。これを踏まえて表 6.3、6.4 をみると、㊸、㊹、㊺で共通して  $Lw > Fw$  (かつ  $Gh < Fh$ ) である視点群へ選好の偏りが認められる。㊸、㊹については先の分析より指向 $\bar{1}$ が働き、結果として  $Lw > Fw$  の視点群への偏向が生じたと予想されるが、㊹については眺めに含まれる面数が  $Lw > Fw$  から  $Lw = Fw$  で同一であるため、 $Lw > Fw$  の視点群への選好の偏りは指向 $\bar{1}$ では説明がつかない。ところで、 $Lw > Fw$  の視点群からは側面の見付幅より対面のそれが小さくなる眺めを得ることになる。つまり、 $Lw > Fw$  への選好の偏りとは、

表6.4 全20パタンの視点群(及び属性分け)と度数の偏向状況

㊸ 3X15X3					㊹ 3X15X6					㊺ 3X15X9					㊻ 3X15X12				
	Lw>Fw	Lw=Fw	Lw<Fw	計		Lw>Fw	Lw=Fw	Lw<Fw	計		Lw>Fw	Lw=Fw	Lw<Fw	計		Lw>Fw	Lw=Fw	Lw<Fw	計
Gh>Fh	15			15	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0
Gh=Fh	11			11	Gh=Fh	7			7	Gh=Fh				0	Gh=Fh				0
Gh<Fh	2	10	2	14	Gh<Fh	33	0	0	33	Gh<Fh	38	1	1	40	Gh<Fh	39	1	0	40
計	28	10	2	40	計	40	0	0	40	計	38	1	1	40	計	39	1	0	40
㊼ 6X15X3					㊽ 6X15X6					㊾ 6X15X9					㊿ 6X15X12				
Gh>Fh	5	11	2	18	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0
Gh=Fh			12	12	Gh=Fh	12	1		13	Gh=Fh				0	Gh=Fh				0
Gh<Fh			10	10	Gh<Fh	7	20	27	27	Gh<Fh	20	8	12	40	Gh<Fh	10	15	15	40
計	5	11	24	40	計	12	8	20	40	計	20	8	12	40	計	10	15	15	40
㊽ 9X15X3					㊾ 9X15X6					㊿ 9X15X9					㊽ 9X15X12				
Gh>Fh			27	27	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0
Gh=Fh			11	11	Gh=Fh			15	15	Gh=Fh				0	Gh=Fh				0
Gh<Fh			2	2	Gh<Fh			25	25	Gh<Fh			40	40	Gh<Fh			40	40
計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40
㊾ 12X15X3					㊿ 12X15X6					㊽ 12X15X9					㊾ 12X15X12				
Gh>Fh			36	36	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0
Gh=Fh			4	4	Gh=Fh			16	16	Gh=Fh				0	Gh=Fh				0
Gh<Fh			0	0	Gh<Fh			24	24	Gh<Fh			40	40	Gh<Fh			40	40
計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40
㊿ 15X15X3					㊽ 15X15X6					㊾ 15X15X9					㊿ 15X15X12				
Gh>Fh			39	39	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0	Gh>Fh				0
Gh=Fh			1	1	Gh=Fh			27	27	Gh=Fh				0	Gh=Fh				0
Gh<Fh			0	0	Gh<Fh			13	13	Gh<Fh			40	40	Gh<Fh			40	40
計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40	計	0	0	40	40

(眺めにおいて中央に認める)見付幅の小さな1面をその両脇の見付幅の大きな2面が挟んだ眺めを多くの被験者が好んだことを意味している。ここに、高橋が著書の中で述べている図性の獲得のための条件である<sup>注6.12)</sup>「小さいほうが大きいほうよりも図になりやすい」「包むものと包まれるものとは、包まれるほうが図になりやすい」という2つを参照すれば、㊸における $L_w > F_w$ の視点群への選好の偏りから、対面の幅方向における図性獲得への指向の存在が示唆される。これを**指向2a)：幅方向における対面の図性獲得への指向**(図6.6)とする。これより、㊸における $L_w > F_w$ の視点群内の $D=15.0\text{m}$ 以外の視点位置への選好を示す度数分布も、指向2a)によるものだと理解することができる。

一方で、㊹は㊸、㊺、㊻における視点群とは対照的に、 $L_w < F_w$ 及び $L_w = F_w$ (かつ $G_h < F_h$ )の視点群への選好の偏りが認められる。これは、対面と側面の見付幅の比較において、それらが同等の大きさになる眺めか、あるいは対面が大きくなる眺めを得ることを意味する。ここで、高橋が著書の中で述べている群化のための条件<sup>注6.13)</sup>である「対象になるもの、同じ幅となるものはまとまりやすい」という条件を満たすことで、両側面と対面をひとつのまとまりとして眺めようとする**指向3a)：幅方向における群化への指向**(図6.7)及び、幅方向において対面を最大化して眺めようとする**指向4a)：幅方向における対面最大への指向**(図6.8)という2種の指向を想定してみる。例えば、㊸と㊻は先述の通り、いずれも $L_w > F_w$ の視点群への選好の偏りが共通しているとはいえ、対面幅の小さい㊸( $W=3.0\text{m}$ )に比して、これより対面幅が広がる㊻( $W=6.0\text{m}$ )では $L_w > F_w$ の視点群への選好の偏りは顕著ではなく、 $L_w = F_w$ や $L_w < F_w$ の視点群への選好も相当数を認めることができる。つまり、上記の想定を用いると、対面の幅が小さいモデルでは対面の見付幅における図性獲得(指向2a)による空間理解の優位性が強かったが、幅が広がるにつれてそうした理解(先にも記した「見付幅の小さな1面をその両脇の見付幅の大きな2面が挟んだ眺め」の獲得)が得られづらくなり、群化(指向3a)による理解や、対面の最大化(指向4a)による理解といった選択肢との拮抗が生じていると捉えることができる。加えて、上記の想定を用いて㊺や㊻についても以下のような解釈を施すことができる。すなわち【㊺や㊻では最大面数(4面)を得る視点位置が広範で、(㊸と㊻のような)指向1)による

注6.12) 例えば、小山清男は著書の中でドゥッチオの「最後の晩餐」を分析する際に「天井の奥行き方向の線」という言葉で側面と天井面の境界線について説明している(小山清男：遠近法—絵画の奥行きを読む，朝日新聞社，p.38, 1998)。このように、遠近法分野では天井と側面の境界線、又は床面と側面の境界線を奥行き知覚のための線として扱われている。

注6.13) 高橋鷹志ほか：かたちのデータファイル—デザインにおける発達の道具箱，彰国社，1984

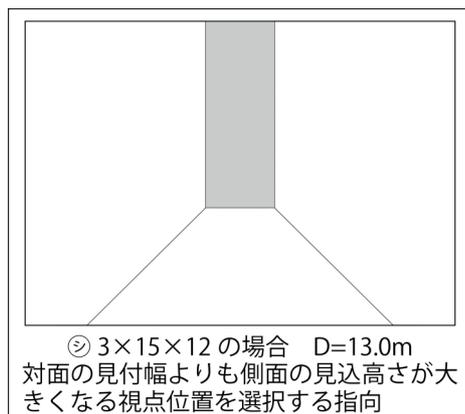


図6.6 2a)：幅方向における対面の図性獲得への指向

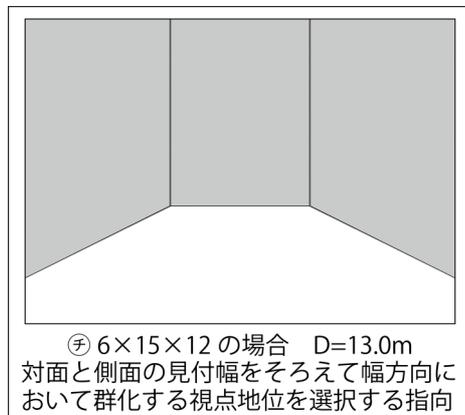


図6.7 3a)：幅方向における群化への指向

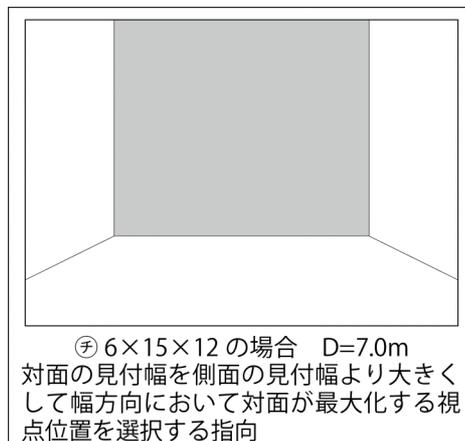


図6.8 4a)：幅方向における対面最大への指向

る選好の限定に至らない。】【そこで指向 $\boxed{2a}$ や $\boxed{3a}$ 、 $\boxed{4a}$ の比較検討が施され、】【対面幅の小さい $\textcircled{a}$ では、対面の見付幅における図性獲得がより容易なため、指向 $\boxed{2a}$ により複数被験者に眺めが共有され、】【対面幅が広がる $\textcircled{b}$ においては、対面の見付幅における図性獲得の容易性が弱まり、群化(指向 $\boxed{3a}$ )や、対面の最大化(指向 $\boxed{4a}$ )による理解といった選択肢との拮抗が生じる。】という解釈である。

ここで、視点群属性 $\textcircled{a}$ の分析を踏まえて $\textcircled{b}$ や $\textcircled{c}$ の分析を行う。視点群属性 $\textcircled{b}$ に属する $\textcircled{c}$ については、視点群属性 $\textcircled{a}$ で選択可能な視点群に加えて、 $L_w > F_w$  かつ  $G_h = F_h$  の視点群が選択可能であり、 $\textcircled{a}$ と比べて眺めにおける対面の見付高さが小さいモデルである。そのことを踏まえて表 6.3、6.4 をみると、見付幅については、 $L_w > F_w$  の視点群かつ最大面数を眺めにおさめる視点位置に全ての度数が分布していることから指向 $\boxed{2a}$ 及び指向 $\boxed{1}$ が働いていると考えられる。一方で見付高さについては、モデル $\textcircled{c}$ はその形状より  $G_h = F_h$  ないしは  $G_h < F_h$  の視点群の二者択一しかなく、多くの被験者が  $G_h = F_h$  よりも  $G_h < F_h$  の視点群からの眺め、すなわち対面の見付高さと同様に(結果として天井面だけが唯一見付高さが小さく)眺めるよりも、対面の見付高さを最も大きく捉える眺めを選好したことを意味している。ここに、先の指向 $\boxed{4a}$ とも関連する眺めの高さ方向への指向、つまり見付高さにおいて対面を最大化して眺めようとする**指向 $\boxed{4}$**   
**b): 高さ方向における対面最大への指向**(図 6.9)の存在が示唆されると解釈できる。

また、視点群属性 $\textcircled{a}$ に属する $\textcircled{b}$ については、視点群属性 $\textcircled{a}$ で選択可能な視点群に加えて、 $L_w > F_w$  かつ  $G_h > F_h$  の視点群が選択可能であり、対面の見付高さ及び対面の見付幅がどちらも小さいモデルである。そのことを踏まえて表 6.3、2.4 をみると、見付幅については、 $L_w > F_w$  の視点群に半数以上の度数が分布していることから指向 $\boxed{2a}$ が働いていると考えられる。一方で、見付高さについては、 $G_h > F_h$  の視点群に選好が偏っていることが認められるが、これは天井面と対面及び床面の見付高さの比較において、対面が小さくなるような眺め、あるいは3面が同等の大きさになる眺めを得ることを意味する。つまり、図性獲得のための条件である「小さいほうが大きいほうよりも図になりやすい」「包むものと包まれるものとは、包まれるほうが図になりやすい」という2条件を満たすことで対面の高さ方向における図性を獲

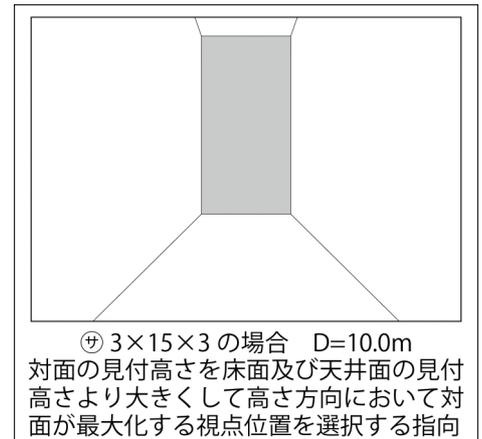


図6.9  $\boxed{4b}$ : 高さ方向における対面最大への指向

得しようとする指向**2b**：高さ方向における対面の図性獲得への指向(図 6. 10)及び、群化のための条件である「対象になるもの、同じ幅となるものはまとまりやすい」という条件を満たすことで、指向**3b**：高さ方向における群化への指向(図 6. 11)が働いていると考えられる。さらに、 $L_w=F_w$ の視点群への度数の分布もみられることから、指向**3a**も働いたと考えられる。

次に、視点群属性①に属する㉞、㉟、㊱についての分析を行う。これらはモデルの形状より、 $L_w<F_w$ (眺めにおける側面と対面の見付幅の比較において、対面の見付幅が大きくなる)の選択肢を有しており、そのことを踏まえて表 6. 3、2. 4 をみると、㉞、㉟、㊱で共通して  $G_h>F_h$  の視点群へ選好が偏っていることが認められる。これは指向**2b**が働いたためだと考えられるが、㉞については㉟、㊱に比べて  $G_h>F_h$  の視点群への選好の偏りは小さく、 $G_h=F_h$  の視点群へも多くの選好が認められることから、指向**2b**よりも劣位ではあるが指向**3b**が働いたと考えられる。ここで、これまでの分析を踏まえて㉞や㉟、㊱、㊲の分析を行う。まず、視点群属性②(㉞、㉟、㊱)と視点群属性①(㉞、㉟、㊱)を比べると、視点群属性①において選択可能であった  $L_w<F_w$  かつ  $G_h>F_h$  の選択肢は視点群属性②においては外れ、 $G_h=F_h$  または  $G_h<F_h$  に限定される。これは、視点群属性②に属する3モデルが視点群属性①に属する3モデルに比して対面の高さが大きいことに起因した必然である。ところで表 6. 3、2. 4 をみると、㉞、㉟については  $G_h<F_h$  の視点群への偏向が認められ、すなわち、対面の見付幅を大きく捉える眺め ( $L_w<F_w$ ) が得られる条件下において、さらに見付高さも大きく捉える指向(指向**4b**)が働いたこと意味している。しかし、視点群属性①に属する㉞と視点群属性②に属する㉞、あるいは㉟と㉟を比べたとき、いずれも  $H=9.0m$  のモデルでありながら、㉞と㉟(視点群属性①)では  $G_h>F_h$  への選好に偏り、一方で㉞、㉟(視点群属性②)では  $G_h<F_h$  に選好が偏ることが示すことより、対面の見付幅が側面のそれより大きく眺められる状況下 ( $L_w<F_w$ ) であっても、モデル幅が  $W=12.0m$  以下では、【対面の見付高さを  $G_h>F_h$ 、すなわち、床面よりも小さく眺めることができる選択肢があるならば、その眺め：指向**2b**を好み】、一方で【対面の見付高さを床面より小さくながめることが物理的にできないならば、 $G_h<F_h$  すなわち対面の高さを最大化して眺めること：指向**4b**を好む】という指向の順列構造をうかがい知ることができる。また㉟(視点群属性②)にお



図6.10 **2b**：高さ方向における対面の図性獲得への指向

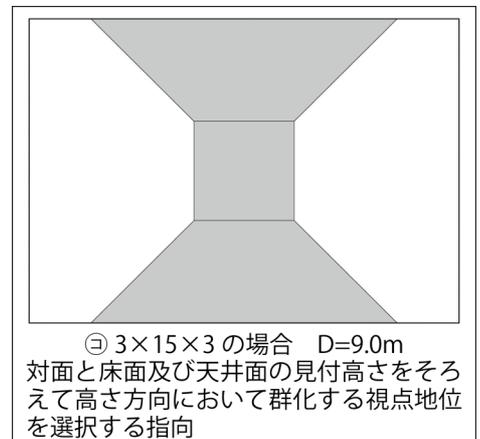


図6.11 **3b**：高さ方向における群化への指向

る偏向状況を見ると、 $G_h < F_h$  (対面の見付高さの最大化) よりも  $G_h = F_h$  (床面と対面の見付高さの等化視) を好む傾向がみられる。加えて、㉞、㉟に関して、 $G_h = F_h$  の視点群へも多くの選好が認められるが、これより視点群属性㉞のモデル(㉞、㉟、㊱)においては  $G_h < F_h$  の視点群から得る眺め、すなわち指向[4b]による一義的な選好ではない、他の指向との逡巡をうかがい知ることができる。ところで、いずれのモデルにおいても  $G_h = F_h$  の視点群は  $G_h < F_h$  のそれよりも対面より離れた位置にあることは共通であり、対面から離れて眺めることの選好とは、対面に近づいて眺める場合より多く得る何らかの情報との検討を意味していると考えられる。㉞、㉟、㊱において  $G_h = F_h$  の視点群からの眺めと  $G_h < F_h$  の視点群からの眺めを比較したとき、捉える面数に違いは無く、また各面の見付幅の序列も差異は生じない。しかし、 $G_h = F_h$  の視点群からの眺め、つまりより対面から離れて眺めることで増加する唯一の情報としては、斜線(床面と側面、あるいは天井面と側面の境界線)の長さがある。この斜線は眺めにおいて奥行き知覚を誘うことが既往知見<sup>注6.14)</sup>より報告されていることを踏まえると、㉞や㉟、さらには㊱における  $G_h = F_h$  と  $G_h < F_h$  の視点群のいずれかを選択するということは、とりもなおさず対面の見付高さにおける凶性獲得(指向[4b])と、斜線をより長く眺めにおさめる指向[5]: 奥行き知覚への指向(図6.12)との拮抗と理解できる。これを踏まえると、㉞から㉟、さらには㊱の順、つまり対面の幅が大きくなる(つまり眺めにおいて斜線の長さが必然的に短くなる)にしたがって、 $G_h = F_h$  の選好傾向が強まるのは、弱化する奥行き知覚を補完するために対面からより離れて指向[5]を満たそうとしていることが示唆されていると理解できる。なお、㉞、㉟、㊱は  $G_h < F_h$  の視点群のなかでも最大面数を眺めにおさめる視点位置にほぼ全ての度数が分布していることから、指向[1]も働いたと考えられる。

続いて、㊱の分析を行う。視点群属性㉞に属する㊱については、視点群属性㉞で選択可能な3視点群に加えて、 $L_w > F_w$  及び  $L_w = F_w$  かつ  $G_h > F_h$  の2視点群が選択可能である。まず対面の見付幅に着目すると、 $L_w < F_w$  の(対面の見付幅を眺めにおいて大きく捉ようとする)視点群に半数以上の度数が分布していることが認められる。ここから、対面の最大化(指向[4a])がより好まれたことがわかる。さらに、 $L_w < F_w$  の視点群のなかでも  $G_h = F_h$  (床面と対面の見付高さを等化にする眺め)と  $G_h < F_h$  (床面の見付高さ

注6.14) 高橋鷹志ほか：かたちのデータファイル—デザインにおける発送の道具箱，彰国社，1984

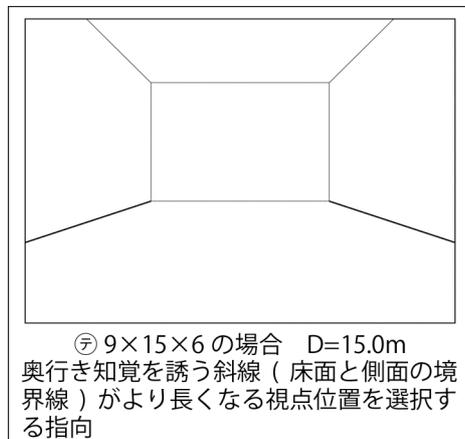


図6.12 [5]: 奥行き知覚への指向

を小さく捉える眺め)の視点群に選好が偏っており、これより、対面の見付幅が側面のそれより大きく眺められる状況下 ( $Lw < Fw$ ) であっては、モデル幅が  $W=6.0\text{m}$  以下では、【 $Gh < Fh$  すなわち、対面の見付の幅・高さとも最大化した眺め：指向  $\boxed{4a}$  +  $\boxed{4b}$ 】や【 $Gh = Fh$  すなわち、床面と対面の見付高さを等化視し群化させる眺め：指向  $\boxed{3b}$ 】が、【 $Gh > Fh$  すなわち、対面から離れて得る眺め：指向  $\boxed{1}$  や  $\boxed{2b}$ 】よりも選好において優位であったという指向の順列構造が理解される。他方で、㊸では、 $Gh > Fh$  (対面の見付高さを小さく捉える眺め) において3視点群が選択可能なものの、その中で、 $Lw = Fw$  かつ  $Gh > Fh$  の視点群にも選好の偏りがみられる。換言すれば、 $Lw > Fw$  (対面の見付幅を小さく捉える眺め：指向  $\boxed{2a}$ ) や  $Lw < Fw$  (対面の見付幅を最大化した眺め：指向  $\boxed{4a}$ ) は好まれないということである。以上より、対面の形状が横長長方形 ( $W=6.0\text{m}$ ,  $H=3.0\text{m}$ ) の環境下において、先ず【眺めの見付幅に自由がある場合は、それを最大化すること ( $Lw < Fw$ ) が選好上優位となり】そのなかでも、【見付高さに対しても自由度がある場合は、対面に図性の付与(指向  $\boxed{2b}$ ) は優先されない】。加えて【見付高さが  $Gh > Fh$  (図性の付与が可能) の眺めの中での選択では、対面の見付幅に図性を付与(指向  $\boxed{2a}$ ) したり、見付幅を最大化(指向  $\boxed{4a}$ ) することは優先されない】という選好の順列構造が明らかとなった。

最後に、これまでに得られた指向をもとに、視点群属性㊸に属する㊹の分析を行う。㊹はモデルの形状より、 $Lw > Fw$  及び  $Lw = Fw$  かつ  $Gh = Fh$  (眺めにおける側面と対面の見付幅の比較において、対面の見付幅が同等かそれ以下になり、床面と対面の見付高さが同等である) の視点群か、または  $Lw < Fw$  及び  $Lw = Fw$  かつ  $Gh < Fh$  (眺めにおける側面と対面の見付幅の比較において、対面の見付幅が同等以上になり、床面と対面の見付高さの比較において、対面の見付高さが大きくなる) の視点群で選択肢を有している。このことを踏まえて表 6.3、6.4 をみると、 $Lw < Fw$  と  $Lw > Fw$  の視点群に選好の偏りが認められるが、これは、㊹が、㊺や㊻と同様に対面の形状を認識しながら最大化(指向  $\boxed{4a}$ 、 $\boxed{4b}$ ) することが可能であると同時に、対面の幅方向における図性獲得(指向  $\boxed{2a}$ ) による理解も可能であったことが起因しているといえることができる。

### 6-3-5. 視点群属性⑥の分析

視点群属性⑥の①、②、③、④、⑤、⑥のモデルについては、選択可能な視点群が1つであるため、視点群による分析はできないが、表 6.3 の度数分布表から指向の整理を行う。まず、対面が  $H=9.0\text{m}$  である①、③、⑤のモデルについては、 $D=15.0\text{m}$  の視点位置へ選好が偏っていることが認められるが、これは最大面数を確保するために指向①が働いたと考えられる。一方で、②、④、⑥については、対面の  $W$  が大きいほど  $D=15.0\text{m}$  やその近辺への度数の偏向が大きくなることが確認され、つまり、側面の見付幅が小さくなるにつれて奥行きを知覚を誘う斜線も小さくなるため、可能な限り斜線を長くしようとする指向⑤の働きを察することができる。

### 6-3-6. 各モデルに関連する指向のまとめ

以上の分析で室内空間における分かり易い眺めの判断要素として8種の指向が得られた。ここで、各モデルにおいて発現する指向を図 6.13 のように整理した。これをもとに、室内空間における「分かり易い眺め」とはいかなるものなのかを詳述する。まず、8種の指向のうち、指向②a、②bを指向②：対面の図性獲得への指向、指向③a、③bを指向③：群化への指向、指向④a、④bを指向④：対面最大への指向にまとめることができる。よって、室内空間における分かり易い眺めの要素として、指向①、指向②(②a、②b)、指向③(③a、③b)、指向④(④a、④b)、指向⑤の8種5類の指向が得られたこととなる。指向①や②、⑤は  $L_w > F_w$  あるいは  $G_h > F_h$  の視点群において発現するものであり、これは第3節2項で得られたモデルの形状にかかわらず対面から離れて眺める傾向をより詳細に表したものであると捉えることができる。さらに、指向②と⑤は互いに同じモデルにおいて同調しないが、指向①は単独で発現するか、指向②または⑤と同調して発現する関係にあると考えられる。一方で、指向③や④は①及び②、⑤のいずれかと同調あるいは拮抗して発現する関係にある。つまり、指向①及び②、⑤は分かり易い眺めの一次的な要素として発現し、指向③や④は二次的な要素として発現するという序列の関係を保

持しながら、各モデルの形状に応じて発現すると考えられる。

- ・全モデル：対面から離れた視点位置から眺める傾向が看取される。
- ・㊦：指向2 a 及び指向2 b、指向3 a、指向3 b が同調して働き、対面の図性や、対面と四周の面との群化が分かり易さの要因となる。
- ・㊧：指向1 及び指向2 a、指向4 b が同調して働き、面数の最大化や、対面の幅方向の図性、高さ方向の対面の最大化が分かり易さの要因となる。
- ・㊨：指向1 及び指向2 a が同調して働き、面数の最大化や、対面の幅方向の図性が分かり易さの要因となる。
- ・㊩：指向2 a が単独で働いたことで、対面の幅方向の図性が分かり易さの要因となる。
- ・㊪：指向2 b 及び3 a、指向3 b、指向4 a、指向4 b が同調して働き、対面と四周の面との群化や、対面の最大化が分かり易さの要因となる。
- ・㊫：指向2 a 及び指向4 a、指向4 b が同調して働き、対面の幅方向の図性や、対面の最大化が分かり易い眺めの要因となる。
- ・㊬：指向1 と指向3 a、指向4 a が拮抗して働き、面数の最大化や、幅方向の群化、あるいは対面の高さ方向の最大化が分かり易さの要因となる。また、指向3 a 及び指向4 a が優位に働く。
- ・㊭：指向1、指向2 a と指向3 a、指向4 a が拮抗して働き、面数の最大化や、対面の幅方向の図性、あるいは幅方向の群化、対面の高さ方向の最大化が分かり易さの要因となる。また、指向3 a、指向4 a が優位に働く。
- ・㊮：指向2 b 及び指向3 b と拮抗して働き、対面の高さ方向の図性や、天井面と対面、床面の群化が分かり易さの要因となる。指向2 b が優位に働く。
- ・㊯㊱㊲：指向1 及び指向4 b、指向5 が拮抗して働き、面数の最大化や、高さ方向の対面の最大化、奥行き知覚の斜線の長さが分かり易さの要因となる。㊯、㊱については指向1 及び指向4 b が優位に、㊲については指向5 が優位に働く。
- ・㊳㊴㊵：指向1 が単独で働いたことで面数を最大化することが分かり易い眺めの要因となる。
- ・㊶㊷㊸：指向5 が単独で働き、奥行き知覚のための斜線を獲得することが分かり易い眺めの要因となる。
- ・㊹㊺：指向2 b が単独で働き、対面の高さ方向の図性が分かり易さの要因となる。

モデルパタン		指向																			
		㊦	㊧	㊨	㊩	㊪	㊫	㊬	㊭	㊮	㊯	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺
指向	W	3	3	3	3	6	6	6	6	9	9	9	9	12	12	12	12	15	15	15	15
	D	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
	H	3	6	9	12	3	6	9	12	3	6	9	12	3	6	9	12	3	6	9	12
1	最大面数への指向		○	○				●	●		◎	○			◎	○			●	○	
2	a 幅	○	○	○	○	○	○		●												
	b 高さ	○								◎				○					○		
3	a 幅	○				○		◎	◎												
	b 高さ	○				○				●											
4	a 幅					○	○	◎	◎												
	b 高さ		○			○	○					◎				◎			●		
5	奥行き知覚への指向											●		○		●		○		◎	○

○同調または拮抗において優劣なく働く ◎拮抗において、優位に働く ●拮抗において、劣位に働く

図6.13 全20パタンのモデルにおける指向のまとめ

## 6-4. 結

### 6-4-1. 本章で得られた知見

本実験によって得られた知見を以下にまとめる。

人々が室内空間において「分かり易い」眺めと判断する視点位置の判断要素として、眺めに含まれている面数（指向①）や、眺めの中における周りの面に対する対面の図性（指向②（指向②a、②b））、眺めの中における対面を含む複数面のまとまり性（指向③（指向③a、③b））、周りの面に対する対面の見えがかり上の大きさの優位性（指向④a、④b）、斜線による奥行き性（指向⑤）の8種5類が得られた。これらは複雑に連動しており、これらの要素の中から特定の要素を精選したうえで眺めが選定されることを明らかにした。

また、各モデルの形状に応じて優先される要素は異なり、同調して選択される、あるいは、同調しない要素の組み合わせもみられる。特に、眺めに含まれる面数や対面の図性、奥行き性の3要素は分かり易い眺めの一次的な判断要素として選択される一方、複数面のまとまり性や対面の見えがかり上の大きさの2要素は、二次的な要素として選択されるという序列の関係を有することを明らかにした。

### 6-4-2. 考察

ここでは、本研究における第5章までで得られた知見（建築メディアにおける情報伝達の作法を整理するための枠組み）に対して、本章で得られた知見を照合することで、情報を介した空間の理解と、身体を経験を介した空間の理解との関係性を把握することを試みる。

まず、第4章で得られた情報伝達の作法を体系化した枠組みと、本章で得られた指向1から指向5を照合する。例えば、指向①：最大面数把握とは、可能な限り視野の中に情報（床面、壁面、天井面）を多く含む眺めを意図した指向であることから、

床面、壁面、天井面の『全容』が【伝達内容】であり、各面にはヒエラルキーが見られないため、『情報の羅列』を提示する【伝達手段】であると言える。一方で、指向<sup>2</sup>：対面の図性獲得への指向や指向<sup>3</sup>：対面最大への指向とは、対面の図性を獲得したり、対面の見え掛り上の大きさを大きくするために他の壁面や床面、天井面の見え掛りの大きさを調節するような眺めを意図しているため、対面が【伝達内容】の『主題』となり、他の壁面や床面、天井面に対する対面の見え掛りの大きさを意識していることから『情報の位相』の【伝達手段】に該当すると言える。また、指向<sup>4</sup>：群化への指向とは、対面と他の面をひとつの群として捉えるような眺めを意図していることから、【伝達内容】は『全容』であり、【伝達手段】は『情報の位相』に該当すると言える。最後に、指向<sup>5</sup>：奥行き知覚への指向とは、他の指向のように眺めのなかでの対面や他の壁面、床面、天井面の大小関係や位相に着目したものではなく、空間の奥行き性を意識したものである。そのため、他の指向のように情報伝達の作法を整理する枠組みに対しての照合は困難ではあるが、仮に、空間の奥行き性を構図的な捉え方ではなく、視知覚的な捉え方で眺めようとする指向であると解釈すれば、空間の奥行き性が『主題』となり、時間の流れを意図しているわけではないが、視知覚という身体の実験を意図した『時間の流れ』の【伝達手段】を採っていると捉える事ができる。

以上の照合結果を図 6.14 に示した。これを概観すると、例えば、配置図による情報伝達の作法である『主体中心の伝達』とは、『対面の図性獲得への指向』と類似した作法であると解釈することができるため、配置図による情報伝達を検討する際に

		伝達手段		
		時間の流れ	情報の位相	情報の羅列
伝達内容	主題	第2章: 自律的仮想行動の伝達 第3章: 体験的伝達 第6章: 奥行き知覚への指向	第3章: 主体中心の伝達 第6章: 対面の図性獲得への指向 第6章: 対面最大への指向	第2章: 範列関係の伝達1
	全容	第2章: 他律的仮想行動の伝達	第2章: 統語構造の伝達 第3章: 案内的伝達 第6章: 群化への指向	第2章: 範列関係の伝達2 第6章: 最大面数把握への指向

図6.14 情報伝達の作法の枠組みと第6章(補章)の分析結果との照合

何らかの影響を与えている可能性が見て取れる。一方で、『奥行き知覚への指向』のように、本研究によって導出した伝達内容と伝達手段の枠組みによって完全には説明づけられなかった指向も確認された。このように、身体を経験を介した空間の理解についての知見が、建築メディアにおける作法を整理するための枠組みによって説明づけられる場合と説明づけられない場合がみられることから、やはり、両者の間に齟齬が生じていることを改めて確認することができた。

このように、情報を介した空間の理解と、身体を経験を介した空間の理解との関係性の一端を把握することができた。第5章における今後の展望と課題においても述べたが、本研究で試みたような情報伝達への論考を推し進めることが、建築空間の知覚のメカニズムに関わる研究課題のアプローチとなるとも考えられる。

## 参考文献

- No. 001/H, W, Lissman: "Electric Location by Fishes", Scientific American, 1963. 3
- No. 002/エドワード・ホール: かくれた次元, 日高敏隆ほか 訳, みすず書房, 1970
- No. 003/S・E・ラスムッセン: 経験としての建築, 佐々木宏 訳, 美術選書, 1966. 5 (傍点引用者)
- No. 004/富永謙: 建築巡礼 12 ル・コルビュジエー空間と人間の尺度ー, 丸善, 1989
- No. 005/五十嵐太郎: 情報・同時性・建築ー建築をめぐるジャーナリズム, 建築雑誌 Vol. 14, No. 1443, 1999
- No. 006/黒田正巳: 空間を描く遠近法, 彰国社, 1992
- No. 007/福屋粧子: フリーズフレームスー写真と建築の横断線ー, 10+1 No. 14, INAX 出版, 1998. 10
- No. 008/久野紀光: 建築群に対する眺望行為とその意味 第4章, 東京工業大学学位論文, 2003
- No. 009/中村義平二: 知って得する建物の知 138 建築図面の歴史 現物から次々「写す」標準化の技術も発達, 住宅新報 2014 年 6 月 3 日号, 住宅新報社, 2014. 6
- No. 010/エイドリアン・フォーティエー: 言語と建築ー語彙体系としてのモダニズムー, 坂牛卓ほか 訳, 鹿島出版会, 2006. 1
- No. 011/Marcus Vitruvius Pollio: De Architectura libri decem, BC30~
- No. 012/浜口隆一: 展望ー現代文明の中の建築, 新建築 1964 年 6 月号, 1964. 6
- No. 013/原広司: 建築ジャーナリズムの動向, 『建築年間 1965』建築ジャーナリズム研究所, 1965
- No. 014/竹内正明: 戦後日本における建築ジャーナリズムへの批評的言説について, 日本建築学会計画系論文集 第 590 号, 2005. 4
- No. 015/ヴァルター・ベンヤミン: 図説写真小史, 久保哲司 訳, 筑摩書房, 1998
- No. 016/福屋粧子: 建築はどのようにして伝達されるかー制度としての建築写真ー (第 31 回建築文化懸賞論文入選発表 課題: 建築/制度), 建築文化 Vol. 53 No. 616, pp218~224, 彰国社, 1998. 2
- No. 017/エイドリアン・フォーティエー: 言語と建築ー語彙体系としてのモダニズムー, 坂牛卓ほか 訳鹿島出版会, 2006. 1
- No. 018/原広司: <もの>と<ことば>, 建築雑誌 Vol. 92 No. 1129, pp31~32, 日本建築学会, 1977. 11
- No. 019/浜口隆一: 建築ジャーナリズム論, 建築文化 Vol. 16 No. 5, pp33~40, 彰国社, 1961. 5
- No. 020/向井正也: 建築ジャーナリズムの聖と俗 - ジャーナリズムとアカデミズム - 建築雑誌 Vol. 92 No. 1129, pp3~10, 日本建築学会, 1977. 11
- No. 021/J・J・ギブソン: 生態学的視覚論, 古崎敬ほか 訳, サイエンス社, 1985

- No. 022 / J・J・ギブソン：視覚ワールドの知覚，東山 篤規ほか 訳，新曜社，2011
- No. 023 / 高橋鷹志：かたちのデータファイル - デザインにおける発想の工具箱 - ，彰国社，1984
- No. 024 / 萩島哲ほか：19 世紀ヨーロッパ風景絵画にみる都市景観に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No. 413，pp. 83～93，1990. 7
- No. 025 / 三輪祐二ほか：17 世紀オランダ絵画の中の建築空間，日本建築学会計画系論文集，No. 593，pp. 73～78，2005. 7
- No. 026 / 三輪祐二ほか：西洋絵画の中の都市・建築空間—ルネサンスから新古典主義—，日本建築学会計画系論文集，No. 613，pp. 59～64，2007. 3
- No. 027 / 坂井猛ほか：広重の浮世絵風景画にみる景観分類に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No. 461，pp. 165～174，1994. 7
- No. 028 / 鷗心治ほか：広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察，日本建築学会計画系論文集，No. 482，pp. 155～163，1996. 4
- No. 029 / 鷗心治ほか：広重の浮世絵風景画にみる樹木の構図的機能に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No. 507，pp. 165～171，1998. 5
- No. 030 / 清水李太郎ほか：広重の浮世絵における月の景観の構成と視点場探索手法に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No. 635，pp. 161～168，2009. 1
- No. 031 / 高屋麻里子：近世琉球の絵画資料の表現と建築，日本建築学会計画系論文集，No. 609，pp. 129～134，2006. 11
- No. 032 / 神谷文子ほか：主題要素の写され方からみた都市景観写真の構図に関する研究—欧米 10 都市の観光ガイドブックを事例として—，日本建築学会計画系論文集，No. 528，pp. 179～186，2000. 2
- No. 033 / 日高圭一郎ほか：感情画像情報からみた観光資源に関する一考察，日本建築学会計画系論文集，No. 512，pp. 213～220，1998. 10
- No. 034 / 姫野由香ほか：観光資源が写された景観画像の構図解析手法，日本建築学会計画系論文集，No. 569，pp. 139～145，2003. 7
- No. 035 / 大東俊介ほか：2 棟建築の写真にみる構図の特性—多棟建築群の配置計画に関する研究 その 1—，日本建築学会計画系論文集，No. 546，pp. 289～296，2001. 8
- No. 036 / 早瀬幸彦ほか，「視深度」による建築平記述・評価の研究，日本建築学会計画系論文集，No. 484，pp. 123～128，1996. 6
- No. 037 / 横山勝樹ほか，建築図面の解釈にみられる理論構造の分析—空間図式の研究 その 2—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 420，pp. 7～15，1991. 2
- No. 038 / 奥山信一ほか，戦後「新建築」誌にみられる建築家の住宅観—建築家の住宅観に関する研究—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 428，pp. 125～135，1991. 10
- No. 039 / 奥山信一ほか，戦後「新建築」誌にみられた建築家の都市観—建築家の住宅観・都市観に関する研究—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 444，pp. 49～59，1993. 2
- No. 040 / 奥山信一ほか，戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作の主題—建築家の創作論に関する研究—，日本建築学会計画系論文報告集，No. 445，pp. 77～86，1993. 12

- No. 041／奥山信一ほか、建築家の言説にみられる現代日本住宅作品の空間モデルー建築家の創作論に関する研究ー日本建築学会計画系論文集, No. 456, pp. 123～134, 1994. 2
- No. 042／奥山信一ほか、戦後「新建築」誌における建築家の創作論ー建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデルー, 日本建築学会計画系論文集, No. 477, pp. 101～108, 1995. 11
- No. 043／成瀬徳行、建築家の言説における自動詞の研究ーSD REVIEWに見られる建築家のレトリック(その1)ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 538, pp. 277～284, 2000. 12
- No. 044／北川啓介ほか、建築評論からみる近代建築の形象要素と計画要素の関係, 日本建築学会計画系論文集, No. 627, pp. 979～986, 2008. 5
- No. 045／夏目欣昇ほか、評論における名詞と修飾語の出現傾向の考察ー西洋近代建築評論にみられる単語関係の可視化(その1)ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 632, pp. 2249～2256, 2008. 10
- No. 046／岡河貢ほか: 情報化された建築空間の構成に関する研究ール・コルビュジェ全作品集の建築写真の連続性についてー, 日本建築学会計画系論文集, No. 564, pp. 363～369, 2003. 2
- No. 047／岡河貢ほか: ル・コルビュジェ全作品集における建築写真と図面・スケッチの構成ー情報化された建築空間の構成に関する研究ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 607, pp. 225～232, 2006. 9
- No. 048／足立真ほか: ル・コルビュジェ全作品集における建築写真の対象と構成ー情報化された建築空間の構成に関する研究ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 609, pp. 193～200, 2006. 11
- No. 049／林采震ほか: 美術館における展示方式の構成とその特性ー美術館の建築計画に関する研究 その1ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 421, pp. 63～73, 1991. 3
- No. 050／林采震ほか: 展示方式による美術館の類型化とその展示手法ー美術館の建築計画に関する研究 その2ー, 日本建築学会計画系論文集, No. 430, pp. 77～85, 1991. 121
- No. 051／徐華ほか: 経路選択の類型ー展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究(その1), 日本建築学会計画系論文集, No. 568, pp. 53～60, 2003. 6
- No. 052／徐華ほか: 「認知空間」の構造ー展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究(その2), 日本建築学会計画系論文集, No. 596, pp. 35～41, 2005. 10
- No. 053／徐華ほか: 場所の定位ー展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究(その3), 日本建築学会計画系論文集, No. 613, pp. 95～102, 2007. 3
- No. 054／徐華ほか: 床面形状の認知ー展示空間における経路選択並びに空間認知に関する研究(その4), 日本建築学会計画系論文集, No. 620, pp. 73～79, 2007. 10
- No. 055／大石洋之ほか: 被験者の自由記述回答に基づく地域景観の選好特性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 599, pp. 135～142, 2006. 1
- No. 056／大石洋之ほか: 被験者の撮影写真における選好景観特性の分析, 日本建築学会計画系論文集, No. 611, pp. 75～82, 2007. 1
- No. 057／横田幹朗ほか: 住民の撮影写真に基づく水際建築物からの眺望景観の選好特性, 日本建築学会計画系論文集, No. 547, pp. 87～94, 2001. 9
- No. 058／日色真帆ほか: 迷いと発見を含んだ問題解決としての都市空間の経路探索, 日本建築学会計画系論文集, No. 466, pp. 65～74, 1994. 12

- No. 059／足立孝ほか：小学校児童の空間構造に関する研究（１）－年齢差による空間把握の相違について－，日本建築学会論文報告集，No. 106，pp44～49，1964. 12
- No. 060／足立孝ほか：小学校児童の空間構造に関する研究（２）－空間把握の型について－，日本建築学会論文報告集，No. 107，pp. 54～59，1965. 1
- No. 061／萩原美智子ほか：子供の空間表象にみる住空間概念の発達，日本建築学会計画系論文集，No. 521，pp. 153～158，1999. 7
- No. 062／萩原美智子ほか：描画表現にみる十空間概念の発達－幼児と小学低学年の模型による空間表象との比較－，日本建築学会計画系論文集，No. 534，pp. 117～122，2000. 8
- No. 063／宮本文人ほか：児童の空間認知と小学校校舎の平面構成に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No. 436，pp. 19～29，1992. 6
- No. 064／山本陽ほか：躯体群による正面性の発現とその要因－多棟建築群の配置計画に関する研究 その２－，日本建築学会計画系論文集，No. 572，pp. 75～82，2003. 10
- No. 065／松本直司ほか：縮尺模型実験による二棟配置の建物間空間の形態と大きさ感の関係－建築間空間の大きさ感に関する研究・その１－，日本建築学会計画系論文集，No. 485，pp. 143～150，1996. 7
- No. 066／松本直司ほか：縮尺模型実験に基づく二棟配置の建物間空間の大きさ感の予測－建築間空間の大きさ感に関する研究・その２－，日本建築学会計画系論文集，No. 602，pp. 51～57，2006. 4
- No. 067／北川啓介ほか：室空間の奥行き認識の絵画的手がかりの考察，日本建築学会計画系論文集，No. 627，pp. 987～994，2008. 5
- No. 068／谷口汎邦：住宅地における建築群の空間構成と視空間評価予測に関する研究－建築群の空間構成計画に関する研究 その２－，日本建築学会論文報告集，No. 281，pp. 129～137，1979
- No. 069／松本直司ほか：住宅地における建築群の空間構成の類型化とその視覚的効果－建築群の空間構成計画に関する研究 その３－，日本建築学会論文報告集，No. 316，pp. 99～106，1982. 6
- No. 070／松本直司：住宅地における建築群の空間構成の変化と視覚的効果について－建築群の空間構成計画に関する研究 その４－，日本建築学会論文報告集，No. 346，pp. 143～152，1984
- No. 071／松本直司：空間知覚評価メディア（シミュレータ）の開発－建築群の空間構成計画に関する研究 その５－，日本建築学会計画系論文報告集，No. 403，pp. 43～51，1989
- No. 072／松本直司ほか：模型空間知覚評価メディア（シミュレータ）の有効性－建築群の空間構成計画に関する研究 その６－，日本建築学会計画系論文集，No. 432，pp. 89～97，1992. 2
- No. 073／松本直司ほか：二棟平行配置空間の視覚的まとまりについて－建築群の空間構成計画に関する研究 その７－，日本建築学会計画系論文集，No. 446，pp. 111～118，1993. 4
- No. 074／松本直司ほか：二棟・三棟配置の空間構成における建物まわりの視覚評価予測－建築群の空間構成計画に関する研究 その８－，日本建築学会計画系論文集，No. 456，pp. 153～162，1994. 2
- No. 075／松本直司ほか：建物高さ・長さおよび視点高さが異なる場合の二棟平行配置空間の視覚的まとまり－建築群の空間構成計画に関する研究 その９－，日本建築学会計画系論文集，No. 470，pp. 131～138，1995. 4

- No. 076 / J・J・ギブソン：生態学的視覚論，古崎敬ほか 訳，サイエンス社，1985
- No. 077 / J・J・ギブソン：視覚ワールドの知覚，東山 篤規ほか 訳，新曜社，2011
- No. 078 / モーリス・メルロー・ポンティ：知覚の現象学 1，竹内芳郎ほか 訳，みすず書房，1967
- No. 079 / モーリス・メルロー・ポンティ：知覚の現象学 2，竹内芳郎ほか 訳，みすず書房，1974
- No. 080 / フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，1940
- No. 081 / 永瀬智基ほか：写真による建築空間の表現方法について－桂離宮の写真集を事例として－，芸術工学会誌 No. 62，pp. 47-54，2013. 09
- No. 082 / 久保井聡ほか：建築誌における現代日本住宅作品の建築写真の掲載順－建築写真の被写対象の属性・葉数・サイズを指標として－，日本建築学会計画系論文集，No. 717，pp. 2691～2699，2015. 11
- No. 083 / 望月大地ほか：建築作品における配置図の描画表現，日本建築学会計画系論文，No. 709，pp. 727～735，2015. 3
- No. 084 / 永瀬智基ほか：室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素，日本建築学会計画系論文集，No. 704，pp. 2323～2331，2014. 10
- No. 085 / 磯達雄：転位する建築写真－リアリズムからスーパーフラットまで，「10+1」No. 23，INAX 出版，2001
- No. 086 / 富永譲：建築巡礼 12 ル・コルビュジェー幾何学と人間の尺度，丸善，1989
- No. 087 / 名取洋之助：写真の読みかた，岩波新書，1963
- No. 088 / 磯達雄：転位する建築写真－リアリズムからスーパーフラットまで，「10+1」No. 23，INAX 出版，2001
- No. 089 / 磯崎新：桂離宮 空間と形，岩波書店，1982
- No. 090 / 田中正夫：世界建築全集 3 日本近世「廻遊式庭園」，平凡社，1961
- No. 091 / 磯達雄：転位する建築写真－リアリズムからスーパーフラットまで，10+1 No. 23，INAX 出版，2001
- No. 092 / 植田実：編集者の立場から，建築雑誌，vol. 94 no. 1156，1979. 10)
- No. 093 / エドワード・レルフ：場所の現象学－没場所性を超えて－，高野岳彦ほか 訳，筑摩書房，1991
- No. 094 / 瓜生忠夫：新版モニタージュ考－映画的認識の系譜－，時事通信社，1981
- No. 095 / C・ノルベルグ・シュルツ：実存・空間・建築，加藤邦男 訳，p. 44，鹿島出版会，1997
- No. 096 / 奥村明俊ほか：5W1H分類・ナビゲーションによる情報活用プラットフォーム，情報処理学会研究報告DD (97)，pp. 1～7，1997. 09
- No. 097 / フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，1940

- No. 098／町田健：ソシユールのすべて－言語学でいちばん大切なこと－，研究社，2004
- No. 099／奥山信一ほか：戦後「新建築」誌における建築家の創作論－建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル－，日本建築学会計画系論文集 No. 477，pp. 101～108，1995. 11
- No. 100／G. Nitschke：Anatomie der gelebten Umwelt，1968（Bauen+ Wohnen September 1968）  
／エドワード・レルフ：場所の現象学－没場所制を超えて，，高野岳彦ほか訳，築摩書房，1991
- No. 101／高橋鷹志ほか：かたちのデータファイル－デザインにおける発送の道具箱，彰国社，1984
- No. 102／ジェームス・ジェーロン・ギブソン：生態学的視覚論－ヒトの知覚世界を探る，古崎敬  
ほか訳，サイエンス社，1985
- No. 103／松下大輔ほか：CG 画像の感性評価による対話型進化計算を用いたファサードガラス特  
性の探求法の研究，日本建築学会計画系論文集，第 584 号，pp. 187～192，2004. 10
- No. 103／三橋哲雄ほか：映像情報メディア基幹技術シリーズ 8 画像と視覚情報科学，コロナ社，  
2009. 02
- No. 104／小山清男：遠近法－絵画の奥行きを読む，朝日新聞社，1998
- No. 105／高橋鷹志ほか：かたちのデータファイル－デザインにおける発送の道具箱，彰国社，1984
- No. 106／淵上正幸：ヨーロッパ建築案内 3，TOTO 出版，2001. 01

第2章1節における画像の出典元資料 ①

(各資料において使用された写真や図版などが掲載されている頁を記入している)

- ①-001 桂離宮 p3-103 毎日新聞社 1952 堀口捨己 著
- ①-002 桂-日本建築における伝統と創造 p50-65、p67-83、p86-101、p104-127、p130-141、p144-153、p156-171、p174-181、p184-197 造型社 1960 丹下健三 他 著
- ①-003 桂離宮 空間と形 p26-69、p72-135、p138-151、p154-179、p182-213、p216-231 岩波書店 1982 磯崎新 他 著
- ①-004 新編名宝日本の美 22 桂離宮 p5-p44、p77-p100 小学館 1990 斎藤俊彦 著
- ①-005 日本名建築選集 19 桂離宮 p2-72 新潮社 1993 大和智 他 著
- ①-006 桂離宮 p17-25、p27-51、p54-93、p96-114、p116-136 小学館 1995 鈴木嘉吉 他 著
- ①-007 桂離宮 p10-15、p23-27、p30-33、p35-51、p54-67、p70-71、p73-77、p99-111、p115-118、p121-125、p127、p130-138、p144-149、p151、p153-163、p167-171、p173-186、p188-191、p194-198、p203-105 新建築社 1996 伊藤ていじ 他 著

## 第2章2節における画像の出典元資料②

(各資料において使用された写真や図版などが掲載されている頁を記入している)

- ②-001 桜上水K邸 新建築住宅特集 2000年04月号, pp. 044～053, 新建築社, 2000. 03
- ②-002 西田邸 新建築住宅特集 2000年06月号, pp. 118～124, 新建築社, 2000. 05
- ②-003 渦森台ハウス 新建築住宅特集 2000年07月号, pp. 057～071, 新建築社, 2000. 06
- ②-004 C 新建築住宅特集 2000年09月号, pp. 054～065, 新建築社, 2000. 08
- ②-005 再生木ルーバーハウス 新建築 2000年09月号, pp. 182～189, 新建築社, 2000. 09
- ②-006 対屋の家 新建築住宅特集 2000年10月号, pp. 100～107, 新建築社, 2000. 09
- ②-007 小さな家 新建築 2000年11月号, pp. 184～193, 新建築社, 2000. 11
- ②-008 台形集成材の家-11 新建築住宅特集 2000年12月号, pp. 112～119, 新建築社, 2000. 11
- ②-009 はだかの家 新建築住宅特集 2001年01月号, pp. 030～045, 新建築社, 2000. 12
- ②-010 界川の家 新建築住宅特集 2001年02月号, pp. 044～053, 新建築社, 2001. 01
- ②-01 大和町の家 新建築住宅特集 2001年02月号, pp. 062～071, 新建築社, 2001. 01
- ②-012 穴居人 新建築住宅特集 2001年03月号, pp. 092～097, 新建築社, 2001. 03
- ②-013 ハウス・アサマ 新建築 2001年03月号, pp. 136～145, 新建築社, 2001. 03
- ②-014 F. O. B. HOMES TYPE-B-001 新建築住宅特集 2001年04月号, pp. 056～058 新建築社, 2001. 03
- ②-015 F. O. B. HOMES TYPE-A-001 新建築住宅特集 2001年04月号, pp. 053～055, 新建築社, 2001. 03
- ②-016 F. O. B. HOMES TYPE-A-002 新建築住宅特集 2001年04月号, pp. 059～061, 新建築社, 2001. 03
- ②-017 i 新建築 2001年04月号, pp. 074～085, 新建築社, 2001. 04
- ②-018 TN 新建築 2001年04月号, pp. 122～131, 新建築社, 2001. 04
- ②-019 春日部のダブルハウス 新建築 2001年06月号, pp. 156～163, 新建築社, 2001. 06
- ②-020 海の家 新建築 2006年10月号, pp. 181～183, 新建築社, 2006. 09
- ②-021 西所沢の住宅 新建築住宅特集 2013年12月号, pp. 132～147, 新建築社, 2013. 11
- ②-022 富田林の家Ⅲ 新建築住宅特集 2001年11月号, pp. 018～025, 新建築社, 2001. 10
- ②-023 徳山の家 新建築住宅特集 2002年01月号, pp. 044～051, 新建築社, 2001. 12
- ②-024 入江のゲストハウス 新建築 2002年01月号, pp. 130～136, 新建築社, 2002. 01
- ②-025 s house 新建築住宅特集 2002年02月号, pp. 082～089, 新建築社, 2002. 01
- ②-026 エアー・ハウス 新建築住宅特集 2002年04月号, pp. 053～063, 新建築社, 2002. 03
- ②-027 Y. ケンネル 新建築住宅特集 2002年05月号, pp. 070～076, 新建築社, 2002. 04
- ②-028 ナチュラルスラット 新建築住宅特集 2002年07月号, pp. 024～035, 新建築社, 2002. 06
- ②-029 ピクチャー・ウィンドウの家 新建築住宅特集 2002年08月号, pp. 050～056, 新建築社, 2002. 07
- ②-030 箱の家-50 [吉田邸] 新建築住宅特集 2002年11月号, pp. 138～145, 新建築社, 2002. 10

- ②-031 101 番目の家 新建築住宅特集 2002 年 12 月号, pp. 118~123, 新建築社, 2002. 11
- ②-032 折本邸 新建築住宅特集 2003 年 01 月号, pp. 024~033, 新建築社, 2002. 12
- ②-033 BLOC 新建築住宅特集 2003 年 01 月号, pp. 102~109, 新建築社, 2002. 12
- ②-034 住宅 K 新建築住宅特集 2003 年 02 月号, pp. 058~065, 新建築社, 2003. 01
- ②-035 M2D+MA 新建築住宅特集 2003 年 03 月号, pp. 086~091, 新建築社, 2003. 02
- ②-036 用賀の家 新建築住宅特集 2003 年 04 月号, pp. 078~085, 新建築社, 2003. 03
- ②-037 経堂の家 新建築住宅特集 2003 年 04 月号, pp. 070~078, 新建築社, 2003. 03
- ②-038 Y house 新建築住宅特集 2003 年 04 月号, pp. 032~043, 新建築社, 2003. 03
- ②-039 アトリウムのある家 新建築住宅特集 2003 年 05 月号, pp. 018~029, 新建築社, 2003. 04
- ②-040 4m×4m の家 新建築住宅特集 2003 年 06 月号, pp. 028~037, 新建築社, 2003. 05
- ②-041 江東の住宅 新建築住宅特集 2003 年 06 月号, pp. 028~037, 新建築社, 2003. 05
- ②-042 ガエ・ハウス 新建築住宅特集 2003 年 10 月号, pp. 026~035, 新建築社, 2003. 09
- ②-043 カーザ・リベラ 新建築住宅特集 2003 年 10 月号, pp. 078~1089 新建築社, 2003. 09
- ②-044 HOUSE GT 新建築住宅特集 2003 年 11 月号, pp. 128~135, 新建築社, 2003. 10
- ②-045 碧い家 新建築住宅特集 2003 年 11 月号, pp. 120~127, 新建築社, 2003. 10
- ②-046 GAP 新建築住宅特集 2003 年 12 月号, pp. 060~066, 新建築社, 2003. 11
- ②-047 住吉のゲストハウス 新建築住宅特集 2004 年 01 月号, pp. 094~101, 新建築社, 2003. 12
- ②-048 若王子のゲストハウス 新建築 2004 年 01 月号, pp. 072~080, 新建築社, 2004. 01
- ②-049 縁側の家 新建築住宅特集 2004 年 01 月号, pp. 030~039, 新建築社, 2003. 12
- ②-050 風の輪 新建築 2004 年 02 月号, pp. 116~123, 新建築社, 2004. 02
- ②-051 梅林の家 新建築 2004 年 03 月号, pp. 062~077, 新建築社, 2004. 03
- ②-052 箱の家-87 [木本邸] 新建築住宅特集 2004 年 05 月号, pp. 048~053, 新建築社, 2004. 05
- ②-053 標準住宅 2004 新建築住宅特集 2004 年 05 月号, pp. 028~037, 新建築社, 2004. 04
- ②-054 門前仲町の住宅 新建築住宅特集 2004 年 06 月号, pp. 034~041, 新建築社, 2004. 05
- ②-055 MUJI+INFILL 木の家-1 新建築住宅特集 2004 年 07 月号, pp. 064~071, 新建築社, 2004. 06
- ②-056 襲の家 新建築住宅特集 2004 年 07 月号, pp. 064~071, 新建築社, 2004. 06
- ②-057 G 新建築 2004 年 09 月号, pp. 139~147, 新建築社, 2004. 09
- ②-058 トラス下の矩形 新建築住宅特集 2004 年 09 月号, pp. 026~033, 新建築社, 2004. 09
- ②-059 T0 新建築住宅特集 2005 年 01 月号, pp. 096~105, 新建築社, 2004. 12
- ②-060 アシタノイエ 新建築住宅特集 2005 年 01 月号, pp. 032~043, 新建築社, 2004. 12
- ②-061 WH 新建築住宅特集 2005 年 02 月号, pp. 086~091, 新建築社, 2005. 01
- ②-062 垂井の家 新建築住宅特集 2005 年 04 月号, pp. 112~117, 新建築社, 2005. 03
- ②-063 Lucky Drops 新建築 2005 年 04 月号, pp. 106~109, 新建築社, 2005. 04
- ②-064 阿佐谷南の家 新建築住宅特集 2005 年 05 月号, pp. 068~077, 新建築社, 2005. 05
- ②-065 赤堤通りの家 新建築住宅特集 2005 年 06 月号, pp. 096~103, 新建築社, 2005. 06
- ②-066 武庫之荘 F 邸 新建築住宅特集 2005 年 06 月号, pp. 118~125, 新建築社, 2005. 05

- ②-067 二重の家 新建築住宅特集 2005年06月号, pp. 022~033, 新建築社, 2005. 05
- ②-068 Yawn House 新建築住宅特集 2005年07月号, pp. 044~053, 新建築社, 2005. 06
- ②-069 由比ガ浜の家 新建築住宅特集 2013年07月号, pp. 080~089, 新建築社, 2013. 06
- ②-070 9坪ハウス “Tall” 新建築住宅特集 2005年10月号, pp. 040~045, 新建築社, 2005. 09
- ②-071 新大江の住宅 新建築 2005年11月号, pp. 140~147, 新建築社, 2005. 11
- ②-072 オレクサハウス 新建築 2005年11月号, pp. 131~139, 新建築社, 2005. 11
- ②-073 COSMOS#2-都市住宅 2005 新建築 2005年12月号, pp. 130~139, 新建築社, 2005. 12
- ②-074 新潟の住宅 新建築住宅特集 2005年12月号, pp. 106~113, 新建築社, 2005. 11
- ②-075 VILLA NAKAKARUIZAWA 新建築住宅特集 2005年12月号, pp. 026~033, 新建築社, 2005. 11
- ②-076 HOUSE YK/Islands 新建築住宅特集 2006年01月号, pp. 14~149, 新建築社, 2005. 12
- ②-077 ガク・ハウス 新建築住宅特集 2006年01月号, pp. 130~137, 新建築社, 2005. 12
- ②-078 LOVE HOUSE 新建築住宅特集 2006年01月号, pp. 158~163, 新建築社, 2005. 12
- ②-079 香芝の家 新建築住宅特集 2006年01月号, pp. 070~077, 新建築社, 2005. 12
- ②-080 能代の住宅 新建築住宅特集 2006年01月号, pp. 118~123, 新建築社, 2005. 12
- ②-081 HOUSE SH 新建築住宅特集 2006年02月号, pp. 096~101, 新建築社, 2006. 01
- ②-082 Subdivision 新建築住宅特集 2006年02月号, pp. 032~041, 新建築社, 2006. 01
- ②-083 DoubleBlind 新建築住宅特集 2006年02月号, pp. 042~049, 新建築社, 2006. 01
- ②-084 上志津の家 新建築住宅特集 2006年03月号, pp. 128~133, 新建築社, 2006. 02
- ②-085 おおつ野の家 新建築 2006年05月号, pp. 122~127, 新建築社, 2006. 04
- ②-086 黒壁の家 土間を内包する家 新建築住宅特集 2006年06月号, pp. 120~127, 新建築社, 2006. 05
- ②-087 CUBE28° 新建築住宅特集 2006年06月号, pp. 112~119, 新建築社, 2006. 05
- ②-088 東北沢の住宅 新建築住宅特集 2006年07月号, pp. 130~135, 新建築社, 2006. 06
- ②-089 深大寺の入籠 新建築住宅特集 2006年07月号, pp. 084~091, 新建築社, 2006. 06
- ②-090 黒箱一渋谷H 新建築住宅特集 2006年08月号, pp. 138~143, 新建築社, 2006. 07
- ②-091 おおきな家 新建築住宅特集 2006年08月号, pp. 038~047, 新建築社, 2006. 07
- ②-092 港北の家 新建築住宅特集 2006年08月号, pp. 056~065, 新建築社, 2006. 08
- ②-093 9坪ハウス “basic” I 邸 新建築住宅特集 2006年11月号, pp. 110~113, 新建築社, 2006. 10
- ②-094 輪の家 新建築住宅特集 2006年11月号, pp. 150~155, 新建築社, 2006. 10
- ②-095 西麻布の住宅 新建築 2014年02月号, pp. 096~101, 新建築社, 2014. 02
- ②-096 元代々木の住宅 新建築住宅特集 2006年12月号, pp. -060~ 067, 新建築社, 2006. 12
- ②-097 2004 新建築 2006年12月号, pp. 188~195, 新建築社, 2006. 12
- ②-098 桜台の住宅 新建築住宅特集 2007年01月号, pp. 107~112, 新建築社, 2006. 12
- ②-099 万華鏡の家 新建築住宅特集 2007年02月号, pp. 102~109, 新建築社, 2007. 01
- ②-100 目神山の家 19 新建築住宅特集 2007年02月号, pp. 054~059, 新建築社, 2007. 01
- ②-. 101 北沢の家 新建築住宅特集 2007年03月号, pp. 116~121, 新建築社, 2007. 02

- ②-. 102 HOUSE A 新建築 2007 年 03 月号, pp. 060～075, 新建築社, 2007. 03
- ②-. 103 板橋のハウス 新建築住宅特集 2007 年 03 月号, pp. 076～089, 新建築社, 2007. 03
- ②-. 104 下鴨の家 新建築住宅特集 2007 年 04 月号, pp. 148～153, 新建築社, 2007. 03
- ②-. 105 クローバーハウス 新建築 2007 年 05 月号, pp. 040～049, 新建築社, 2007. 04
- ②-. 106 日本橋 川辺の家 新建築住宅特集 2007 年 06 月号, pp. 108～113, 新建築社, 2007. 05
- ②-. 107 モザイクの家 新建築 2007 年 07 月号, pp. 104～111, 新建築社, 2007. 06
- ②-. 108 朱雀の家 新建築住宅特集 2007 年 08 月号, pp. 044～053, 新建築社, 2007. 07
- ②-. 109 湯河原の家 新建築住宅特集 2007 年 08 月号, pp. 118～124, 新建築社, 2007. 07
- ②-. 110 都筑の家 新建築住宅特集 2007 年 11 月号, pp. 084～089, 新建築社, 2007. 10
- ②-. 111 KATA House 新建築住宅特集 2007 年 11 月号, pp. 036～045, 新建築社, 2007. 10
- ②-. 112 小鉄 [Kotetsu] 新建築住宅特集 2007 年 12 月号, pp. 044～051, 新建築社, 2007. 11
- ②-. 113 八丁堀・櫻庵 LC-SH12 新建築住宅特集 2007 年 12 月号, pp. 036～043, 新建築社, 2007. 11
- ②-. 114 N 新建築 2007 年 12 月号, pp. 142～151, 新建築社, 2007. 12
- ②-. 115 狛江の住宅 新建築住宅特集 2009 年 09 月号, pp. 120～129, 新建築社, 2009. 08
- ②-. 116 IRONHOUSE 新建築住宅特集 2008 年 01 月号, pp. 109～125, 新建築社, 2007. 12
- ②-. 117 空の家 新建築住宅特集 2008 年 02 月号, pp. 120～125, 新建築社, 2008. 01
- ②-. 118 甲府の家(radiate) 新建築住宅特集 2008 年 02 月号, pp. 058～067, 新建築社, 2008. 01
- ②-. 119 名古屋・守山の家 新建築住宅特集 2008 年 02 月号, pp. 074～081, 新建築社, 2008. 01
- ②-. 120 北本の家 新建築住宅特集 2008 年 03 月号, pp. 134～142, 新建築社, 2008. 02
- ②-. 121 舞浜の住宅 新建築住宅特集 2008 年 03 月号, pp. 092～097, 新建築社, 2008. 02
- ②-. 122 弦巻の住宅 新建築住宅特集 2008 年 04 月号, pp. 062～071, 新建築社, 2008. 03
- ②-. 123 カヒナ 新建築住宅特集 2008 年 05 月号, pp. 106～111, 新建築社, 2008. 04
- ②-. 124 Base Valley 新建築 2008 年 07 月号, pp. 156～167, 新建築社, 2008. 07
- ②-. 125 回廊のある家 新建築住宅特集 2008 年 08 月号, pp. 116～123, 新建築社, 2008. 07
- ②-. 126 OUCHI 新建築住宅特集 2008 年 09 月号, pp. 112～117, 新建築社, 2008. 08
- ②-. 127 箱の家-124[佐藤邸] 新建築住宅特集 2008 年 10 月号, pp. 070～077, 新建築社, 2008. 09
- ②-. 128 KONDO HOUSE 新建築住宅特集 2008 年 11 月号, pp. 078～087, 新建築社, 2008. 10
- ②-. 129 光の矩形 新建築住宅特集 2009 年 01 月号, pp. 022～033, 新建築社, 2008. 12
- ②-. 130 相間の谷 新建築住宅特集 2009 年 01 月号, pp. 034～043, 新建築社, 2008. 12
- ②-. 131 御代田山荘 新建築住宅特集 2009 年 01 月号, pp. 098～107, 新建築社, 2008. 12
- ②-. 132 宇都宮のハウス 新建築 2009 年 01 月号, pp. 134～141, 新建築社, 2000. 05
- ②-. 133 廊の家 新建築住宅特集 2009 年 01 月号, pp. 126～131, 新建築社, 2008. 12
- ②-. 134 GO-TEI 新建築住宅特集 2009 年 02 月号, pp. 030～041, 新建築社, 2009. 01
- ②-. 135 ②-VELA 新建築住宅特集 2009 年 03 月号, pp. 064～071, 新建築社, 2009. 02
- ②-. 136 天地のいえ 新建築 2009 年 07 月号, pp. 048～061, 新建築社, 2009. 07
- ②-. 137 我孫子の住宅 Kokage 新建築住宅特集 2009 年 09 月号, pp. 048～055, 新建築

社, 2009. 08

- ②-. 138 SAハウス 新建築住宅特集 2009年11月号, pp. 026~033, 新建築社, 2009. 10
- ②-. 139 Piccolo Teatro 新建築住宅特集 2009年11月号, pp. 116~119, 新建築社, 2009. 10
- ②-. 140 空方の家 新建築住宅特集 2009年12月号, pp. 076~083, 新建築社, 2009. 11
- ②-. 141 MA-HOUSE 新建築住宅特集 2010年01月号, pp. 108~121, 新建築社, 2009. 12
- ②-. 142 ひたち野うしくの家 新建築住宅特集 2010年01月号, pp. 040~047, 新建築社, 2000. 12
- ②-. 143 dada house 新建築住宅特集 2010年02月号, pp. 074~081, 新建築社, 2010. 01
- ②-. 144 たまらん坂の家 新建築住宅特集 2010年02月号, pp. 082~089, 新建築社, 2010. 01
- ②-. 145 Tree house 新建築 2010年02月号, pp. 030~039, 新建築社, 2010. 01
- ②-. 146 流星庵 新建築住宅特集 2010年02月号, pp. 112~121, 新建築社, 2010. 01
- ②-. 147 夜ノ森の家 新建築 2010年02月号, pp. 066~073, 新建築社, 2010. 01
- ②-. 148 内包する家 新建築住宅特集 2010年03月号, pp. 088~093, 新建築社, 2010. 02
- ②-. 149 堀切の家 新建築住宅特集 2010年03月号, pp. 098~105, 新建築社, 2010. 03
- ②-. 150 半居 新建築 2010年04月号, pp. 110~116, 新建築社, 2010. 04
- ②-. 151 富士見町の家 新建築住宅特集 2010年05月号, pp. 024~031, 新建築社, 2010. 04
- ②-. 152 pisopiso 新建築住宅特集 2010年05月号, pp. 094~101, 新建築社, 2010. 04
- ②-. 153 A-ring 新建築住宅特集 2010年06月号, pp. 034~045, 新建築社, 2010. 05
- ②-. 154 地中の棲処 新建築住宅特集 2010年07月号, pp. 040~049, 新建築社, 2010. 06

### 第3章における画像の出典元資料③

(各資料において使用された写真や図版などが掲載されている頁を記入している)

- ③-001 深沢の家 新建築住宅特集 2011年10月号 p82 新建築社 2011,09
- ③-002 佐々木上原の家 新建築住宅特集 2011年10月号 p86 新建築社 2011,09
- ③-003 祐天寺の家 新建築住宅特集 2011年9月号 p76 新建築社 2011,08
- ③-004 大岡山の住宅 新建築住宅特集 2011年5月号 p132 新建築社 2011,04
- ③-005 HTG 新建築 2011年3月号 p103 新建築社 2011,02
- ③-006 東京郊外の家 新建築住宅特集 2010年6月号 p82 新建築社 2010,05
- ③-007 Kanta's Jungle LCSH-#14 新建築住宅特集 2009年7月号 p24 新建築社 2009,06
- ③-008 OUCHI-06 新建築住宅特集 2009年4月号 p44 新建築社 2009,03
- ③-009 楓燕居 新建築住宅特集 2009年2月号 p22 新建築社 2009,01
- ③-010 変形地・OFFSET 新建築住宅特集 2008年9月号 p118 新建築社 2008,08
- ③-011 G-house 新建築住宅特集 2008年7月号 p130 新建築社 2008,06
- ③-012 K邸 新建築住宅特集 2008年4月号 p120 新建築社 2008,04
- ③-013 IRONHOUSE 新建築住宅特集 2008年1月号 p120 新建築社 2007,12
- ③-014 白山通りのいえ 新建築 2007年5月号 p171 新建築社 2007,04
- ③-015 e-HOUSE 新建築住宅特集 2006年7月号 p57 新建築社 2006,06
- ③-016 みちの家 新建築住宅特集 2006年7月号 p99 新建築社 2006,06
- ③-017 大口の家 新建築住宅特集 2005年12月号 p95 新建築社 2005,11
- ③-018 HIJIYAMA DUPLEX 新建築住宅特集 2004年11月号 p112 新建築社 2004,10
- ③-019 デッキハウス 新建築住宅特集 2004年11月号 p73 新建築社 2004,10
- ③-020 G 新建築 2004年9月号 p142 新建築社 2004,08
- ③-021 九段の家 新建築住宅特集 2004年8月号 p126 新建築社 2004,07
- ③-022 S-HOUSE 新建築住宅特集 2004年04月号 p43 新建築社 2004,03
- ③-023 Double-L 新建築住宅特集 2003年5月号 p121 新建築社 2003,04
- ③-024 ナチュラルウェッジ 新建築住宅特集 2003年3月号 p105 新建築社 2003,02
- ③-025 月寒の家 新建築住宅特集 2003年2月号 p142 新建築社 2003,01
- ③-026 SUGAR 新建築住宅特集 2002年7月号 p105 新建築社 2002,06
- ③-027 F1-ガレージ 新建築住宅特集 2002年6月号 p27 新建築社 2002,05
- ③-028 仲池上の住宅 新建築住宅特集 2000年8月号 p106 新建築社 2000,08
- ③-029 西田邸 新建築住宅特集 2000年6月号 p124 新建築社 2000,05
- ③-030 白金の家 新建築住宅特集 2000年5月号 p36 新建築社 2000,04
- ③-031 相模大野の家 新建築住宅特集 1999年11月号 p146 新建築社 1999,10
- ③-032 富ヶ谷の住まい 新建築住宅特集 1999年10月号 p59 新建築社 1999,09
- ③-033 姫路の家 新建築住宅特集 1999年9月号 p140 新建築社 1999,08
- ③-034 0-house 新建築住宅特集 1999年5月号 p111 新建築社 1999,04

- ③-035 断層の家 新建築住宅特集 1998年11月号 p104 新建築社 1998,10
- ③-036 断床の家 新建築住宅特集 1998年11月号 p112 新建築社 1998,10
- ③-037 南青山の家 新建築住宅特集 1998年10月号 p50 新建築社 1998,09
- ③-038 立体土間の家 新建築住宅特集 1998年9月号 p100 新建築社 1998,08
- ③-039 大森の住宅 新建築住宅特集 1998年8月号 p73 新建築社 1998,07
- ③-040 阪田小屋 新建築住宅特集 1998年6月号 p69 新建築社 1998,05
- ③-041 美原の家 新建築住宅特集 1998年5月号 p46 新建築社 1998,04
- ③-042 江東の家 新建築住宅特集 1997年12月号 p76 新建築社 1997,11
- ③-043 南平台のアトリエ 新建築住宅特集 1997年10月号 p130 新建築社 1997,10
- ③-044 CAGE HOUSE 新建築住宅特集 1997年7月号 p98 新建築社 1997,06
- ③-045 遠ざかる家 新建築住宅特集 1997年5月号 p34 新建築社 1997,04
- ③-046 S-HOUSE 新建築住宅特集 1997年2月号 p35 新建築社 1997,01
- ③-047 曲り屋の家 新建築住宅特集 1996年9月号 p57 新建築社 1996,08
- ③-048 CRYSTAL UNIT II 新建築住宅特集 1996年8月号 p135 新建築社 1996,07
- ③-049 花見台のある家 新建築住宅特集 1996年6月号 p146 新建築社 1996,05
- ③-050 お花茶屋の家 新建築住宅特集 1995年10月号 p149 新建築社 1995,09
- ③-051 TAKAMATSU HOUSE 新建築住宅特集 1995年2月号 p60 新建築社 1995,01
- ③-052 MUSEE DE RUKI 新建築住宅特集 1994年11月号 p89 新建築社 1994,10
- ③-053 亀戸の家 新建築住宅特集 1994年10月号 p59 新建築社 1994,09
- ③-054 目黒不動の家 新建築住宅特集 1994年6月号 p47 新建築社 1994,05
- ③-055 吾妻通りの家 新建築住宅特集 1994年6月号 p102 新建築社 1994,05
- ③-056 ヨコスカハウス 新建築住宅特集 1994年6月号 p110 新建築社 1994,05
- ③-057 大井町の家 新建築住宅特集 1994年1月号 p96 新建築社 1993,12
- ③-058 今倉邸 新建築住宅特集 1993年3月号 p64 新建築社 1993,02
- ③-059 山坂の家 新建築住宅特集 1992年11月号 p26 新建築社 1992,10
- ③-060 駒場の家 新建築住宅特集 1991年10月号 p119 新建築社 1991,09
- ③-061 MIH 新建築住宅特集 1991年4月号 p116 新建築社 1991,03
- ③-062 吉田邸 長屋のクライスラービル 新建築住宅特集 1985年 autumn p86 新建築社 1985
- ③-063 見上げの家 新建築住宅特集 2012年12月号 p183 新建築社 2012,11
- ③-064 元浅草の住宅 新建築住宅特集 2012年3月号 p82 新建築社 2012,03
- ③-065 川口邸 新建築住宅特集 2011年11月号 p55 新建築社 2011,10
- ③-066 house M 新建築住宅特集 2011年4月号 p68 新建築社 2011,03
- ③-067 百人町の家 新建築住宅特集 2010年12月号 p60 新建築社 2010,11
- ③-068 YK 新建築住宅特集 2010年7月号 p108 新建築社 2010,06
- ③-069 House H 新建築 2009年12月号 p152 新建築社 2009,11
- ③-070 [laatikko] 新建築住宅特集 2009年11月号 p20 新建築社 2009,10
- ③-071 cross air 新建築住宅特集 2009年9月号 p115 新建築社 2009,08

- ③-072 柿の木坂の家 新建築住宅特集 2009年6月号 p24 新建築社 2009,05
- ③-073 練馬の家 新建築住宅特集 2008年12月号 p54 新建築社 2008,11
- ③-074 SWING 新建築住宅特集 2008年11月号 p100 新建築社 2008,10
- ③-075 柱と床 新建築住宅特集 2008年7月号 p25 新建築社 2008,06
- ③-076 M"異化された場 新建築住宅特集 2007年6月号 p78 新建築社 2007,05
- ③-077 TROLLEY 新建築住宅特集 2007年6月号 p95 新建築社 2007,05
- ③-078 H"Orange 新建築住宅特集 2007年5月号 p147 新建築社 2007,04
- ③-079 庸 新建築住宅特集 2007年2月号 p53 新建築社 2007,01
- ③-080 WHITE BASE 新建築住宅特集 2006年11月号 p66 新建築社 2006,10
- ③-081 東北沢の住宅 新建築住宅特集 2006年7月号 p134 新建築社 2006,06
- ③-082 三角敷地の家 新建築住宅特集 2006年5月号 p96 新建築社 2006,04
- ③-083 HOUSE SH 新建築住宅特集 2006年2月号 p101 新建築社 2006,01
- ③-084 ヨウキ 新建築住宅特集 2005年11月号 p126 新建築社 2005,10
- ③-085 とやまの家 新建築住宅特集 2005年9月号 p42 新建築社 2005,08
- ③-086 田園調布の小さな家 新建築住宅特集 2005年8月号 p122 新建築社 2005,07
- ③-087 武庫之荘F邸 新建築住宅特集 2005年6月号 p125 新建築社 2005,05
- ③-088 Nt-house 新建築住宅特集 2005年2月号 p79 新建築社 2005,01
- ③-089 新中野の住宅 新建築住宅特集 2004年9月号 p122 新建築社 2004,08
- ③-090 襲の家 新建築住宅特集 2004年7月号 p71 新建築社 2004,06
- ③-091 アビコ 新建築住宅特集 2004年3月号 p84 新建築社 2004,02
- ③-092 殻の家 新建築住宅特集 2003年11月号 p68 新建築社 2011,09
- ③-093 G&G HOUSE 新建築住宅特集 2003年5月号 p54 新建築社 2003,04
- ③-094 M邸 新建築住宅特集 2002年8月号 p49 新建築社 2002,07
- ③-095 鶴ノ木の家 新建築住宅特集 2002年7月号 p85 新建築社 2002,06
- ③-096 元麻布の家 新建築住宅特集 2002年5月号 p99 新建築社 2002,04
- ③-097 新緑住居 新建築住宅特集 2001年12月号 p91 新建築社 2001,11
- ③-098 空をつかまえる家 新建築住宅特集 2001年11月号 p139 新建築社 2001,10
- ③-099 ホワイトボックス 新建築住宅特集 2001年7月号 p61 新建築社 2001,06
- ③-100 池田山の住宅 新建築住宅特集 2001年5月号 p43 新建築社 2001,04
- ③-101 4・1 新建築住宅特集 2000年11月号 p97 新建築社 2000,10
- ③-102 鵜沼海岸の家 新建築住宅特集 2000年11月号 p48 新建築社 2000,10
- ③-103 g"house 新建築住宅特集 2000年4月号 p94 新建築社 2000,03
- ③-104 KUSハウス 新建築住宅特集 2000年3月号 p42 新建築社 2000,02
- ③-105 八雲の家 新建築住宅特集 1999年12月号 p26 新建築社 1999,11
- ③-106 福島の家 新建築住宅特集 1999年11月号 p61 新建築社 1999,10
- ③-107 ナチュラルシェルター 新建築住宅特集 1999年10月号 p72 新建築社 1999,09
- ③-108 国立の住宅 新建築住宅特集 1999年10月号 p82 新建築社 2011,09

- ③-109 「空」の露台 新建築住宅特集 1998年12月号 p113 新建築社 1998,11
- ③-110 曾谷の家 新建築住宅特集 1998年11月号 p103 新建築社 1998,10
- ③-111 駒込曙町の住宅 新建築住宅特集 1998年10月号 p87 新建築社 1998,09
- ③-112 Strata 新建築住宅特集 1998年8月号 p158 新建築社 1998,07
- ③-113 お花茶屋すきっぱー 新建築住宅特集 1998年6月号 p128 新建築社 1998,05
- ③-114 Re-Site House 新建築住宅特集 1998年5月号 p91 新建築社 1998,04
- ③-115 PF-2 新建築住宅特集 1998年4月号 p114 新建築社 1998,03
- ③-116 階段収納の家 新建築住宅特集 1998年3月号 p119 新建築社 1998,02
- ③-117 ちっちゃな家 新建築住宅特集 1997年11月号 p125 新建築社 1997,10
- ③-118 永久保邸 新建築住宅特集 1997年9月号 p77 新建築社 1997,08
- ③-119 FORMATION 新建築住宅特集 1997年5月号 p133 新建築社 1997,04
- ③-120 鷹番の家 新建築住宅特集 1997年5月号 p162 新建築社 1997,04
- ③-121 街なかの家 新建築住宅特集 1997年2月号 p144 新建築社 1997,01
- ③-122 ノコギリ屋根の家 新建築住宅特集 1997年1月号 p130 新建築社 1996,12
- ③-123 中伊豆の家 新建築住宅特集 1996年8月号 p144 新建築社 1996,07
- ③-124 新宿大久保の家 新建築住宅特集 1995年7月号 p132 新建築社 1995,06
- ③-125 甲府の家 新建築住宅特集 1995年2月号 p156 新建築社 1995,01
- ③-126 中塚ハウス 新建築住宅特集 1995年1月号 p29 新建築社 1994,12
- ③-127 WEB HOUSE 新建築住宅特集 1994年11月号 p77 新建築社 1994,10
- ③-128 アルテラーレ町屋 新建築住宅特集 1994年7月号 p134 新建築社 1994,06
- ③-129 境界線上の家 新建築住宅特集 1994年4月号 p133 新建築社 1994,03
- ③-130 一方堂一和菓子処とすまい 新建築住宅特集 1993年8月号 p93 新建築社 1993,07
- ③-131 上連雀の家 新建築住宅特集 1992年11月号 p43 新建築社 1992,10
- ③-132 中野の家 新建築住宅特集 1992年7月号 p59 新建築社 1992,06
- ③-133 中田邸 新建築住宅特集 1992年5月号 p69 新建築社 1992,04
- ③-134 石壁の家 新建築住宅特集 1991年7月号 p80 新建築社 1991,06
- ③-135 鶴見町の家 新建築住宅特集 1991年3月号 p122 新建築社 1991,02
- ③-136 路地裏の家 新建築住宅特集 1990年10月号 p50 新建築社 1990,09
- ③-137 向島三枚仕立て 新建築住宅特集 1990年6月号 p85 新建築社 1990,05
- ③-138 YAOKICHI 新建築住宅特集 1990年4月号 p82 新建築社 1990,03
- ③-139 ブロック HOUSE-2 新建築住宅特集 1989年2月号 p25 新建築社 1989,01
- ③-140 F HOUSE 新建築住宅特集 1987年10月号 p104 新建築社 1987,09
- ③-141 信州の家 新建築住宅特集 1985年 autumn p193 新建築社 1985
- ③-142 中目黒の家 新建築住宅特集 2012年10月号 p132 新建築社 2012,09
- ③-143 K 新建築住宅特集 2012年7月号 p58 新建築社 2012,06
- ③-144 大宮の家 新建築住宅特集 2012年6月号 p148 新建築社 2012,05
- ③-145 N邸 新建築住宅特集 2012年6月号 p61 新建築社 2012,05

- ③-146 調布の家 新建築住宅特集 2012年3月号 p98 新建築社 2012,02
- ③-147 スキマノイエ 新建築住宅特集 2012年3月号 p62 新建築社 2012,02
- ③-148 法面庭の家 新建築住宅特集 2012年2月号 p122 新建築社 2012,01
- ③-149 桜の家 新建築住宅特集 2011年12月号 p118 新建築社 2011,11
- ③-150 二重螺旋の家 新建築 2011年12月号 p75 新建築社 2011,11
- ③-151 御所西の家 新建築住宅特集 2011年11月号 p120 新建築社 2011,10
- ③-152 地面と屋根上の家 新建築 2011年4月号 p118 新建築社 2011,03
- ③-153 SKY GARDEN HOUSE 新建築住宅特集 2011年3月号 p82 新建築社 2011,02
- ③-154 ミンナノイエ 新建築住宅特集 2010年12月号 p131 新建築社 2010,11
- ③-155 タワーまちや 新建築住宅特集 2010年7月号 p91 新建築社 2010,06
- ③-156 妙蓮寺の店舗併用住宅 新建築住宅特集 2009年8月号 p60 新建築社 2009,07
- ③-157 美術館のような家 新建築住宅特集 2009年3月号 p130 新建築社 2009,02
- ③-158 ③-00VELA 新建築住宅特集 2009年3月号 p67 新建築社 2009,02
- ③-159 DOUBLE CUBE 新建築住宅特集 2008年10月号 p47 新建築社 2008,09
- ③-160 アトリウムハウス 新建築住宅特集 2008年9月号 p94 新建築社 2011,08
- ③-161 露地の家 新建築住宅特集 2008年8月号 p133 新建築社 2008,07
- ③-162 Oval Panel House 新建築住宅特集 2007年12月号 p73 新建築社 2007,11
- ③-163 colors 新建築住宅特集 2007年1月号 p151 新建築社 2006,12
- ③-164 box k 新建築住宅特集 2006年1月号 p42 新建築社 2005,12
- ③-165 粉浜の家Ⅳ 新建築住宅特集 2006年1月号 p50 新建築社 2005,12
- ③-166 東京ハウスカド001 新建築住宅特集 2006年1月号 p127 新建築社 2005,12
- ③-167 UK 新建築住宅特集 2005年12月号 p47 新建築社 2005,11
- ③-168 松原のduplex 新建築住宅特集 2005年11月号 p103 新建築社 2005,10
- ③-169 studio d 新建築住宅特集 2005年7月号 p43 新建築社 2005,06
- ③-170 赤堤通りの家 新建築住宅特集 2005年6月号 p103 新建築社 2005,05
- ③-171 Ora 新建築住宅特集 2005年4月号 p125 新建築社 2005,03
- ③-172 Ca 新建築住宅特集 2005年1月号 p132 新建築社 2004,12
- ③-173 K邸 新建築住宅特集 2004年4月号 p105 新建築社 2004,03
- ③-174 住宅#201 新建築住宅特集 2004年4月号 p131 新建築社 2004,03
- ③-175 自由が丘のコートハウス 新建築住宅特集 2003年5月号 p85 新建築社 2003,04
- ③-176 箱の家-49 新建築住宅特集 2002年4月号 p111 新建築社 2002,03
- ③-177 A residence+studio 新建築住宅特集 2002年1月号 p141 新建築社 2001,12
- ③-178 箕面半町の家 新建築住宅特集 2001年5月号 p145 新建築社 2001,04
- ③-179 白のアポロン 新建築住宅特集 2001年2月号 p61 新建築社 2001,01
- ③-180 中村中町の家 新建築住宅特集 2000年11月号 p143 新建築社 2000,10
- ③-181 一橋学園・M邸 新建築住宅特集 2000年11月号 p127 新建築社 2000,10
- ③-182 ドミノ+ 新建築住宅特集 2000年9月号 p108 新建築社 2000,08

- ③-183 新座の方舟 新建築住宅特集 2000年6月号 p133 新建築社 2000,05
- ③-184 夙川の家 新建築住宅特集 1999年10月号 p111 新建築社 1999,09
- ③-185 K・house 新建築住宅特集 1999年9月号 p147 新建築社 1999,08
- ③-186 北島の家 新建築住宅特集 1999年6月号 p68 新建築社 1999,05
- ③-187 岐阜の住宅 新建築住宅特集 1998年12月号 p80 新建築社 1998,11
- ③-188 GOO FIELD 新建築住宅特集 1998年7月号 p145 新建築社 1998,06
- ③-189 ノア 1998 新建築住宅特集 1998年3月号 p129 新建築社 1998,02
- ③-190 パティオのある家 新建築住宅特集 1998年1月号 p31 新建築社 1997,12
- ③-191 北原さんの家 新建築住宅特集 1997年11月号 p132 新建築社 1997,10
- ③-192 邯鄲ハウス 新建築住宅特集 1997年10月号 p161 新建築社 1997,09
- ③-193 明石の家 新建築住宅特集 1997年8月号 p82 新建築社 1997,07
- ③-194 SCHOLA 新建築住宅特集 1997年8月号 p124 新建築社 1997,07
- ③-195 CASA 0 新建築住宅特集 1997年3月号 p158 新建築社 1997,02
- ③-196 上高田の住宅 新建築住宅特集 1996年6月号 p153 新建築社 1996,05
- ③-197 Healtecture 小森 新建築住宅特集 1996年4月号 p65 新建築社 1996,03
- ③-198 石津邸 新建築住宅特集 1996年4月号 p85 新建築社 1996,03
- ③-199 Y STUDIO 新建築住宅特集 1995年9月号 p112 新建築社 1995,08
- ③-200 T-house 新建築住宅特集 1995年7月号 p96 新建築社 1995,06
- ③-201 藤枝 能舞台のある家 新建築住宅特集 1995年6月号 p155 新建築社 1995,05
- ③-202 東大泉の住宅 1994 新建築住宅特集 1995年2月号 p52 新建築社 1995,01
- ③-203 小路の家 新建築住宅特集 1994年11月号 p55 新建築社 1994,10
- ③-204 風くるまの家 新建築住宅特集 1994年10月号 p122 新建築社 1994,09
- ③-205 西荻の住宅 新建築住宅特集 1994年9月号 p78 新建築社 1994,08
- ③-206 彫刻家の住宅 新建築住宅特集 1994年7月号 p103 新建築社 1994,06
- ③-207 f ホールの家 新建築住宅特集 1994年4月号 p98 新建築社 1994,03
- ③-208 北国の家 雪中楽 新建築住宅特集 1994年3月号 p139 新建築社 1994,02
- ③-209 オプーレ 新建築住宅特集 1993年12月号 p100 新建築社 1993,11
- ③-210 連弧の家 新建築住宅特集 1993年2月号 p124 新建築社 1993,01
- ③-211 PIER HOUSE 新建築住宅特集 1992年12月号 p55 新建築社 1992,11
- ③-212 辰川の家 新建築住宅特集 1992年11月号 p81 新建築社 1992,10
- ③-213 F HOUSE 新建築住宅特集 1992年5月号 p89 新建築社 1992,04
- ③-214 九品仏永野邸 新建築住宅特集 1992年5月号 p55 新建築社 1992,04
- ③-215 時の帆船 新建築住宅特集 1988年04月号 p153 新建築社 1988,03

# 建築メディアにみる空間の情報伝達に内在する作法

## A STUDY ON THE NATURE OF EXPRESSION ABOUT SPATIAL INFORMATION IN ARCHITECTURAL MEDIA

125803 永瀬 智基

(主査 久野 紀光 准教授 副査 溝口 正人 教授 副査 伊藤 恭行 教授)

### 1. 序論

#### 1-1. 研究の背景および目的

“建築は不動である。ゆえに現地を訪れるのでなければ、建築の場合、何らかのメディアを通して情報を得るしかない”と五十嵐が指摘しているように<sup>註1)</sup>、実際に我々が身体を経験により理解することが可能な建築は数が限られているにもかかわらず、遠く離れた場所や、現存しない建築について知り得るのは、情報を介して空間を理解することに他ならない。つまり、建築の場合は実際の体験よりもメディアに掲載された情報を介して空間を理解することが通俗となっているのだが、それらの情報とは情報発信者(写真家や編集者など)が受信者に伝達するために解釈を加えて表現したものであると考えられる(図1)。ここで、本研究では情報発信者から受信者に向けてどのような情報伝達が行われているかに興味を据えて論考を行う。

さて、建築メディアに掲載されている情報を概観すると、写真やCGパースなどのような視覚的な体験の断片的な情報である「視覚像としての空間の情報」と、図面や言説のように特定の記号として表された「記号による空間の情報」の2種に大別することができる。これら2種に対して、①情報の理解に建築の専門知識を必要とせず、日常的に目にする可能性がある情報媒体、または目にする情報媒体と類似するものであること、②情報発信者による表現の自由度の高い情報媒体であること、という2点の条件を満たした情報媒体としてそれぞれ「写真」と「配置図」を分析対象に選定した。以上より本研究では「建築メディアにおける主要媒体である写真と配置図を題材にした分析を施し、空間

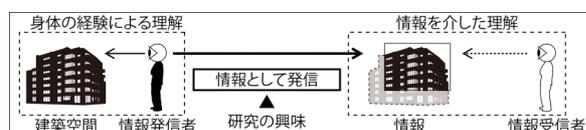


図1. 建築空間における情報伝達と情報による理解の仕組み

の情報伝達に内在する作法を抽出し、それらが如何なる建築空間の内容を、如何なる手段によって伝達しているのかを整理すること」を目的とする。特に、本研究では多種多様な建築メディアの中でも最も主要であると考えられる雑誌などの誌面によるメディアに焦点を絞ることとした。なお、本研究の構造は図2に示す通りである。

#### 1-2. 研究の位置づけ

本研究のように写真や図面を分析対象とする個別の既往知見はみられるものの、個々の情報媒体を建築メディアにおける情報の総体として扱う研究は類例に乏しい。ここで、本研究は、建築メディアにおける主要媒体である写真と配置図の分析によって得られた情報伝達の傾向を、言語学的な見地から整理する立場を採る。このように、情報伝達の一つである言語の構造に関する知見を援用して建築メディアにおける情報伝達の傾向を整理する点で、新規性を有した研究として位置付けることができる。

### 2. 写真による情報伝達についての分析

#### 2-1. 分析の目的

建築メディアにおいて視覚体験の断片的な情報である「視覚像としての空間の情報」が重要な役割を果たすことは疑う余地もない。写真に類似する情報媒体としてスケッチやCGも挙げられるが、これらは現存しない建築、あるいは未完の建築において写真の代わりに用いられることが多いことから、「視覚像としての空間の情報」としては写真が主要な媒体として位置づけられる。ここで、富永は建築空間の本質が“視点の移動を伴う継起的な体験”にあると報告しており<sup>註2)</sup>、また名取が指摘しているように単

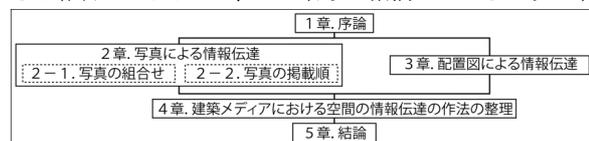


図2. 研究の構造図

体の写真は断片的な情報に過ぎず、組写真（並べられた複数の写真）の手法をとることで初めて体験的な建築空間についての伝達を可能にするとと言える<sup>注3)</sup>。なお、本研究における組写真とは、隣り合う2葉の写真を目指す「写真の組合せ」と、ひとつの建築に関する全ての一連の写真の並びを指す「写真の掲載順」と定義した。以上より、本章では「建築メディアに掲載されている写真を対象として、写真の組合せと写真の掲載順の2観点から分析を施すことで、写真による情報伝達の作法を抽出する」を目的とする。

## 2-2. 写真の組合せによる情報伝達

### 2-2-1. 分析の目的

ここでは、被写対象となる建築空間を固定したうえで、写真家などの情報発信者側の個性差を超えて共有される「写真の組合せ」の傾向を抽出するため、移動を伴う体験が重要視される回遊式庭園のなかでも特に資料数が豊富である桂離宮を被写対象とした写真集7誌（資料A～Gとする）を分析資料に選定する。これより、「桂離宮の写真集を分析資料とし、複数誌で共有される写真の組合せについて、写真の属性および写真間でどのような身体経験が行われるのかという観点から分析を施し、建築メディア上の写真の組合せによる情報伝達の傾向を把握すること」を本節の目的とする。

### 2-2-2. 分析の概要と結果

分析対象写真 847 葉のなかから複数誌において共有して発現する写真の組合せ 91 組（162 葉）を抽出し、それらについて被写対象となる空間がどのように写真内に納められているのかを判別した「写真の属性」と、組となる2葉の写真の間でどのような身体の移動が生じているのかを判別した「展開形式」の2観点により精査した。例えば、図3で示した組写真は複数誌において共有される組写真であるが、本稿では資料Fに掲載される組写真を用いて分析例を記述する。まず写真の属性の観点に着目すると、資料Fに

おける資料番号 No. 108、No. 109 の写真の属性はそれぞれ「室内-複数室」「室内-1室」であり、これより写真の属性の組合せは「室内-複数室×室内-1室」に分類できる。一方で写真の展開形式に着目すると、複数の室を眺めた後に奥の室のみを眺めるような身体的な移動が見て取れることから「拡大縮小」に分類できる。同様の手続きで全共有組写真について精査した結果、図3の事例のように「複数の室と1室を拡大（縮小）しながら眺めること」を意図した事例は複数例みられ、それらを「表現形式ケ」（図4）として分類した。このように、複数の事例で分析の観点の照合結果が一致するものを表現形式として分類した結果A～ケの9種が抽出された（図4）。ところで表現形式イは、「建物の外観全体とその一部分を近づき（遠のき）ながら眺めること」を意図しており、部分と全体を相互に眺めるという意味において表現形式ケと同様の内容を有した「部分・全体連続型」としてまとめることができる。同様の手続きを経て、写真の属性と展開形式の観点の照合により9種の表現形式を抽出し、それらの意味内容を整理することで、「空間移動想起型」「部分・全体連続型」「多角的連続型」「外観・周辺環境対応型」「同類情報並置型」の5種の情報伝達の型を導出した。

### 2-3. 写真の掲載順による情報伝達

#### 2-3-1. 分析の目的

本節では、情報発信側の条件を固定したうえで、様々な

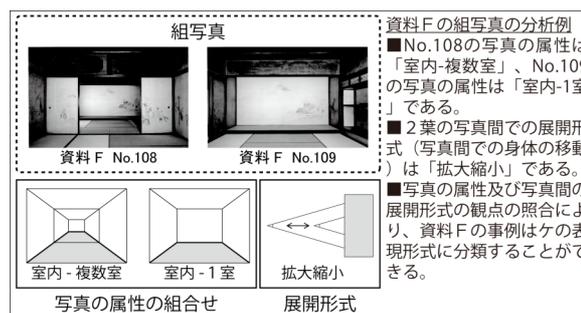


図3. 写真の組合せについての分析例

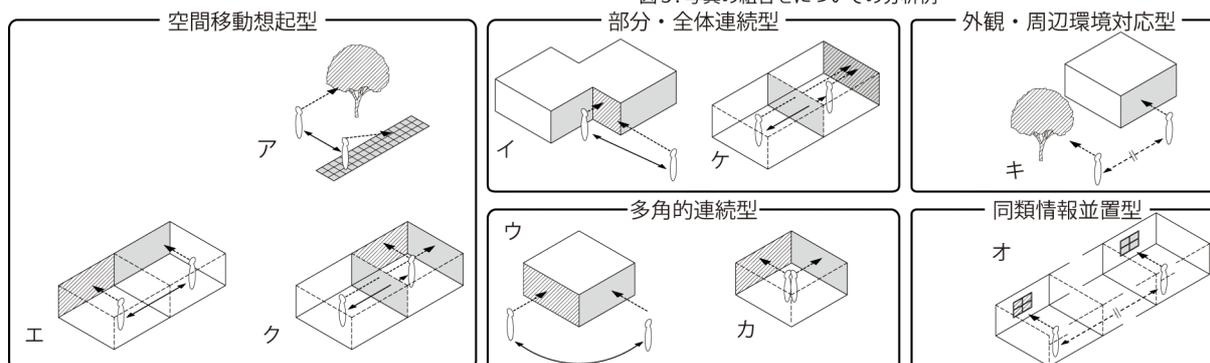


図4. 写真の組合せによる空間の情報伝達の型

建築の個性を超えて共有される「写真の掲載順」の傾向を抽出するために、建築の規模のばらつきが小さく、資料数が豊富である住宅の用途に限定して資料を選定する。即ち、「建築メディアに掲載される住宅作品の写真の掲載順を、写真群の順列および写真の属性による順列の観点から分析を施し、建築メディア上の写真の掲載順による情報伝達の傾向を把握すること」を本節の目的とする。なお、本研究では新建築誌、新建築住宅特集誌を分析資料とした。

### 2-3-2. 分析の概要と結果

分析対象である住宅作品 154 件について、外観写真あるいは内観写真が連続する部分をそれぞれ外観写真群および内観写真群と定義し、各写真群がどのように並ぶのかを判別した「写真群の順列」と、各写真群内の写真について、被写対象となる空間がどのように写真内に取められているのかを判別することで、写真の属性による順列を検討した「写真の属性による順列」の2観点から精査した。本稿では、図5に示した事例を用いて分析例を記述する。まず写真の属性に着目すると、写真1、2は外観写真が並んでいるためこれら2葉をまとめて外観写真群とし、写真3から

8は内観写真であることから、これら6葉をまとめて内観写真群とする。これより、写真群の順列は「外観写真群→内観写真群」分類となる。さらに写真群内の写真の順列に着目すると、外観写真群内の写真は「外形」「部分」の属性が並ぶことから、写真の順列は「展開(外形先行)」に分類できる。一方で、内観写真群内の写真は、図5に示すように「主室」のまとまり、「副室」のまとまりと続き、再び「主室」のまとまりが並ぶことから「回帰(主室先行)」に分類できる。図5の事例のように「外部で建物に近づくように移動し、その後に内観の主室からその他の室、最後に主室へと内部を移動するような眺め」を意図した事例は複数例みられ、それらを「表現形式④」として分類した(図6)。これらは建物を訪問するかのような写真群の並びであり、写真群の全て、あるいは最初の写真群のみに写真の階層順を有しており、表現形式①~③と併せて「訪問-階層型」の情報伝達の型としてまとめることができる。同様の手続きを経て、写真群の順列および写真群内の写真の順列の観点の照合により12の表現形式を抽出し、それらの意味内容を整理することで、「訪問-階層順」「訪問延長-階層順」

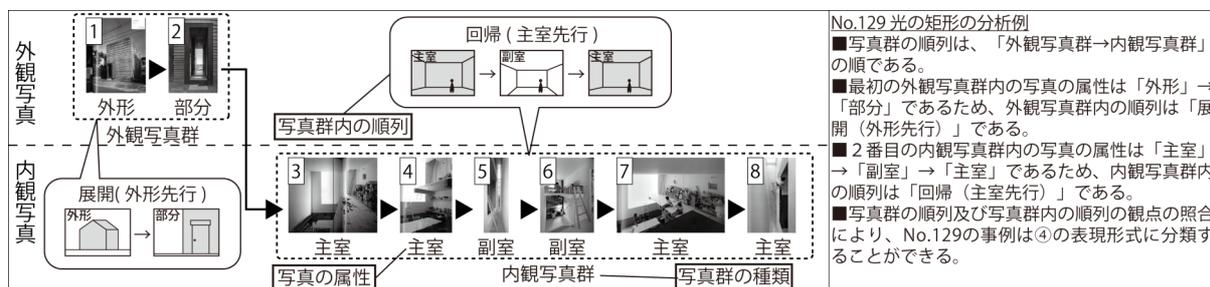


図5. 写真の掲載順についての分析例

写真の順列		写真群の順列	
		階層順	非階層順
訪問順	①	② ③ ④	辞去-非階層型
辞去順		⑤	
訪問延長順	⑥ ⑦	⑧ ⑨	辞去延長-非階層型
辞去延長順		⑩ ⑪	外観内観交互-非階層型
外観内観交互	⑫		

図6. 写真の掲載順による空間の情報伝達の型

「辞去－非階層順」「辞去延長－非階層順」「外観内観交互－階層順」「外観内観交互－非階層順」の6種の情報伝達の型を導出した。(図6)。

## 2-4. 写真による情報伝達

前節までに導出した知見を以下にまとめる。写真の組み合わせによる情報伝達の型としては「部分・全体連続型」「多角的連続型」「空間移動想起型」「同類情報並置型」「外観・周辺環境対応型」の5種を、写真の掲載順による情報伝達の型としては「訪問－階層順」「訪問延長－階層順」「辞去－非階層順」「辞去延長－非階層順」「外観内観交互－階層順」「外観内観交互－非階層順」の6種を導出した。これらの傾向に対して既往知見の援用によって意味内容を解釈したうえで、同じ意味内容として括り取られる複数の型を、写真による情報伝達の作法として導出する。結果的に、映像モンタージュには「自律的」な技法と「他律的」な技法が存在するという瓜生による報告と<sup>注4)</sup>、アフォーダンスに関して人間が備えている「仮想行動」についての中村による報告から<sup>注5)</sup>、「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」の2種の作法を導出した(図7)。「自律的仮想行動の伝達」とは、「訪問－階層順」のように、当該の情報から実際に空間を訪れずとも、直接的に伝達したい仮想行動理解を理解することが可能な情報伝達の作法である。一方で「他律的仮想行動の伝達」とは、例えば「空間移動想起型」のように、当該の情報を一見するだけでは本質の理解には至らず、写真以外の情報を手掛かりにすることによって、初めて本質の理解に至るという情報伝達の作法である。

一方で、上記の観点では整理することができない型については、F・ソシュールの言語の構造としての「統語構造」と「範列関係」を援用<sup>注6)</sup>することで、「統語構造の伝達」「範列関係の伝達」の2種の作法を導出した(図5)。

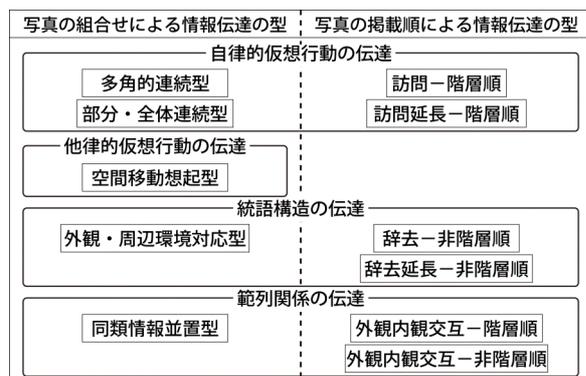


図7. 写真による情報伝達の作法

「統語構造の伝達」とは、「外観・周辺環境対応型」のように、複数の写真の組合せや配列によって、空間の構成あるいは空間の体験を理解させることを意図した情報伝達の作法である。また、「範列関係の伝達」とは、「同類情報並置型」のように、同一の建物内あるいは異なる建物間において、開口部や手掛けなどを連続させることで、特定の空間要素の統一性や差異性などを理解させることが可能な情報伝達の作法である。

以上、個別に分析を施した写真の組合せおよび写真の掲載順による情報伝達の型の意味内容を整理することによって、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「統語構造の伝達」「範列関係の伝達」の4種が導出された。

## 3. 配置図による情報伝達についての分析

### 3-1. 分析の目的

建築図面の中でも配置図は、敷地内における当該建築の配置の説明のみならず、様々な周辺環境の様相を説明する役割を担っていると予想される。ところで、我が国に1958年より制定された建築製図通則(JIS A0150)によれば、配置図は北を図面の上として描くことが原則とされているが、建築メディアを概観すると、北以外の方位を図面の上側とする配置図が散見される。これがある意図のもとになされているならば、図面の上側の方位(以降、図上方位とする)の設定は、実体の建築空間あるいは周辺環境を説明するために配置図の向きを意識したのだと考えられる。また、配置図において、描画者や編集者はどこまでの範囲を描くのかを決定する際、当該建築の周辺環境を説明するに事足りる括りとりや当該建築を配置図内のどこに据えるかの判断を行っていると思われる。ここに、配置図の「図上方位」、「描画範囲」、「描画位置」の設定は、実際の周辺環境を他者に伝達するためのある種の空間表現であると捉えることができる。以上より、本章では、「現代日本の住宅作品の配置図を対象に、実際の周辺環境に対する図上方位、描画範囲および描画位置の設定傾向を分析することで、配置図による情報伝達の作法を抽出すること」を目的とする。なお、本研究では新建築誌、新建築住宅特集誌を分析資料とした。

### 3-2. 分析の概要と結果

分析対象である住宅作品の配置図215葉に対して、図上方位、描画範囲および描画位置の3観点により精査した。

本稿では、図8に示した事例を用いて分析例を記述する。図上方位の観点に着目すると、事例の配置図は「南を上側」として描かれており、さらにこれは接道方位を東とすることで「前面道路位置を図面の左側」とする意図によるものと捉える事ができる。一方で、描画範囲に着目すると、最大で180mの範囲が描かれていることから、遠方域(全事例の描画範囲を算出したうえで判定)である。加えて、描画範囲と前面道路と直近の交差道路の幅員の大小関係との関連性を確認したところ、前面道路より交差道路の幅員が大きいことが分かった。ここから、「当該建物までの道のりを広範囲で描く」という意図が見て取れる。また、描画位置に着目すると、当該建物は図面上で右側に偏芯して描かれており、描画位置と当該建物を中心とした4象限に描かれている建物の平均建築面積との関連性を確認したところ、「当該建物を偏芯して描くことで、同一規模の建物が建ち並ぶ周辺環境の拡がりを示す」という意図が見て取れる。以上の3観点の照合結果が一致する事例が複数みられたことから、それらを図9に示すように表現形式⑬に分類した。この表現形式⑬と同様の意図のもとに描かれた表現

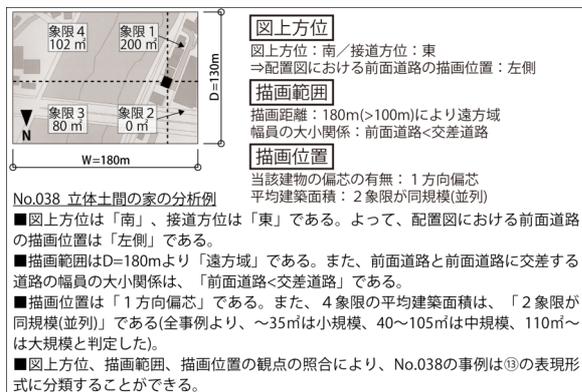


図8. 配置図についての分析例

形式⑩、⑪と共に、井上<sup>註7)</sup>による報告を援用して「**案内的伝達**」の作法としてまとめることができた。同様の手続きを経て、図上方位、描画範囲、描画位置の観点の照合により14種の表現形式を抽出し、それらを既往知見の援用しながら意味内容を整理することで、「主体中心的伝達」「体験的伝達」「案内的伝達」の3種の情報伝達の作法を導出した。これらについて図9のように周辺の建物の規模の大小関係(横軸)と周辺の道路の幅員の大小関係(縦軸)の枠組みで整理した結果、例えば、「案内的伝達」の作法は異なる規模が建ち並ぶ周辺環境においてのみ発現する作法であることが確認できた。

#### 4. 建築メディアにおける情報伝達の作法の整理

##### 4-1. 分析の目的

本章の目的は「建築メディアにおける写真および配置図による情報伝達の作法を、**伝達内容**、**伝達手段**の枠組みによって体系化すること」とする。

##### 4-2. 分析結果

前2章において導出した写真による情報伝達の作法である「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「範列関係の伝達」「統語構造の伝達」の4種、および配置図による建築空間の情報伝達の作法「主体中心的伝達」「体験的伝達」「案内的伝達」の3種について、言語学の見地より個々の特徴を照合しながら整理した。まず、F・ソシュールの報告によって<sup>註8)</sup>、言語による情報伝達において重要な要素として【伝達内容(伝達によって聞き手に理解させたい内容)】と、【伝達手段(意味を理解させるための手段)】の2水準があげられている。これらを建築メディアにおける情報伝達に適用することで、情報伝達の

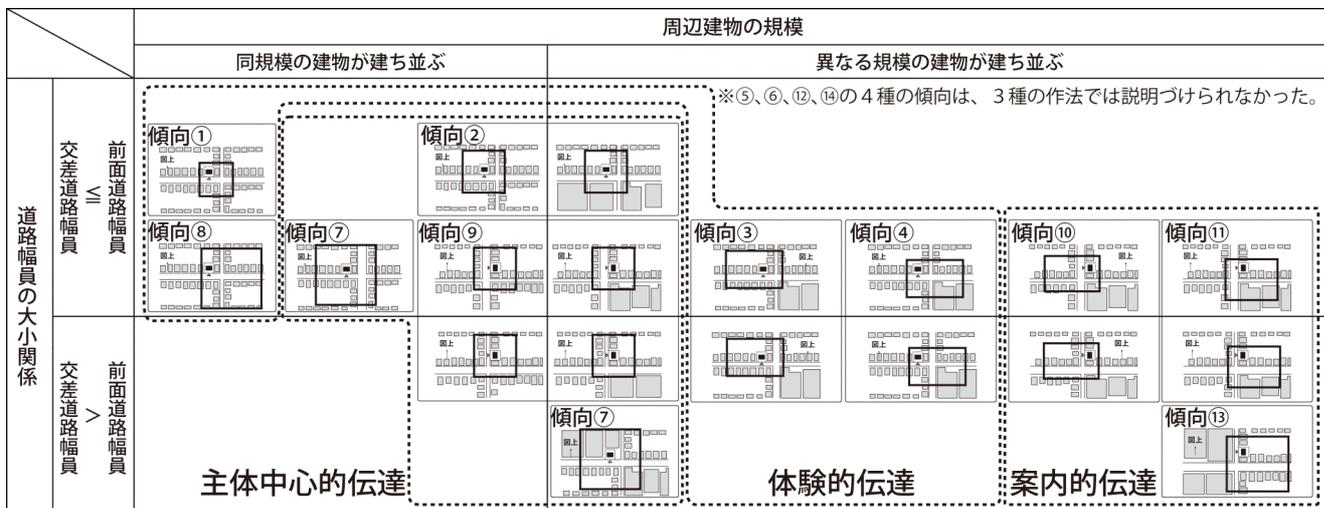


図9. 配置図による空間の情報伝達の作法

作法を上記の2つの枠組みにより体系化することを試みた。本稿では、第3章で導出した配置図における「案内的伝達」の作法を例に分析例を記述する。

「案内的伝達」の伝達内容に着目すると、当該建築のみならず、前面道路や周辺の建物を広域で描いていることから、当該建物と周辺環境が等価に扱われていると判読できるため、配置図に描かれている『全容』が伝達内容であると言える。一方で、伝達手段に着目すると、異なる規模の建物が建ち並ぶ周辺環境に対する当該建築の位置関係や、当該建物までの周辺道路を構成的に描こうとする意図が看取される。これは、奥山らの言語情報による「現象的側面」と「体系的側面」のうちの後者と類似した情報伝達の手段であり、これを本研究では『構成的手段』として整理した<sup>註9)</sup>。以上より、配置図における「案内的伝達」の作法は『構成的手段』を用いて配置図に描かれている『全容』を伝達する作法であると説明づけることができた(図10)。

以上、建築メディアにおける情報伝達の作法を、【伝達内容】と【伝達手段】の2種の枠組みによって整理した結果、伝達内容としては『主題』と『全容』によって、伝達手段として『時系的手段』『構成的手段』『羅列的手段』によって整理することができた。つまり、情報伝達に内在する作法とは、上記の伝達内容の枠組みにおける2観点と、伝達手段の枠組みにおける3観点によって体系化されることを明らかにした。

## 5. 結論

### 5-1. 本研究の結論

本研究では建築メディアに掲載される「視覚像としての空間の情報」および「記号による空間の情報」のうち、主要な情報媒体としてそれぞれ「写真」と「配置図」を対象に分析を施した。特に写真は「写真の組合せ」と「写真の掲載順」に観点を分けて分析を施した。

分析の結果、写真の組合せによる建築空間の情報伝達の型としては「部分・全体連続型」「多角的連続型」「空間移動想起型」「同類情報並置型」「外観・周辺環境対応型」の5種を、写真の掲載順による情報伝達の型としては「訪

問一階層順」「訪問延長一階層順」「辞去一非階層順」「辞去延長一非階層順」「外観内観交互一階層順」「外観内観交互一非階層順」の6種を導出した。それらの意味内容を整理することで、写真による情報伝達の作法として「自律的仮想行動の伝達」「他律的仮想行動の伝達」「配列関係の伝達」「統語構造の伝達」の4種を導出した。一方で、配置図による情報伝達の型として14種を導出し、それらの意味内容を整理することで配置図による情報伝達の作法として「主体中心的伝達」「体験的伝達」「案内的伝達」の3種を導出した。上記の作法について、【伝達内容】と【伝達手段】の2の枠組みから整理した結果、伝達内容における『主題』と『全容』の2観点と、伝達手段における『時系的手段』『構成的手段』『羅列的手段』の3観点によって建築メディアにおける情報伝達の作法を体系化されることを明らかにした。

#### 注記)

- 注1) 五十嵐太郎：情報・同時性・建築—建築をめぐるジャーナリズム，建築雑誌 Vol.14, No.1443, pp34~37, 1999
- 注2) 富永謙：建築巡礼 12 ル・コルビュジェー空間と人間の尺度一，丸善，1989
- 注3) 名取洋之助：写真の読みかた，岩波書店，1963
- 注4) 瓜生忠夫：新版モニター—ジェコ—映画の認識の系譜一，時事通信社，pp.106~149, 1981
- 注5) 中村良夫：風景学入門，中公新書，p.92, 1982
- 注6) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，pp.172~177, 1940
- 注7) 井上充夫：日本建築の空間，鹿島出版会，1969
- 注8) フェルディナン・ド・ソシュール：一般言語学講義，小林英夫 訳，岩波書店，pp.19~31, 1940
- 注9) 奥山信一ほか：戦後「新建築」誌における建築家の創作論—建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル—，日本建築学会会計画系論文集 No.477, pp.101~108, 1995.11

#### 本研究に関する業績

- 1) 永瀬智基、朝井美樹、久野紀光：室内透視モデルにおける眺めの選好とその判断要素，日本建築学会計画系論文集 No.704 2014/10, pp.2323-2331
- 2) 永瀬智基、久野紀光：写真による建築空間の表現方法について—桂離宮の写真集を事例として—，芸術工学会誌 No.62 2013/09, pp.47-54
- 3) 望月大地、永瀬智基、久野紀光：建築作品における配置図の描画表現，日本建築学会計画系論文集No.709 2015/3, pp.727-735
- 4) 久保井聡、永瀬智基、久野紀光：建築誌における現代日本住宅作品の建築写真の掲載順—建築写真の被写対象の属性・葉数・サイズを指標として—，日本建築学会会計画系論文集 No.717 2015/11, pp2691-2699

		伝達手段		
		時間の流れ	情報の位相	情報の羅列
伝達内容	主題	第2章:自律的仮想行動の伝達 第3章:体験的伝達	第3章:主体中心的伝達	第2章:範列関係の伝達1-※
	全容	第2章:他律的仮想行動の伝達	第2章:統語構造の伝達 第3章:案内的伝達	第2章:範列関係の伝達2-※

※同じ作法でも複数の伝達内容、伝達手段に渡り整理できる場合もある。

図10. 建築メディアにおける情報伝達に内在する作法の整理

## 謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるにあたり、長い間ご指導賜りました、指導教官である久野紀光准教授に深く感謝いたします。私が久野紀光研究室に所属したのは学部3回生の後期であるため、約6年半という長い年月を久野准教授のもとで過ごさせていただきました。その6年半の研究活動の集大成として本論文を執筆することができたことを大変うれしく感じております。

本論文は建築の表象をテーマに扱ったものであり、興味深いテーマである反面、前例が少なく難題として位置づけられたものの、私にとっても本論文の執筆は困難を極めるものでした。常に不慣れな実験や分析方法に戸惑い考えがまとまらない時でも、常に私が納得するまで久野准教授と議論をさせていただいたことには感謝に堪えません。本研究のテーマを熟知している久野准教授との議論は常に多くの示唆を得るものであり、私にとっては毎回の議論が刺激的でありました。

本論文のテーマが久野准教授の学位論文の関連テーマであることから、研究室における主軸となる研究を自身が受け継ぐことに喜びを感じながらも大きな不安もありましたが、無事に遂行に遂行できたことは今後の研究活動の大きな糧になると思っております。現在は研究者としての立場からは離れておりますが、再び研究をする日を待ち遠しく感じております。

最後に、研究者としての道を勧めていただいた久野准教授は改めて深い感謝の意を表します。

本論文の作成にあたり、審査委員として実にご助言をいただきました、伊藤恭行教授、溝口正人教授には深く感謝致します。伊藤教授からは、常に冷静で客観的なご指摘を頂いたことで、論文全体の論理構成をより明瞭に改善することが出来ました。一方で、溝口教授からは、著者の興味の所在の重要性についてご教授いただいたことで、本研究の立位置を明確にすることが出来ました。審査会にて両氏と多くの議論をさせていただいたことが、公聴会において、建築分野のみならず多くの分野の先生方から貴重なご意見、ご指摘を頂くことにつながったと思っております。

本論文の分析章にあたる3稿の論文の執筆に協力していただいた久野紀光研究室の後輩である朝井氏、久保井氏、望月氏には深く感謝致します。建築の表象という難題をテーマに設定したことで、慣れない分析や議論を強いることになってしまったと思いますが、多くの刺激と示唆を得ることができました。三氏との議論なくして本研究を遂行することはできなかったと思っております。また、実験に協力していただいた名古屋市立大学の多くの学生にも感謝致します。

最後に、博士後期課程への進学を快諾してくださり、常に温かく見守り、そして支援してくださった両親に対して深い感謝の意を表して、本論文の謝辞と致します。

2016年吉日

永瀬智基